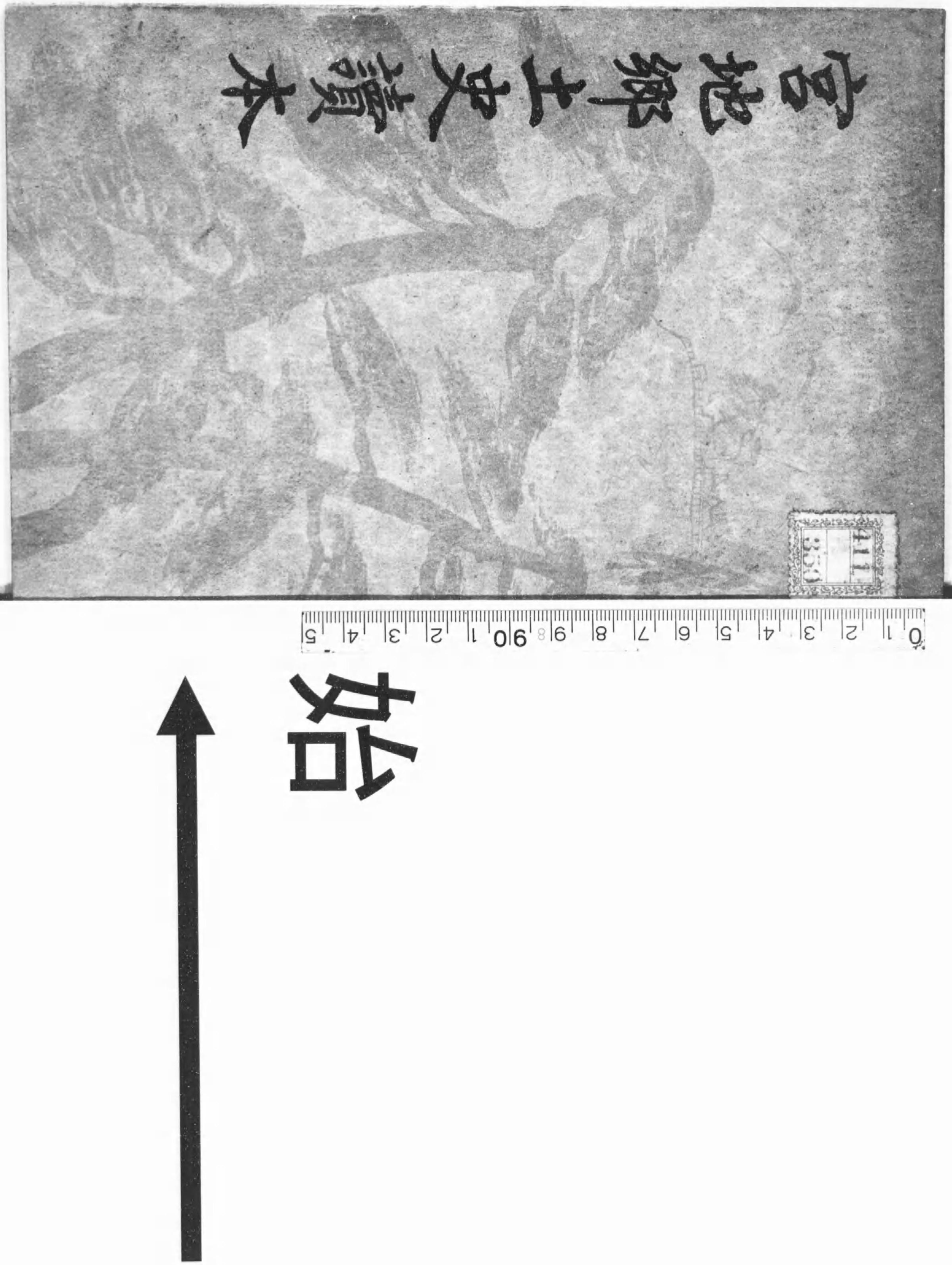
阿爸黃牛的孩子



411
800

特 216
914

紀元二千六百年記念

宮地鄉土史讀本

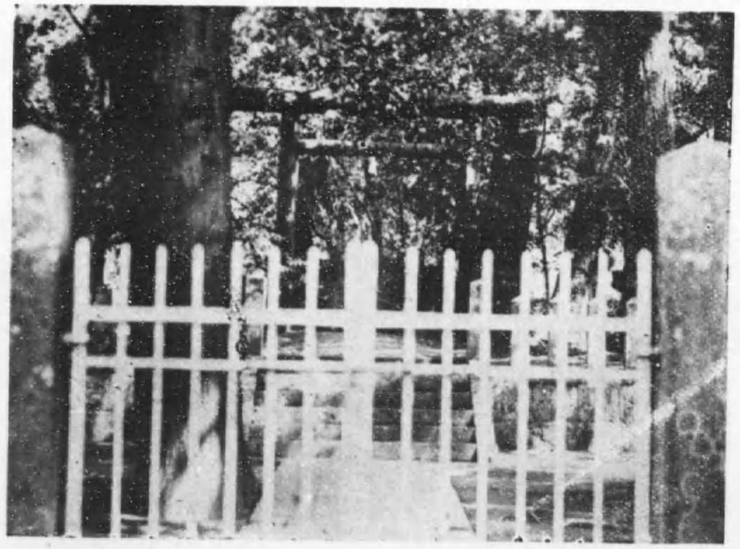
熊本縣八代郡宮地國民學校
熊本縣八代郡宮地村立宮地青年學校

昭和十六年六月
帝國圖書館

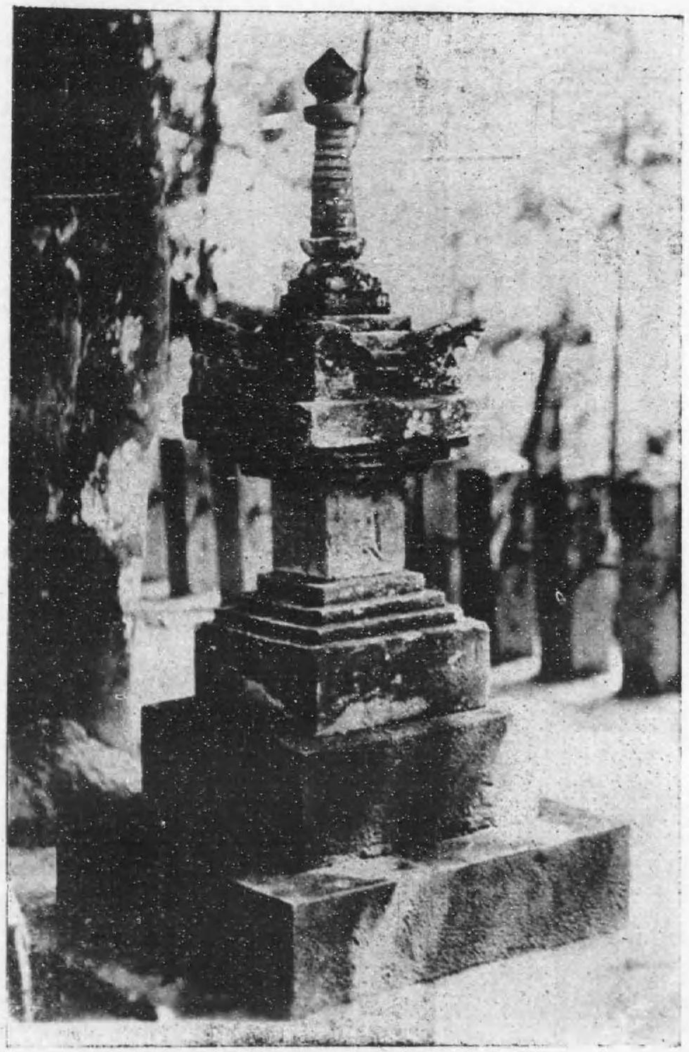
懐良親王御畫像　　悟眞寺所藏

悟眞寺御靈殿奉安

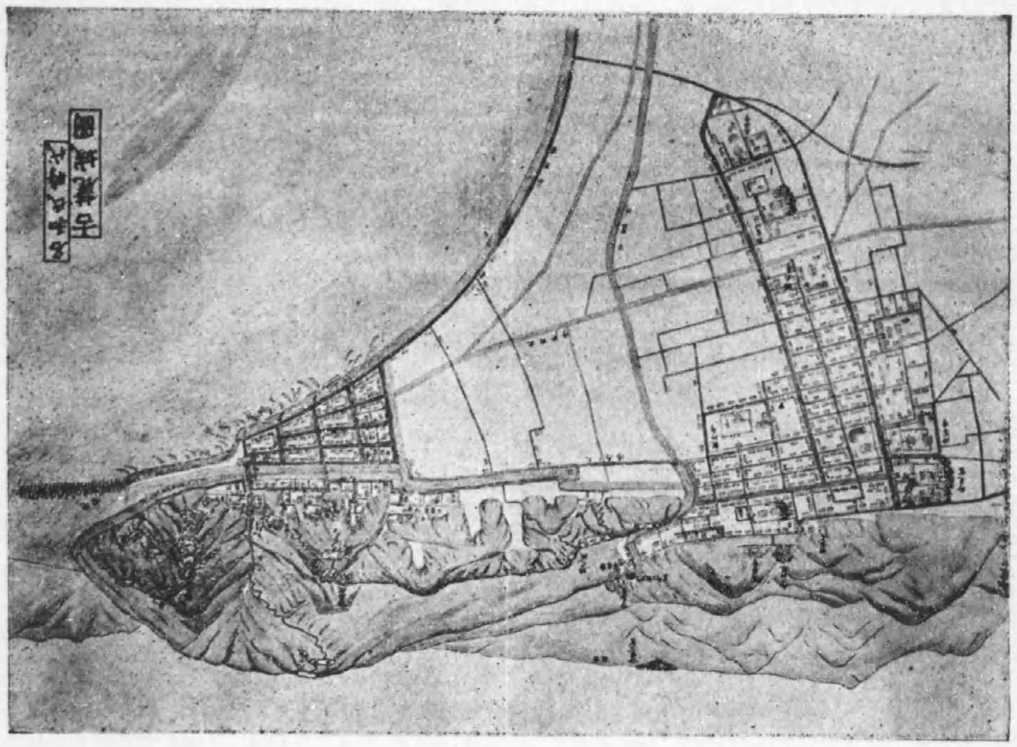
御靈牌

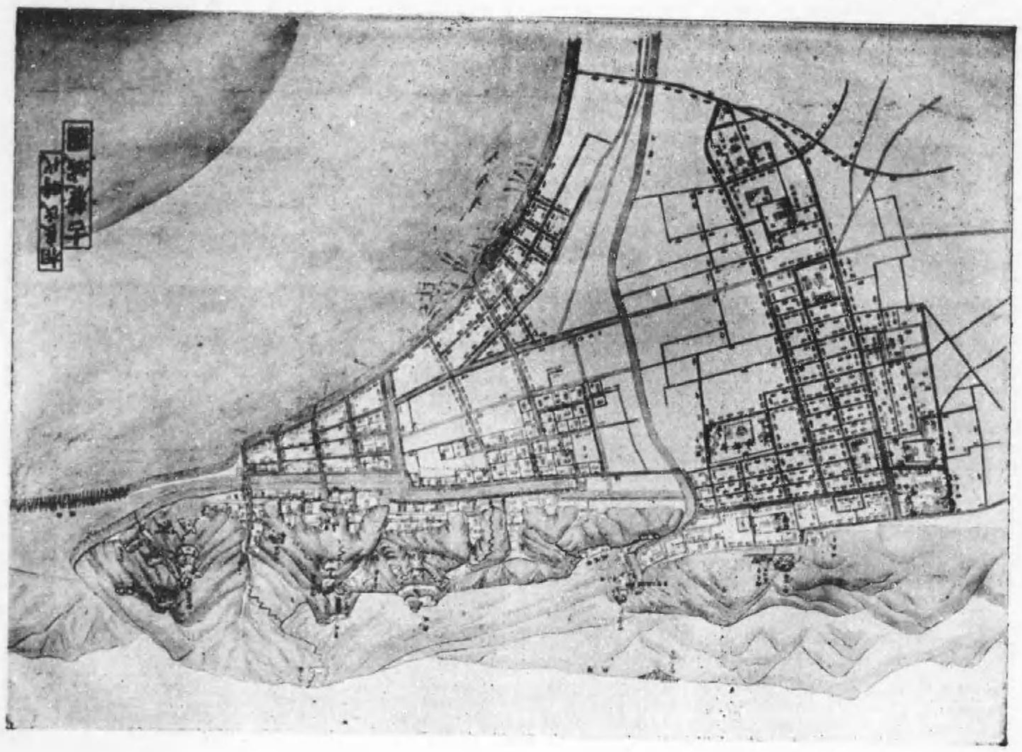


懷良親王御墓　　宮地村大字宮地

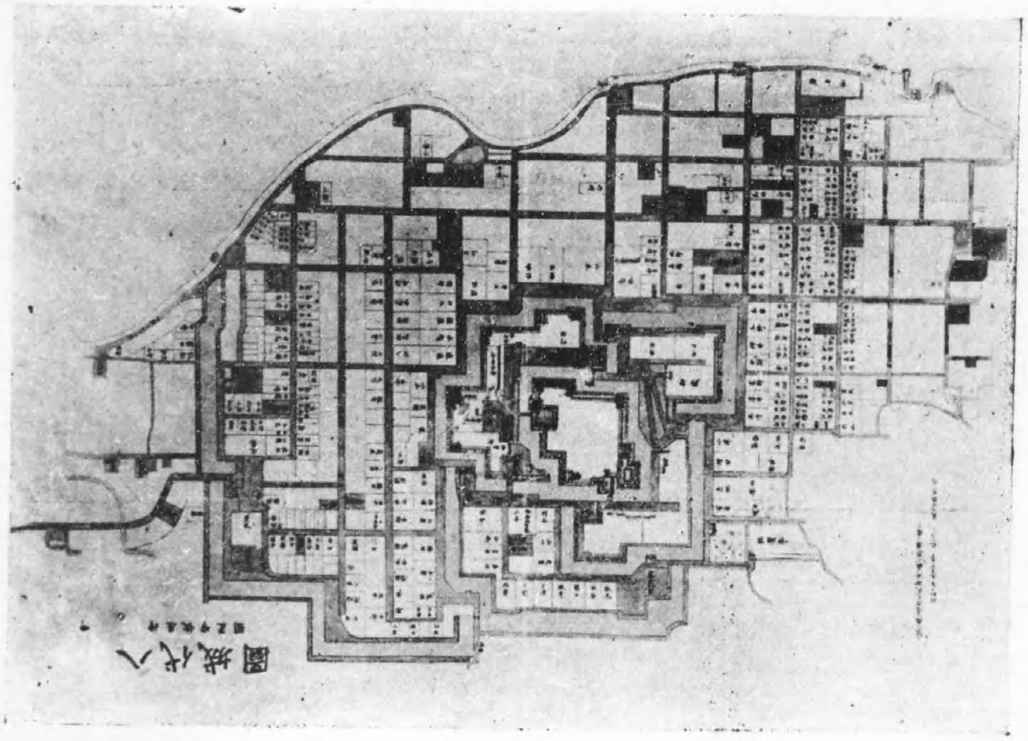


御墓墳内　　寶篋印塔


古城麓圖



圖城鑑古代時氏良相



圖原者著
る據に圖原の藏所氏久治藤

（圖寫配數屋侍）　　圖城代八

序

宮地村は、今では人口三千五百餘の農山村に過ぎないが、斷層崖並に其の前面の平地に今も古墳群地帶を擁し、往古は、球磨川に臨み、朝鮮・支那又は南方との交通の據點として、一のりつばな聚落地であつたと思はれる。今をさる一千百五十年前から、三度勅願妙見宮をこの地に建立せられてから、一大都會として繁榮し、名實ともに八代の中心となり、宮地の地名もこれから起つたと言ふ。平清盛領を經て、今より六百年前、吉野の朝廷五十七年間は忠臣名和氏の莊園となり、本據古麓城を主城として南郡有數の勤皇地となり、前後兩征西將軍宮の御事蹟、忠臣の遺蹟も少からず語り傳へられ、懷良親王は村內字中宮に神鎭り給ひ、村民朝夕崇敬措かざる聖域である。更に名和・相良・島津・小西氏の居城があり、加藤・細川・松井氏等、之等歷代の領主が公益をひろめ世務を開いた事蹟は、多く本村を基幹としてゐる。

本書は本村の青少年をして、祖先以來はぐゝみ育てゝ來た鄕土精神を把握させ、鄕土觀念を明徵にし、之によつて更に一層忠良なる人士として育成しようとするにある。即ち我が村は、第一は妙見宮の尊崇を中心に鎭護國家を祈念した敬神崇祖の祖先であり、第二は征西將軍宮を奉じ名

和氏を主として終始一貫勤皇の爲に盡くした誠忠報國・擧村一致・堅忍持久の祖先であり、第三は名和氏より松井氏に至る歴代領主の善政を助け公益をひろめ世務を開いた祖先である。第四はこれらの遺蹟は殆ど大切に保存され、古き傳統をもつ祖先である。そして私共はこれらの美風をはぐくみ傳へた子孫であるとの誇をもつて日々の業務に勵む所に、其の面目があると思ふ。

私共は宮地郷土讀本に於て、次の三つの方面を取扱ひたいと思つてゐる。一は産業經濟の開發發展に關すること、二はこの爲の生活訓練に關すること、三は以上二つを實踐するにあたつての指導精神に關するもの。第一第二を郷土教育の實質的方面とすれば、第三は實に形式陶冶の部面である。宮地郷土史讀本は、實に青少年達にこの指導精神、生活訓練上の魂を植ゑつけようとの企圖から、特に郷土史を稍〻詳細に且つ時代を追ふて記述したものである。

我等の日々の生活は、すべて皇國の道に則つて行ひ、且つ一身一家を空しうして國家の事を先にし、一死以て皇運を扶翼し奉ることでなくてはならない。しかも此の道は萬民悉く各自の職務に精勵することをもとにして行はねばならぬ。各自の職務の場は多くは郷土にある。或は第二第三の郷土と呼ばれるなつかしい土地にある。したがつて御國の爲にといふことは、郷土に於てなされてゐる場合が多いのである。國民教育を十分に行ふためには、郷土の教育といふことが更に新しい意味に於て見直さるべき時に際會してゐる。

國を愛し郷土を愛するよい國民を錬成するの道は、いろ〳〵あるであらうが、國史の教育により、我が崇高なる國體觀念を明徴にし、國民精神を振作し、以て建國の精神と一體となつて國運の發展に貢獻せしめ、更に郷土史の教育により、切實なる郷土精神を理會せしめ、郷土觀念を明徴にして祖先の心と一體となし、郷土に於て祖先が殘した大きな足跡に發奮自覺せしめ、村運の發展に貢獻せしめることが出來ると信ずる。私は本村の青少年達が、この宮地郷土史讀本を愛讀して更に一大奮發心を起し、國家有用の材が濟々として輩出することを衷心望んでゐる。

宮地郷土史讀本は、右のやうな目標の下に全く國史を編むやうな氣持で、昭和十三年六月末より着手したが、まだこの種の著書がなかつたため非常な困難に遭遇し、實に二年半を費して成つたものであるが、古墳時代及び各種産業經濟に關することは、遺憾ながら第二期の研究に讓ることゝし、この程度で一應梓に上すことにした。

其の間實地につき踏査研究し、又は廣く諸書を渉獵する等、同僚職員の協力になり、特に西田訓導の研究に負ふ所が多かつた。又村内各位は進んで資料を提供せられ、悟眞寺を始め村内外の神社・寺院又は有志は其の寶物の撮影を快諾され、八代地方有識の士同學諸友は或は材料を提供し、或は鼓舞激勵せられた。殊に橋本敦喜氏は終始研究の便宜を與へられた。

八代郡教育支會は、紀元二千六百年記念事業の一として、懸賞論文意匠品を募集審査せられる

に當り、本編を一等に選ばれ、宮地村長・學務委員・奬學會評議員・村會議員・區長諸氏は、本書を印刷に附することにつき協議を重ねられ、宮地村會は紀元二千六百年記念事業として、本書の編纂費を支出することを滿場一致可決せられ、池田廣氏は用紙を寄附せられ、森下貞氏は印刷用紙を斡旋せられ、滿田和氏は本書の印刷に關し好意を寄せられた上、この面倒な印刷を進んで引受けられた。本書中古麓城の研究は苦心實に一箇年を費した。而して其の基礎は、宮地鄕土史研究の先達故石川茂房先生の御研究に負ふ所が甚だ大であつた。かくて本書が生れ出づるについては、村内外誠に多數の方々のお世話にあづかつた。

しかしながら私共は淺學實は其の器にあらず、定めし杜撰粗漏の點も多からうと思ふ。幸に大方の御示敎御叱正を得て、他日の完璧を期したいつもりである。こゝに本書上梓にあたり、私共の意の存する所を錄し、謹んで援助を與へられた方々並に參考文獻の著者に對し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和十五年十二月十七日

熊本縣八代郡宮地國民學校長　蓑田田鶴男

敎師及び家庭の方々へ

一　宮地鄕土史讀本は、第二の國民である兒童生徒諸子に、祖先が數千年に亘つて營々として經營したこの鄕土を心から愛し、更に一層りつぱな所にし、國運の發展に必要な役割を果すことが出來るやうにと思つて著したものであります。

二　鄕土といふものは、何となく慕はしい有難いのが人情であります。けれども誰の鄕土もよそにすぐれたところばかりあるものではありません。鄕土の長所や短所を十分に了解すると、そこにこの鄕土をどうしなければならないといふ氣持が起ります。愛鄕心はこの氣持がわかる程強く起つてくるものだと思ひます。

三　八代の中心の移動及び宮地の地形等の點から、宮地の重要性を知らせるやうにしました。特に城郭存在の意義には、力を入れました。

四　文化史の色彩を出來るだけ取入れることゝし、全體を八つの文化時代に區分し、名和氏以後は治績として各最後にまとめ、時代の特質を了解させるやうにしました。

五　特に征西將軍宮の御事蹟には力を入れ、約頁數の半分を之にあてました。

六　長文が多いが、上欄に見出しを設けて、一部分讀んでも用を足すことが出來るやうにしました。

七　鄕土材料はしぜんむづかしいので、文體は敬體を用ひて平易に讀ませるやうにしました。假名遣・文字等はすべて國語讀本にしたがひ、段落・句讀等は嚴格にしました。

八　尺貫法を用ひた所が多いが、之は昔の生活狀態を取扱ふため、やむを得ませんでした。實際に指導する際、メートル法に換算して取扱ふやうにしたいと思ひます。

九　兒童讀物につき、文獻・資料等の出所は一々擧げませんでした。

十　本書は兒童生徒に讀ませることを目的として著したものでありますが、全般に亘つて私共の創意になる所に滿ちてゐます。とくに妙見宮に關する宮地町の研究、敬神・信仰の意味の研究、吉野の朝廷に於ける八代・宮地の重要性と其の一々の細かな事蹟、八代としての活動、古麓城郭・城下町・船着場の研究、征西將軍宮の八代に御座ありしこと、其の他松井文化に至る各項。

十一　鄕土の教育は元來實地について行はねば價値がないものでありますから、兒童生徒に實際に調査させながら、この讀本を讀ませるやうにしたいと思ひます。そこでこの本の使用法は、初等科四年・五年は、鄕土の觀察に附帶して活用します。初等科六年の終り、高等科・青年學校に於ては、國史の理會が出來るので、鄕土史として取扱つて見たいものです。其の方法は

一、この讀本の自習による豫備學習

二、現地學習

三、教室に於ける整理學習

目次

第一編　鄕土の生立……一

第一　鄕土の生立……一

第二編　妙見文化……四

第二　氏神妙見宮……四

第三　妙見宮のおまつり……八

第四　八代神社建物の由來……一三

第三編　征西將軍宮と名和文化……一九

第五　内河氏と中院義定……一九

第六　親王肥後入御……二五

第七　賊軍の醜狀……三〇

第八　九州北部の御平定……三七

第九　南九州の御平定……四三

第十　大保原の大決戰……四八

第十一　九州御一統……五七
第十二　東上軍の進發……六三
第十三　懐良親王の御孝心……六八
第十四　御小袖塚……七一
第十五　寶篋印塔……七四
第十六　名和氏の古麓城……七八
第十七　宮方最後の地八代莊……八一
第十八　悟眞寺……八七
第十九　名和氏の勤皇……九〇
第二十　にべ神社……九三
第二十一　名和氏の治績……九六
第四編　相良文化……一〇二
第二十二　新城のぼり……一〇二
第二十三　相良義陽とその墓……一〇九
第二十四　相良氏の治績……一一二

第五編　島津文化……一一七
第二十五　大手橋址と犬の馬場址……一一七
第二十六　島津氏の治績……一一九
第六編　小西文化……一二七
第二十七　小西氏の治績……一二七
第七編　加藤文化……一三三
第二十八　加藤忠正の墓……一三三
第二十九　加藤正方一族の墓……一三六
第三十　井手……一三八
第三十一　萩原堤……一四一
第三十二　加藤氏の治績……一四四
第八編　細川文化……一五九
第三十三　細川氏の治績……一五九
第九編　松井文化……一六三
第三十四　松井氏の崇祖……一六三

第三十五　萩原堤の修築……一六六
第三十六　宮地紙の由來……一七三
第三十七　松井營之……一八〇
第三十八　八代の文教……一八三
第三十九　松井氏の治績……一八七

挿繪

第一圖版　懐良親王御畫像
第二圖版　懐良親王御墓　御靈牌
第三圖版　寶篋印塔
第四圖版　名和氏時代古麓城圖
第五圖版　相良氏時代古麓城圖
第六圖版　八代城圖
本文組込寫眞版　三十六圖

地圖

吉野時代に於ける肥後南郡要地圖
吉野時代に於ける九州要地圖

宮地鄕土史讀本

第一　鄕土の生立

生立ち

大昔、高くてけはしい九州南部山脈は、日奈久斷層線によつて南北に一直線にたち切られ、宮地・龍峯の山々は約四十度の急な傾きで海に突立ちました。ところが其の後、球磨川の急流から吐出すこえた土や砂が次第に此の斷層線下の海底につもり、その幅約二粁の沖積平野が出來ました。

安住の地

千數百年前の宮地は、この肥沃な平野に立ち、球磨川の川口に臨み、斷層線の山は高くして八代平野や八代海が一目に見渡され、深い谷が多くて要害に富み、人々の安住の地でありました。

海陸交通の要地

その上川口はよい船着場で、九州の港はもちろん、遠く朝鮮・支那の港へ通じ、陸路は球磨・薩摩・菊池路の分れめにあたり、九州では有數の大切な土地でありました。

勅願妙見宮の創建と八代の中心地の移動

宮地の歴史は、千百餘年前から、斷層崖横嶽の山の上と下に三度勅願妙見宮を創建されたのに始まり、その後長くこの地は八代の信仰・政治・産業・交通・文化の中心地として發達し、燦然たる妙見文化を生みました。

宮地時代前期

妙見宮の創建とともに、八代の中心は六百六十年の長い歴史を閉ぢて、宮原町附近から妙見宮を中心とした宮地町に移り、宮地時代の前期にはいります。

名和氏の精忠

次で六百餘年前名和氏が征西將軍宮を奉じて斷層崖上の古麓城に據り、山下の山鹿町一帶を城下町とし、五十七年の間勤皇を唱へて吉野の朝廷の御爲に盡くしたため、有力な勤皇地として著れ、敬神崇祖の地に更に盡忠報國、擧村一致、堅忍持久の美はしい魂を植ゑつけました。

宮地時代中期

名和氏はこれから應仁の亂の後まで百五十一年の久しい間、この山城によりましたので、八代の中心は五百四十一年にして宮地町から古麓にうつり、名和文化をつくりました。この時代を宮地時代の中期といひます。

宮地時代後期

戰國爭亂の時代に、名和氏にかはつて古麓城に據つたものは、相良氏でありました。相良氏は新しく城を北にひろげてそこに移り、城下町も山鹿町の北の方山下町一帶に擴張して、其所を中心として相良文化をきづくこと百年に及びました。其の後島津氏等も數年この地によりましたので、この時代をひきくるめて宮地時代後期と名づけます。

群雄爭奪の地となる

球磨川の流し出す土や砂は、其の後ます〳〵川口につもり、平野は三粁四粁と西へのび、船着場はしだいに山から遠ざかつて行きましたが、相良・島津・小西氏等の群雄は皆、戰國爭亂中此の地を手中に入れることが肥後經略上の重大事でありました。したがつて、幾多の戰亂が此の地

八代の中心宮地より球磨川口に移る

にも繰返されましたが、妙見宮と勤皇の遺蹟は、其の間によく保存されました。

今から三百五十餘年前、小西行長が肥後南郡の大名となり、居城と城下町を、斷層線をさる四粁の川口に移轉するに及び、約八百年間八代の中心として榮えた宮地の形勢は全く一變し、文化の中心は、山地から交通至便な平地の海港に移りました。その上小西氏は、亂暴にも神社佛閣をことごとく燒きましたので、古い歴史は多く消えうせてしまひました。

神社を再興し、勤皇の遺跡よく保存され、古き傳統を傳ふ

加藤・細川・松井三氏の時代には、天下漸く太平となり、先づ神社・佛閣を再興して敬神崇祖の美風を奬勵し、勤皇の遺蹟を保存して盡忠報國の志氣を鼓舞し、次で治水・產業・干拓・教育等の事業を行ひましたので、宮地の樣も古い都の跡として立ちなほりました。

私どもの覺悟

かくて、歴代藩主の敬神崇祖の施政により、妙見宮の神事はます〳〵盛大に行はれ、征西將軍宮・名和氏勤皇の遺蹟はよく保存され、古い傳統をほこる古都として昔の香を傳へてゐます。

これを要するに、宮地は現在では一つの村にすぎませんが、この地が遠い昔から千年に近い長い間榮えたのは、要害と交通と產業とを併せそなへたよい所であつたからで、私共の祖先は、代々敬神崇祖・盡忠報國の美はしい精神をもつて御國に報ひて來ました。私どもはこの光榮ある人々の子孫であることを思つて、古い傳統をよく守りつゝ、新しく產業の開發、村運の發展に力をつくさねばなりません。

第二　氏神妙見宮

宮地の歴史の始め

此の地は東は山地、西は平野で、その中を大川が流れ、海が近く、全く形勝に富み、農耕に適し、海陸交通が至便で、すでに妙見宮創建前、九州における朝鮮・支那等海外交通の一據點として相當の發達を見てゐたことは、「才子世祿」の地名が、古い支那書にのつてゐることでも想像が出來るのでありますが、千百數十年前勅願妙見宮を三度もこの地に建てられたことから、宮地の歴史は始りました。

妙見宮

妙見宮は天御中主尊と申す尊い神様をお祀りし、八代神社と申します。妙見宮の信仰は千年も昔から全國に亘つてゐましたが、この神様を始めてお祀りした所は實に宮地でありまして、宮地の地名もこれから出てゐると申します。

妙見上宮の由來

妙見宮は上宮・中宮・下宮の三つの社殿に分れ、どのお宮も壯麗を極めました。上宮は今から約千百五十年前、當時我が國力が大いに發展し、平安奠都の大事業が行はれた其の翌年、雲表に聳ゆる横嶽の頂上に創建せられ、遙かに皇運の隆昌と、新都の繁昌、國家の安寧を祈念しました。

此の妙見上宮の鎮祭は、實に宮地に信仰の中心を與へたもので、當時妙見神に隨つた人々や、

勅願妙見中宮の創建

勅願妙見下宮の創建

縣社八代神社

妙見下宮
熊本縣史蹟

此の神を尊崇して宮地に居を移す人々は、朝夕此の神に鎮護國家を祈念すると同時に、郷土を開いた神と崇め、郷土の守護神と尊び、年々のお祀りを盛んにし、郷土の開發と發展に力を盡くしました。かくて横嶽の山上から山麓まで十八町の參道の兩側には人家がならび、山の下には町が出來て、敬神の平和な中心地として、九州に著れて來ました。

其の後約三百七十年、平安京は花のやうに榮えましたが、都では藤原氏が榮華にふけつて政治を怠り、地方には源平兩氏が起つて勢を得ました。そして此の三氏の間には次第に勢力の爭が盛んになり、保元・平治の二亂が相ついで起り、天下が騷がしく、國民が苦しみましたので、平治の亂の翌年、勅願により肥後守平貞能が、横嶽の中腹に中宮を建てました。

それから三十年の間に源氏が滅んで平氏が全國の半ば以上を領地にもつほどに榮えましたが、再び源氏が起つて、平氏の一族を壇浦に滅してしまひました。この大悲劇と同

時に、源氏では頼朝が諸國に守護・地頭を置いて弟義經を捕へようとし、國内の不安は言ひやうがありませんでした。そこでその翌年又勅願によつて大江高房が山の下に下宮を建立しました。

神佛兩部

このやうに妙見宮は、上宮・中宮・下宮ともにその由來は尊く、國家の大事業又は大事件があつたとき、鎮護國家を祈らせになる尊い思召からお建てになつた勅願宮でありますが、當時の風習により神佛兩部で、上宮には大日如來・彌陀・釋迦の三體、中宮には千手觀音・愛染明王・不動明王の三體、下宮には十一面觀音・不動明王・辯財天の三體をも併せ祀り、神官大宮司の外、神宮寺十五坊の社僧があつて、妙見宮の祭祀に奉仕しました。

縣社八代神社

今は上宮・中宮ともにこれを廢し、下宮を八代神社と稱し、縣社に列せられてゐます。

宮地町の盛時

中宮の建立により、中宮谷から邊田方面にかけてにぎやかな町が出來のでありますが、其の後下宮が平地に建てられてからは、東は谷・山下・邊田・宮前から、西は村外れの追分、南は中宮川に圍まれた十町四方の廣さが市街となり、その中には下宮の壯麗な社殿を始め、神宮寺諸坊の高い甍が聳え、お宮の前を通る大參道を始め、廣い通りが縱横に通じ、宮の町をはじめ町々の人家が軒を並べ、其の中に住む數は數千人の多きに上り、九州では指折りのひらけた町となりました。

宮地時代前期

妙見宮の創建とともに、八代の中心は宮原町附近から宮地に移つたのでありまして、この妙見宮を中心とした宮地町の時代が、宮地時代の前期をなすのであります。

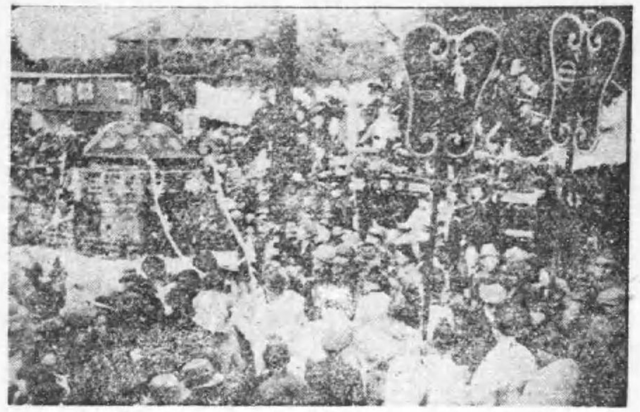
護國と鄉土發展の祈り

かうして朝夕鐘や太鼓の音とともに、家々から祈る鎮護國家の聲々は、一つに合して、宮地町を鎮め、肥後の國を鎮め、廣く九州を鎮める力となりました。そうして人々はまた妙見宮を氏神と尊び、其のお加護にすがつてめい〳〵の仕事にはげみ、鄉土の發展に盡くしました。

神輿

妙見宮が年とともに社殿は壯麗に、社地は廣く、其の神事は年を追つて盛んとなつたことはもつともなことで、武家時代になつても名和・相良氏等の尊崇はあつく、加藤氏は社殿・社地・神事を復興し、細川・松井氏歷代の藩主は一層神威をうやまひ、祭祀を盛んにして今日に及んでゐるのであります。

民子と盛んな祭禮



神幸式其の一

今より三百五十餘年前、城が川口に移つた後は急にさびれましたが、氏子は宮地・太田鄉・龍峯・千丁・八千把の諸町村十箇子村九百九十七戸に及び、其の他舊八代町と松高村は特別の緣故をもち、大祭には八代町から獅子舞・傘

鉾・亀舞等の奉納をし、近郷近在の氏子からは神馬・飾馬を、松高村からは花奴行列を奉納し、これらはまた中宮址への神幸式に奉仕するなど、今もなほ其の珍らしい神事と風習をつゞけ、其の盛んなことは九州三大祭の隨一といはれてゐます。

妙見上宮祠址・妙見中宮址及び八代神社は、いづれも熊本縣指定の「史蹟」であります。

第三　妙見宮のおまつり

一年百二十度のおまつり

妙見宮のおまつりは、名和・相良兩氏の頃には一年中に百二十度もあつたといひますから、古から大そう盛んであつたことがわかります。それが小西氏の時、社殿をこはし神領の田畑もとり上げてしまつたため、一時全く出來なくなつてしまひました。このことは當時の八代の人々にとつて、どんなに驚くべきまた悲しい出來事であつたことでせう。

新しい神事の起り

妙見宮のおまつりが古のとほりにかへりましたのは、加藤氏のおかげでありました。そして其の後細川・松井兩氏がいろ／＼と新しい神事を起しましたので、おまつりは全く昔にまして盛んなものとなつたのであります。

その頃はじまつた祭事は、明治維新後も昔のとほりにつゞけて、今日まで長い歴史をつたへてゐます。明治四十年から、大祭には神饌幣帛供進使が參向しておまつりを取行はせられることになり、一層莊嚴さを加へました。

おもなおまつり

正月元日、毎月一日、十五日のお宮まゐりから、入營・出征・冠・婚・祭など、お宮はいつも參拜者でにぎあつてゐます。

ことに一月三日の田植神事、五月十五日の紐ときまゐり六月一日の氷づいたち、七月十七日十八日の十七夜祭（小祭）十一月十八日の大祭（十月祭り）は、終夜大にぎあひをします。中でも十月祭りは、十七日の前夜祭・神馬神事に引きつゞきにぎやかに行はれ、鐵道は臨時列車を運轉し、乘合自動車は途中から折かへし運轉するほどのにぎあひであります。

當日のめづらしい名物奉納神事は、獅子・傘鉾・亀・神馬・飾馬・花奴行列などであります。

十月祭の名物神事

一、　獅子舞

元祿四年松井直之の晩年に、八代城下本町に井櫻屋勘七

獅子

二の其式幸神

由來

神幸式其の三　鉾　傘

といふ船商賣がゐました。長崎港との間を往復して盛んに貿易に從事してゐましたが、ある時長崎沖ではげしいあらしに出あひ、異國近くまで吹流され、船は今にもくつがへりさうになりました。勘七は今はこれまでと覺悟をきめましたが、日頃信心してゐる妙見宮を一心に念じてゐるうちに、不思議にも妙見樣が現はれいつも信心する御褒美にと、獅子樂を口授して下さいました。するとあらしはすつかりをさまつて、波もおだやかになりましたので、勘七は妙見樣のあとを伏しをがみ、忘れないうちにと獅子樂を書きとめました。勘七は程なく八代へ歸りましたが、早速道具を調へて奉納しました。これが獅子樂の起りであります。

又羅漢獅子の舞方は、細工町の長府屋兵衛門が工夫して若者達に敎へたことに始まりました。

かうして獅子樂は、井櫻屋の子孫が代々世話をして傳へ、毎年の祭禮には神幸式に奉仕し、おまつりを賑やかにし、神意を慰さめました。

舞ひ方の意味

松井家の保護奬勵

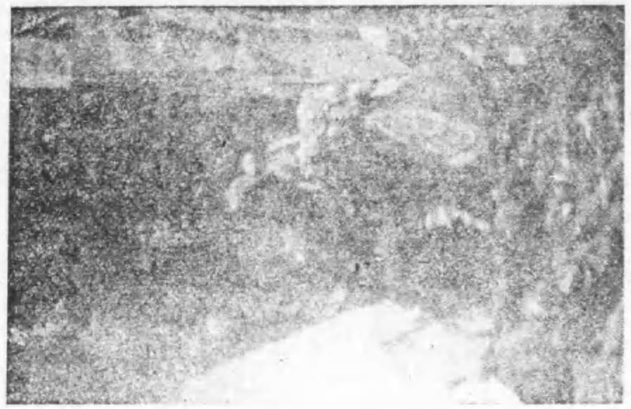
行列の順序

由來

行列中の道化者

妙見宮の祭禮に傘鉾、亀、飾馬等の奉納物の中、獅子が先頭に立つのは、御道すぢを淨め、舞ふ場所を一周りするのはしめ縄を張り、幣の形に舞つて參拜者の穢を拂ふ意味だと言ひます。

松井家では、この獅子樂が勘七一人の世話では後になつて衰へることがあつてはいけないと心配し、町中でこれを維持するやうに取計つて保護奬勵しました。



神幸式其の四　舞　亀

二、傘鉾

傘鉾は九つの町内から奉納し、次の順序にならんで神幸式に奉仕します。

宮の町（菊童子）本町（本蝶燕）二の町（蘇鐵）新町（聖王母）紺屋町（猩猩）中島町（蜜柑）德淵町（惠比須）平河原町（松）塩屋町（迦陵頻迦）

三、亀

出町は亀舞を奉納します。これは妙見樣が亀蛇にのつて海路竹原津に上陸なさつたといふ話に出てゐます。

獅子と傘鉾の行列は肅々と進みますが、亀は道化者で御

氏子から十二頭

勇壮な神事

神幸式其の五　　神馬

から非常な名譽と心得て、競つて出した妙見宮馬場と境内と砥崎の川原でかける勇壮な神事であります。神幸式の行列では最後にならびます。

道すぢをにぎやかにします。前者の行列が静なら、これは動の役目をしてゐるのです。昔は亀が通ると、子供達が

出町はかん！〳〵、
傘鉾持たずに
亀まはす。

とはやしたてゝ、大そうにぎやかでした。

四、神馬

附近町村の抽籤により、毎年一頭づゝ出ます。

五、飾馬

宮地から六頭、龍峯一頭、太田郷三頭、千丁一頭、八千把一頭と、毎年五箇町村十小村の氏子中から、總數十二頭を奉仕するのでありますが、この飾馬の奉仕は神馬同様昔から行したものであります。

由來

一子相傳

特に松井氏の奬勵保護

六、花奴行列

文化七年松江村の虎右衛門といふ者が、江戸で大名行列花奴の法をおぼえて歸りましたが、松高村高子原の者で虎右衛門の甥林七といふ者がこれを讓りうけて、毎年神幸式に奉仕しました。

此の花奴は一子相傳で、昔から他村から來た者は決して加へませんでした。明治維新までは松井家の支配の中にあつて、大そう名譽なものでありました。

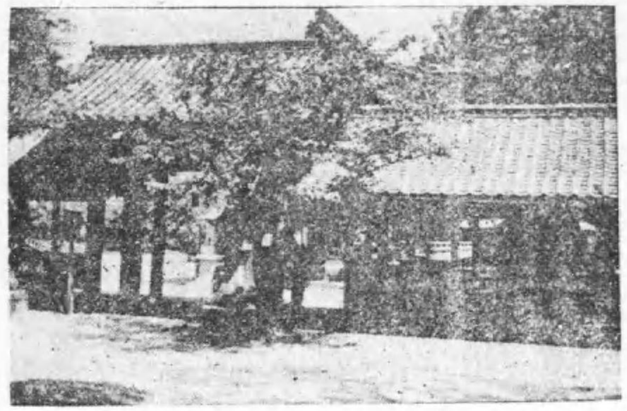
妙見宮のおまつりが、九州三大祭中の第一といはれるほど盛んなのは、一つにはこれら十箇町村の氏子や、八代町・松高村をはじめ附近村々の關係の人々が、このやうな神事の奉納をするからで、これは加藤・細川・松井三氏の敬神の模範に始まり、特に松井氏の奬勵保護によつたもので今もなほその餘榮はつゞいてゐます。

第四　八代神社建物の由來

石鳥居

一、石鳥居　元和二年加藤正方が復興して奉納しました。それから三十二年の後承應元年四月松井興長の頃、八代城下德淵町氏人中が寄進しました。横三間。石工は肥前杵島郡の者で、額は本妙寺日遙上人の筆でありました。それから七十年ほどたつて、享保年中に强風のため例れたた

四足門
廻廊
拜殿



四足門と廻廊　　八代神社

達します。三間に五間五尺、破風造・柿葺。加藤氏が再興したもので、其の後は松井家から修造しました。元祿十二年には壽之、寛延二年には豊之がこれを修造してゐます。現在のは銅葺であります。

め、又建てました。今度の額は本郷玄純の書でありました。

其の後二十年ほどたつて、寛保年中に倒れ、つゞいて十數年の後寶暦五年の秋には、大風のために碎けましたので再興しました。

二、四足門　　石の鳥井をくゞり、敷石の上を進むこと十二間半にして、四足門に達します。十尺に二間、破風造・瓦葺で、廊門とも言ひます。「鎮國」の大額は、太宰府菅聖廟十禪師職仙賀の書であります。

三、廻廊　　四足門の左右にあつて、どちらも十尺に三間半、破風造・瓦葺であります。承應元年、八代城下横町氏人中の寄進であります。今繪馬堂となつてゐます。

四、拜殿　　四足門をくゞつて進むこと三間にして拜殿に

幣殿
神殿
神輿屋
手洗舍
末社大宮神社

五、幣殿　　拜殿の奥にあります。九尺四方、柿葺。これも昔は拜殿同様、松井家から修造しました。今は銅葺であります。

六、神殿　　幣殿につゞいて神殿があります。二間半に五間、棟の高い三棟破風造、柿葺の一棟であります。加藤氏が再興したもので、五十年ほどたつて、万治三年細川綱利が改修し、その後はずつと細川家から修造しました。外部には精巧な調刻がたくさんほどこしてあります。今も柿葺であります。

七、神輿屋　　境内西南の隅にあり、二間に三間、柿葺。寛永十三年細川忠興が寄附し、其の後四十五年、延寶八年再興しました。現在は瓦葺であります。中に神輿を納めてあります。

神輿は同年十月二日忠興が寄附し、其の天井に自ら雲龍を畫きました。六角方、廣さ五尺。華麗壯厳、眼をうばふばかりであります。

八、手洗舍　　拜殿の前方右側にあります。一坪五合、瓦葺。今は銅葺。

九、末社大宮神社　　神殿の西にあり、一間三尺に五尺。昔は柿葺でしたが、今は銅葺であります。

祭神は日本武尊・弟橘媛。清和天皇貞觀五年の鎮座で、始めは妙見神の老臣であつたといふ赤見大臣をまつり、昔は赤見社といひました。祭日は三月七日で、榎の葉祭といひます。

末社稲荷神社

十、末社稲荷神社　境内東側にあり、一間に五尺、瓦葺。
祭神は保食神。祭日は九月二十二日であります。

鳥居前の手洗舍

十一、隨神社　石鳥井をくゞつてすぐ左右に二宇があり、三尺に三尺五寸、柿葺。
祭神は豊盤龍神・櫛盤龍神。祭日は十一月十八日。今は銅葺。

十二、鳥井前の手洗舍　一間に一間半。材はけやき。瓦葺。天井や破風には精巧な彫刻をほどこし、又松井家の定紋を打ち、全體が風雅な姿であります。八代町を始め上方など全國にわたる寄進者の姓名を彫刻してあります。又石塲の石材は花崗岩で、安政四年十月一日八代町の氏人中から寄進しました。石工は大阪難波屋嘉七であります。

石燈籠

十三、石燈籠　たくさんありますが、手洗舍の側にある六地藏の石燈籠は、寛文十二年六月、平河原町氏人中の奉納であります。石材は花崗岩。
今は殘つてはゐませんが、昔神佛兩部の頃の建物中、お寺に關したものゝ中から、珍らしいものを擧げて見ませう。

本地堂

一、本地堂　六間四面であつたのを、小西氏の時こはして石原に移し、耶蘇寺としてゐましたのを、寛永八年四月正方が再興しました。二間に二間半、瓦葺。本尊は二尺一寸の木佛座像でありました。其の後寛文十二年三月再興しました。

文珠堂
多寶塔

二、文珠堂　三間四面、瓦葺。寛文十二年三月、本地堂とともに再興しました。
三、多寶塔　二間四面、三層、高さ九間。飛彈匠の作といひ、精巧絶佳でありました。小西氏の時妙見宮の堂塔をこはしましたが、此の塔ばかりは殘したといふことであります。
承應元年興長の頃、八代城下中島町氏人等が再興しましたが、明治四年にこれを廢したのは惜しいことでありました。

島觀音堂
太子堂
經藏
御供屋
鐘撞堂
石仁王

四、島觀音堂　一間四方、瓦葺。明暦元年四月紺屋町氏人中が建てました。
五、太子堂　一間四面、瓦葺。延寶八年二月直之の頃、八代町大工中が建てました。
六、經藏　三間四面、瓦葺。輪庫がありました。
七、御供屋　二間半に五間、瓦葺。
八、鐘撞堂　九尺四面、瓦葺。承應元年四月、八代城下本町氏人中が建てました。
九、石仁王　高さ一丈五尺。延寶三年十月、八代城下二の町氏人中が寄進しました。石工は薩州横川の禪僧周貫であります。
其の他地藏堂・毘沙門堂・荒神祠など、たくさんありました。
又社の周りは、東西四十六間、南北二十一間で、四方の瑞籬は七年毎に八代郡中から修營することになつてゐました。

神木楠

妙見宮の楠

熊本縣史蹟天然記念物

これらの建物の由來を見ても、昔領主を始め郷土の人々が、妙見宮を尊ぶ心がどんなにあつかつたといふことがわかるでせう。

神木楠　八代神社石鳥居の東側にあります。幹の周り七、五メートル、樹の高さ二十二メートルあります。小西行長が妙見宮を毀しました時、火災のため幹の北側半面は燒けてしまひました。今の樹は南側の枝が大きくなつたもので、その時燒け殘つた幹の根本は、もとの位置に立てかけて保存してあります。天正九年十二月相良義陽が響の原決戰に出陣の際、妙見宮に參拜して戰勝を祈りましたが、軍旗が此の木の枝に掛つて離れません。社司が不吉ですから出陣を見合せるやうにすゝめましたが、つひに引き切つて首途に上つたといふ由緒ある大楠であります。

四周に花崗岩の玉垣をめぐらし、石の面に「不知其始、又不知終、萬歳之下、枝葉茂盛、嗚呼靈哉。」とあります。安政五年六月八代町や大阪などの信徒の寄附であります。「妙見宮の楠」として、熊本縣指定の「史蹟・天然記念物」であります。

第五　内河氏と中院義定

名和義高八代莊の地頭職となり、家臣内河義眞代官として下向す

建武二年、名和長年の長男義高は、功により八代莊の地頭職に任ぜられ、其の家臣の内河義眞が代官として下向し、八代莊を治めることになりましたので、これから吉野の朝廷五十餘年の間、古麓を中心として名和氏勤皇の文化が興りました。

義眞、惠良惟澄と呼應して勤皇の旗をあぐ

延元元年足利尊氏が叛いたとき、義眞は南郡の惠良惟澄と呼應してまつさきに古麓城に勤皇の旗をあげました。一色範氏が兵を出してこれを攻めさせましたが、びくともしませんでした。

義眞經賴とともに相良定賴の道をふさぐ

球磨の相良定賴は、その頃尊氏にしたがつて京都へ上らうと思つてゐましたが、一族の相良經賴等が起つてこれを攻めますし、義眞が八代莊で道をふさいでゐるので、出來ません。

一色範氏宮方の勢に驚き、義眞經賴等をうつ

義眞と經賴は互に心を合せ、北は菊池・惠良、南は大隅の肝付等の宮方と連絡をとり、勢がなか〳〵盛んになりましたので、一色範氏は驚いて、九月十日には部下の大將をやり、球磨の賊將と力をあはせて、義眞・經賴等をうたせ、つゞいて今川助時に命じて、賊の軍勢をもよほして攻めさせることになりました。

宮三位中將と三條泰季の活動

この頃京都から宮三位中將が肥後に下つて諸軍を率ゐ、薩摩の方からは三條泰季が肥後に入つて北の方の宮方を助けましたので、九州宮方の勢が強くて、一色範氏の力ではどうすることも出來ません。そこで尊氏は小貳頼尚を九州に下すことになり、頼尚は延元三年の始頃九州に着きました。

小貳頼尚九州に下向して肥後に入り八代に侵入す

延元三年十月には、頼尚は肥後に入つて菊池武重と戰ひ、次に惠良惟澄と甲佐城に戰ひ、更に南進して、八代黑鳥で義眞と戰ひました。けれども範氏は頼尚の下向を喜ばず、二人の間に權力の爭を起しましたので、頼尚は太宰府に歸り、範氏は博多で政務をとり、しばらく兵を肥後に動かすことが出來ませんでした。

菊池・球磨・八代の形勢

この時菊池では武重卒し、二三年後には武敏も卒し、興國五年頃武光が立ちましたが、つゞいて主を失つたため、めざましい活動をすることが出來ません。義眞は兵を球磨に出して相良經頼を助けましたが、其の後間もなく球磨の宮方は振はなくなりました。

征西將軍宮薩摩津に着御

征西將軍宮は興國三年五月一日薩摩津にお着きになり、谷山隆信の居城におはいりになりました。そして薩摩・大隅を平定して、その後に肥後におはいりにならうとする御計畫でありました。

肥後宮方の難局

ところがこれから數年の間は薩摩では賊軍が十分平げず、肥後は菊池氏がまだ勢なく、八代も大勢を動かす力はなく、南郡で惠良惟澄がたゞ一人奮戰しますけれども、一族の阿蘇惟時がどうしても歸順しません。それに小貳頼尚が、興國四年頃から薩摩と肥後の連絡を切らうと、益城方面まで攻めこんで、御船城などを攻め、八代・菊池をねらつてゐて、親王が肥後におはいりになることはなか／＼むづかしいので、宮は中院義定を先づ肥後につかはして、菊池への御道すぢの賊を打ちはらひ、又惟時を歸順させようとなさいました。

中院義定先驅として肥後に入り、惟澄しきりに奮鬪す

そこで中院義定は、正平元年二月五日、宮の先驅として山川港を立ち、海路肥後の海岸に着きました。そして早速阿蘇惟時が歸順するやうにいろ／＼と手を盡くし、又惟澄にもすゝめさせましたが、惟時は小貳頼尚と心を合はせる約束をしてゐるのか、なか／＼宮のお召に從ひません。そこでこの頃は、惠良惟澄が肥後の宮方として義定を助け、勢の盛んな頼尚の軍を向ふにまはして、親王が肥後におはいりになる準備をしてゐました。

頼尚義定をうたんとして八代莊に迫る

正平元年九月十一日、小貳頼尚はこの有樣を重大に考へ、義定をうたうと南郡へ攻入り、三日寺に着きました。義定は義眞の古麓城にゐましたが、すぐに手紙を惟澄に送つて、八代を助けさせました。

頼尚の八代莊夾擊策

その間に頼尚は進んで守山關を攻め、別將筑後經尚（頼尚の甥）は八代の後にまはり、葦北莊田河内關を攻めて、南北から八代を夾擊し、一度にこれを攻落さうといふ策略でした。

惟澄南郡にて奮鬪し守山關を守る

翌日の閏九月二日には、頼尚は守山關を破らうとしました。惟澄はすぐ小河城を出てこれを逆

へうち、日奈子・高木兄弟・弓削・丹治等十餘人を殺し、勝に乘じて大野原まで追擊し、阿彌陀峯に着きました。

けれども八代から援軍が來ませんので、惟澄は今宮に壘を構へて毎日のやうにいくさをし、賴尙のゐる山崎城の對壘である安見・岡の二城を攻取りました。

田河内關の防戰

南の方では經尙が相良氏の一族と田河内關を攻めましたが、內河の軍がよく防ぎましたので退き、十五日、またこゝでいくさがありました。

八代莊原田の戰

十二月二日には經尙がまた相良氏の一族等を率ゐて、八代莊原田で八代の軍と戰ひましたが、八代城に攻入ることが出來ず、賴尙もまた守山關を破ることが出來ず、かうして八代を夾擊することは失敗しました。

義眞、惟澄の應援により八代莊を死守す

賴尙の八代夾擊は失敗す

ところが賴尙は其の後しきりに八代に攻入らうとし、とう〳〵宮方の要害としてゐる山の後の種山・黑駿の兩城をとり、惟澄と古麓城との連絡を斷ちました。惟澄は黑駿城に對して米山の壘を築き、內河義眞をこゝに入れて、黑駿城を取りもどさうとしました。しかし賴尙は一族や筑後經尙等數百騎をやつて米山を攻めさせましたので、義眞の兵は支へることが出來ず、城は落ちました。惟澄はすぐ兵を引きつれて行つて義眞を援ひ、敵軍を大いに破りました。

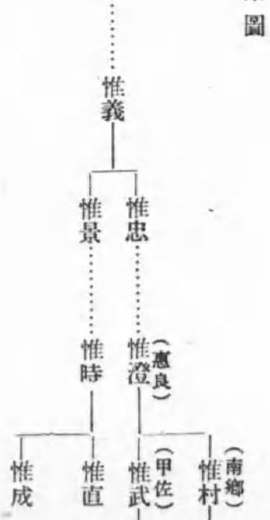
このやうに賴尙の八代攻擊は、惟澄が南郡を守つて、よく義眞と連絡をとりましたので、全く

失敗しましたが、其の後も決して油斷が出來ませんでした。

惟澄の功

惟澄の功が大きいので、正平二年正日八日吉野からおほめになり、宮も薩摩から感狀を與へ給ひました。

阿蘇氏略系圖



惟時和談をすゝむ

惟時も宮方について働きたいとの心はありますが、賴尙との約束もかたくなつてゐましたので進退に困り、一策を考へ、賴尙に勸めて、內河義眞と八代莊を南北に分けて和を結ばせようとしました。賴尙は喜んでこの機會を利用しようとし、義眞もまたこれを承知しましたので、六月頃にはこの和談は一時成立つてゐたやうでした。

義定賴尙の本心を疑つて許さず

しかしこの話はもとより賴尙の本意ではないのですから、これを口實にすぐ宮方のゐる今宮・荒尾の兩城を閉させ、八代に行く唯一の要路である守山關を開かせて八代莊に入り、古麓城を奪

はうとしました。義定ははじめから頼尙の本心を疑つてゐますので許しません。

義定しきりに惟時に説く

惟時はこんなことで吉野からも綸旨を賜り、いよ／＼宮方として旗をあげなければならなくなりましたが、頼尙の態度がはつきりせずして、八代に攻入らうといふ氣持が見えますので、まだ最後の決心が出來ずにぐづ／＼してゐます。そこで八月五日義定は手紙を惟時にやつて、約束にそむいたのを責め、次に

「頼尙は和を説いて宮方をあざむくつもりで、本當に和を結ぶ心はない。もし守山關を開いて小河の要害を避くれば、頼尙は喜んで、八代に入つて旗を飜すにちがひない。そのとき悔ひても仕方がない。」

といつてやりました。

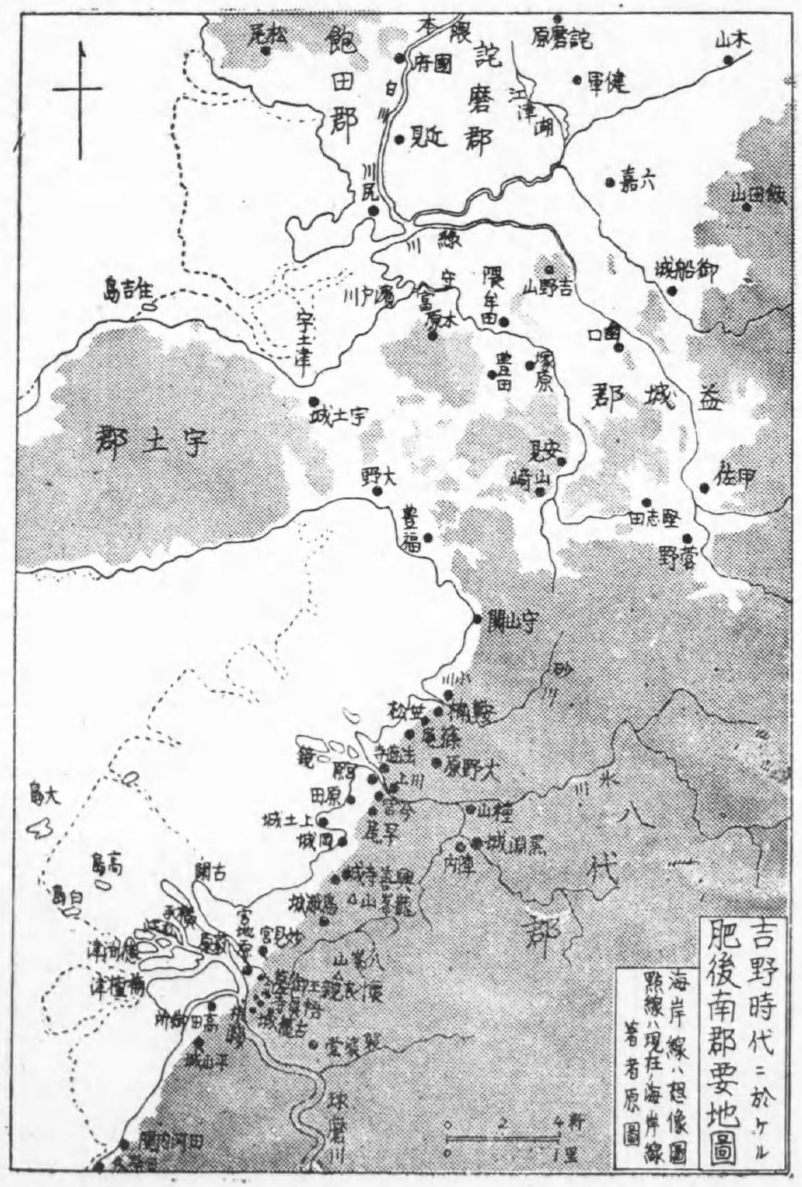
義定は頼尙を疑ひながら、惟時の歸順についてはしきりに心をくだきましたが、惟時はやつぱり從ひません。

惟澄ますます活動す

惟澄はよくこの間の事情を見ぬき、こんな和議を信用せず小河にゐて頼尙の部下と戰ひ、新しく笠松・鞍楠の二壘を築いて敵に備へ、東肥方面に向つて活動をつゞけました。

頼尙太宰府に歸る

親王が肥後におはいりになる前の南肥後の有樣は、惟時が宮方につくか賊につくかはつきりせぬため、頼尙と義眞との媾和はつゞくことが出來て、大した戰もありませんので、頼尙は一時太



吉野時代ニ於ケル

宰府に歸りました。

義定・義眞・惟澄の經營

この間に義定は古麓城にゐて、義眞と共に八代莊を中心に葦北・球磨の宮方を固め、宮方最後の據點となるまで賊の馬蹄にかけられぬもとをつくりました。

惟澄は賴尙の部下が所々に壘を構へて守つてゐますので、それを攻めとり、また大友氏が東から攻めこんで來るのを防ぎました。

菊池氏靜かに準備をすゝむ

北肥後では菊池氏がしばらく運動を中止してゐましたが、よく代々の勢力を持ちつゞけ、賴尙や一色範氏等が攻めこむすきを與へませんでしたが、今新進の武光の世となり、親王をお迎へ申上げる準備を靜かに整へてゐたのでありまして、此の後三十餘年の間征西將軍宮を奉じて勤皇の大活動をするもとは、實にこの間に出來上つてゐたのでありました。

谷山での御準備

かうして肥後の樣子がやゝ落付いて來ました頃、薩摩(さつま)では宮方の勢があがり、それに熊野・瀨戸內海方面の水軍が九州に集つて宮方をお助けしましたので、征西將軍宮は正平二年十一月の末頃いよ〳〵薩摩の谷山を御出發、肥後へお向ひになつたのであります。

第六　親王肥後御入御

正平二年には、熊野・中國・四國地方から續々と水軍が鹿兒島灣に着き、陸上の官軍と共同して谷山や東福寺城の戰に手柄を立て、島津氏が大敗をしたのにひきかへて、宮方の勢は大そう振ひました。そこで親王は、このよい機會に肥後におはいりにならうと御準備を進めさせられ、惟澄には特に令旨を賜はつてお勵しになり、又惟時には祖先の功をついで賊をうつやうにとおさとしになりました。

天下の形勢

丁度この頃、吉野では北畠親房が東國から歸つて、尊氏を四方から討つはかりごとを立てゝゐましたが、九月二十七日には惟澄に、近畿地方では戰を開いたから、九州でもこの際大いに力を盡くすやうにと知らせがつきました。そして、特に親王には勅書を以てこのことをお知らせがあり、九州からも同時に兵を進めさせられるやうにとのことでありました。

即ち楠木正行は八月紀伊・河内に兵を起して南から進み、七月には陸奥の官軍、九月には東國の宮方が競ひ起つて東から進まうとする有樣となりました。

親王谷山御所出御

天下の形勢がこのやうに急に開けましたので、親王は九州の宮方を振ひ起して西の方から軍を進めるため、一日も早く肥後にはいらぬばならないと、薩摩には大將を留めて島津氏にあたらせ、正平二年十一月の末頃谷山御所を出御あり、やがて水軍を率ゐて海路肥後にお向ひになりました。

御教育

親王が谷山御所にお着きになつてからこの時まで、早六年の歳月が流れ、御年十五歳位に御成長遊ばしてゐました。その間政治と學問にくはしい五條頼元・良氏父子が、お側近く仕へて御教育申上げ、文武の道を深くおきはめになりました。殊に吉野からは「お稽古には世を治め民を安らかにするといふ一事が最も大切である。」と、お力をおつけになりました。

五條頼元——良氏（悟眞寺に碑ありと）
（清原氏）
——頼顯
良遠——頼治——良量

谷山御出發

いよ／＼十一月の末に、親王は谷山御所をお立ちになり、水軍の根據地であつた山川津から御船に召させられて、薩摩を御出發あらせられました。御途中は、熊野・中國・四國の水軍が御船の前後を護衛して肥後に向つて進み、津々に御寄泊ありつゝ、十二月十四日の頃にはは肥後の境に御到着、不知火海に入らせられました。

不知火海

冬ももなかとはいひながら、御船の進むにつれて、天草の島々・葦北莊の山々浦々美しく、不知火の海波おだやかにして、親王を奉迎するが如く、肥後の濱邊は光榮に輝いて、一しほ晴やかに見えました。

頼元は十二月一日に惟澄に手紙を送り、十四日には良氏が肥後御着を報じました。この手紙は十六日には惟澄の許に着きましたので、このときはもう葦北地方にお着きになつてゐたことがわ

かります。

宇土津に御到着

當時先發して八代莊の經營にあたつてゐた中院義定を始め、古麓城の內河義眞はいふまでもなく、遠く惟澄・菊池氏などみな奉迎に出て、御安着をお祝ひ申上げたことでありませう。けれども陸上は山多くして道わるく、かつ賊が所々に據つてゐますので、親王は御船の上から、內河義眞の古麓城を右にごらんになり、八代莊の美しい畑つゞきの海邊を北へ北へと進ませられ、正平三年正月二日をもつて、めでたく宇土津に御到着になりました。

歡呼の聲

中院義定・菊池武光・惠良惟澄・內河義眞など肥後宮方の諸將は、一族郞黨を引きつれ、喜びかしこんで奉迎申上げ、歡呼の聲は天地もふるふばかりでありました。

御船城に入御

親王は宇土の御所にしばらく御逗留あつて、長い御航海のお疲れをおやすめになりましたが、御準備がとゝのつて、正月十四日にいよ／＼御一行は宇土津を立つて菊池をさして御進みになりました。そして途中惠良惟澄の御船城に入御あらせられました。

惟澄の光榮

益城郡は八代莊のすぐそとにあたり、肥後南郡の中心で、こゝを確保するかどうかは、直ちに菊池や八代の形勢にひゞきますので、惟澄はもつぱらこの地方の平定に當り、その功績はまことに大きくありました。御船城はこの益城郡中での一番大切な所であつたのです。

親王は御船の御所で特に惟澄に謁を賜はり、年來の忠勤に對して有難い御沙汰があつて、面目をほどこしました。又五條賴元も惟澄と時局につき種々熟議を重ねてはげましました。

阿蘇惟時の參候

阿蘇惟時は惟澄の一族で、祖先は菊池氏と勤皇のために盡くした家でありましたのに、小貳賴尙等と約束をしてゐたため、惟澄や賴元や義定が、心をこめてさとしましたけれども、まだ一度もお迎ひにも御あいさつにも出ませんでした。しかし今はもうぐづ／＼してゐることが出來ません。とう／＼御船の御所に參つて拜謁しました。阿蘇の總大將の參候です。このことが賊にどんなに大きな驚きを與へたことでせう。それにひきかへて、親王の御安堵宮方の滿足は如何ばかりであつたでせう。のち賴元が惟時に與へた手紙の中に、「日頃のぞんでゐたことで、滿足に思ひます。この後は變りなくおつくし下さい。」と言つたのでもわかります。

菊池御入城

親王は一兩日御逗留にて、すぐ御船を御出發になりました。こゝで內河など御出迎への大將達は親王にお別れを申上げて、それ／＼自分の城に歸り、惟澄は益城境までお供をしてお送り申上げました。その後は菊池一族が親王をお守り申上げ、正月十六・七日の頃親王には御めでたく菊池の本城に入御、こゝを九州御鎭定の御本營とお定めになりました。

思へば菊池武光の兄武重の頃、肥後にはして九州の宮方を御指導になつた宮三位中將が、この頃にはもう薨去せられてゐましたので、武光は懷良親王を薩摩からお迎へしようと種々連絡をとつてゐましたし、親王もまた菊池氏一族の忠節により、九州の中心菊池を根據地にして九州を

御平定遊ばす御決心であつたのです。それに薩摩津に御上陸以來七年、御發遣以來十二年の御辛苦を經させられ、今目でたく御目的地菊池城に御入城遊ばされたのですから、御喜びのほどと御安堵のほど、拜察するだに畏い極みであります。

悲報

ところが近畿では、正月五日に楠木正行が四條畷に戰死し、つゞいて二十四日には高師直の軍が吉野を陷れ、後村上天皇は紀伊に行幸あらせられる等の悲報がついて、惟時がまた態度をあいまいにするなど、肥後宮方の元氣にいろ／＼と影響がありましたが、二月六日には紀伊から義定に對して、「御座所も堅固で、近いうちに大戰を開かうとしてゐる。」と通知がとゞき、義定・武光・惟澄等の諸將が心を合せて親王をおたすけ申し、內河義眞もまた古麓城をかためて、島津・相良などの賊軍が出て來るひまを與へませんでした。

八年後の大發展

これから八年後には、肥後國內では、菊池武光が征西將軍宮を奉じて宮方の大結束を行ひ、小貳賴尙・一色範氏・足利直冬などの勢を擊破して根據を固めると同時に、しきりに兵を北九州に向つて進め、筑後・肥前・筑前・豐前・豐後等六箇國を平定するといふ大發展をとげることになりました。

第七　賊軍の醜狀

一色範氏强大となる

延元元年三月多々良濱の戰の後、足利尊氏は西國の武士を率ゐて京都に攻上るとき、尊氏に從つて下つた一色範氏を九州を鎭める役として博多に留めました。範氏はこれから二十三年の長い間賊の大將として筑前・筑後・肥前を從へ、肥後に侵入して度々菊池氏と戰ひ、八代の古麓城に內河氏を攻め、懷良親王の肥後御入國を妨げるなど、不忠の行をつゞけました。

小貳賴尙範氏に不快

しかし筑前・筑後・肥前の地は、賴朝の頃から小貳氏の領地でしたから、範氏の勢が强くなるほど、小貳賴尙の心は不快になつて行くのでした。

興國五年には菊池武光が立ち、それから五年目の正平三年には征西將軍宮が菊池に御入城遊ばされ、征西府が立ちましたので、これから兩氏の關係は複雜になりました。そこへ正平四年八月の末、尊氏の子直冬が中國から追はれて九州に渡り、肥後の河尻幸俊に迎へられて肥後に着きましたので、この三氏の關係は頗る微妙なものとなりました。

直冬九州に入る

直冬は肥後に着くとすぐ兵を集め、阿蘇惟時も心をよせる有樣で、急に評判が高くなりましたので、幕府もこれを喜ばず、九州賊方の大將に命じて直冬を討たせましたが、誰もこれに應ずる者がなく、直冬は河尻津にゐて、諸國の兵を招き、京都に上る計畫をしてゐました。

直冬賴尙の連合な

小貳賴尙はこの機會に直冬と手を取つて範氏をおさへようと考へ、直ぐ直冬の所へ行つて降り

り範氏と勢を爭ふ

ましたので、九州の諸將の中にはこれにならふ者が多く、數箇月後には其の勢は侮ることが出來なくなりました。惠良惟澄も一度は賴尙から誘はれましたが、決して心を動かしませんでした。

かうして九州の地は、宮方・賊方のほか、直冬方といふ新しい賊方が出來て三分し、一層複雜な形勢となりました。

範氏勢を失ふ

小貳賴尙は一色範氏とはお互に幕府の大將でありながら、直冬と一所になつて目的を達しましたので、早速宮方をさしおいて範氏と戰を始めました。正平五年秋には直冬は太宰府に入り、その勢は九州をなびかす有樣で、範氏が博多の勢は全くおちて來ました。かくて賊軍の混亂のひまに、九州宮方は靜かに勢を養ひました。それから數年後に九州一統の軍を起したのも、そのもとはこの間に生れてゐたのであります。

尊氏直冬を討つため九州に下る

あまり直冬の勢が盛んなので、尊氏が正平五年十月博多へ下つて來ますと、九州の諸將が尊氏に從つて來ましたので、範氏も少しは勢をとりもどしました。けれどもそこへ尊氏の弟の直義が吉野に降り京都に攻め上るといふ知らせがつき、尊氏はいそいで京都にかへつたため、範氏の困窮は少しもかはりませんでした。

尊氏直義に和を請ひ勢地におつ

尊氏は京都に歸りましたが、直義の軍に勝つことが出來ず、再び西走しました。そして和を直義に請ふて許され、高師直・師泰は出家して降參し、尊氏に從つて兵庫を發して京都に向ひましたが、正平六年二月途中で師直師泰兄弟は殺され、尊氏黨の勢は地におちました。

直冬九州探題となる

この京都の戰亂の結果、正平六年の春には、尊氏兄弟の間に和が出來、義詮が政務をとり、直義がこれを輔佐することになり、事實直義が政權をとることになりました。九州では範氏がありのに、三月三日九州探題の職を直義黨の直冬に與へて政務をとらせましたので、直冬の勢はますます強くなり、それにひきかへて範氏の不滿は言ひやうがありませんでした。

直冬黨宮方に降る

直冬は範氏を討たんがために宮方に降ることを希望し、河尻幸俊も歸順し、十月阿蘇惟時も歸順し、年來の懸案は始めて解決しました。

尊氏兄弟爭ひたへず

京都では足利氏一族の間に和睦が出來上りましたけれども、心の內は十分解けず、何時爆發するかわからぬ有樣でした。そこへ直義がとつぜん政務を辭して義詮にゆづりましたので、大將達の中には亂の起ることを恐れて國に歸るものがあり、義詮に心を寄する者は少くなりました。そこで尊氏は官軍の力をからうと思つて歸順を奏請しましたが、朝廷では直義の時のことがありますので、お許しがありません。

朝廷尊氏を滅さうとし九州でも範氏の請を許し給ふ

正平六年吉野では此の形勢に乘じて賊を滅さうと、山陰山陽(常陸親王)・播磨(興良親王)・陸奥(北畠顯信)と全國の官軍が一時に立つ有樣となりましたので、九州でもまた同時に兵をあげようと、一色範氏の請を許し、これをたすけて直冬を倒すことになり、範氏は豊前の軍を率ゐて筑

尊氏歸順

宮方と一色黨との結合かたく範氏勢をもりかへす

直義殺さる

前北部から、宮方は豊後軍と共に筑後方面から、同時に太宰府を攻撃することになりました。

かくて正平六年九月、一色氏は筑前月隈・金隈の戰に敗北し、背面攻撃は失敗に終りました。又この月範氏は、直冬・賴尙と筑後床河に戰つて敗れました。

しかるに、十月尊氏直義の和が再び出來ましたが、すぐ又破れ、直義は兵を擧げようと關東に下りました。尊氏は直義が關東に勢を得ない間に東下してこれを擊たうとし、同時に京都の義詮の安全をはかるため降參の議を奏請し、直義追討の綸旨を請ひ、許されました。

こんなわけで、九州でも宮方と一色黨との結合はかたく、賀名生からも大友氏泰に直義・直冬を討つことを命ぜられ、尊氏からも氏泰に同じ命令が來ました。かうして三分した九州の形勢は兩分の姿にかへり、一色氏が勢をもりかへして來ました。

尊氏は關東に下向し、直義の軍を破つて、正平七年正月五日鎌倉に入りました。直義はもう逃げることが出來ませんので、尊氏に降りましたが、二月には尊氏のために毒殺されてしまひました。直義の死は九州では直冬の勢に大きな影響を與へました。

この機に乘じ一色範氏は宮方との連絡をかたくし、親王の御たすけを得て太宰府の攻撃を計畫し、大友氏泰や豊後・日向・薩摩・筑前などの兵を召しました。これに對して六月直冬は軍勢を集めて太宰府を守らせようとしましたが、かへつて兵數が次第に減じて、直冬は勢を失ひました。

直冬中國に逃る

京都の恢復は成功せず

鎌倉攻撃も成功せず

かつては九州全土をなびかせた程の直冬も、正平七年十一月十二日には太宰府を支へることが出來ずして西中國にのがれ、其の後は九州に歸ることも出來ぬ樣となり、それにひきかへて、一色範氏は親王のお援けにより賴尙をおさへて勢を得て來ました。

中央では正平六年の末南北合一の事が定まり、京都の公卿達は賀名生に御挨拶に出る有樣となりました。そこで後村上天皇は、正平七年二月京都御恢復の思召で八幡に行幸あらせられ、北畠顯能・千種顯經・楠木正儀・和田正忠等の近畿の官軍は、四方から義詮を京都に攻め、これを近江に追ひました。けれども間もなく賊軍は京都に入りましたので、三月・四月の間八幡附近に戰がつゞきました。この時懷良親王にも援助を求められましたが、殘念ながら九州ではまだ兵をお出しになるまでになつてゐませんでした。そして諸國の官軍がつかない間に八幡の宮方は敗れて公卿は多く戰死し、京都の恢復がもう少しで出來やうとしながら天皇は再び賀名生に遷幸遊ばさなければならなかつたことは、かへす〳〵も殘念なことでありました。

中央では京都に義詮を討たるゝとともに、關東の新田氏に命じて尊氏を鎌倉に討たせになりました。新田氏は義貞・義助の子等が力をあはせて、正平七年閏二月兵を上野に起し、信濃の宗良親王を奉じ、一隊は房總の地に走らうとする尊氏の軍を破り、他の一隊は足利基氏を擊つて鎌倉に入り、勢が大そう振ひましたが、その月の末には武藏方面の軍が連戰連敗したため、新田氏の

軍も四散し、尊氏は鎌倉をとりもどしました。そこで宮方の關東での計畫も全く破れてしまひました。

直冬の歸順

九州をのがれて長門に入つた直冬は、京都にはもう助けてもらふ直義はゐず、尊氏・義詮はかへつて敵であるので、京都に歸ることが出來ず、さうかといつて九州の一色氏は尊氏方となつてゐますので九州にも歸られず、今は全く身を置く所がなくなつてしまひました。そこで直冬は、自分の都合から吉野と征西府に使を送つて、宮方に歸順を願出ました。すると直冬に心をよせてゐた小貳頼尙と畠山直顯も、直冬に從つて宮方に降りました。

賊軍の醜狀

このことは、かつて直義が尊氏を擊たうと思つて吉野の朝廷に歸順し、尊氏も直義を擊たんがために降り、一色範氏も直冬を九州から除かうとして宮方に和を請ふたのと同じで、全く自分の都合のためばかりで動いてゐるのであります。して、宮方のやうに、皇室の御ために七生報國の精神をもつて節にたふれるといふやうな心は、少しもないのであります。

一色氏叛き九州の形勢一變

京都では尊氏・義詮父子が直義・師直兄弟を除いて、心にかゝる者が居なくなりましたので、再び吉野の朝廷にそむきますと、九州では一色氏が直冬を追ふたのを機會に、九州の宮方から離れたのであります。すると一時宮方についてゐた島津氏は、一色氏に從つて宮方にそむき、九州の形勢は一變しました。

九州御一統の機運大いに動く

九州では賊方がこのやうに節操のない行動をくりかへしてゐる間に一色・小貳兩氏とも勢を失ひ、それにひきかへて御聰明な征西將軍宮を奉じて、五條頼元・菊池武光・惠良惟澄・內河義眞等の輔弼が宜しきを得て、九州宮方の活動は次第にめざましくなつてきました。

即ちこれから宮方は、頼尙を助け、武光はこれを利用して一色氏を討ちましたので、範氏はとう〳〵京都へ走りました。正平の後半では全國の官軍が一般に衰へましたのに、九州の官軍ばかりひとり振つて、九州御一統に向はせられることになり、國史の上に燦然たる光を放ちました。

第八　九州北部の御平定

九州御一統の大業始まる

中央では、正平三年に正行が戰死して吉野の守りも危くなりましたので、この年天皇は賀名生に行幸遊ばされ、正平九年には吉野の朝廷の柱石とも頼まれた親房もまた薨ずるといふ悲運に向ひましたが、九州では、正平三年に懷良親王の菊池御入城に感激して、今や士氣大いに振ひ、親王を奉じ、武光を中心に宮方の大團結を行ひ、九州鎭定上洛の責任を果さうと、悲壯な決心をかためたのであります。

京都では尊氏兄弟の仲が惡く、そのため正平六七年の頃まではお互に自分の都合のよい時はす

賊軍壓滅の目標

ぐ吉野の朝廷に降つて、其の御力をかりて相手を攻めるといふ有様でありましたので、九州でもすぐにそのことが響いて、一色・小武・直冬等諸將の間にも全く節操がなく、宮方に對して反覆常なく、賊將の間にみにくい勢力の爭がつゞきました。

このことは宮方にとつて大そう幸なことで、この足なみのそろつてゐない間に、宮方では賊軍撃滅の準備は進められてゐたのであります。そして、この最初の目標となつた者は、一色範氏でありました。

範氏をうつ

針摺原の戰

針摺原の大勝の影響

範氏窮追の策

範氏は筑前に勢力を失ひましたので、肥前をかためようとしてゐるところへ、正平八年正月肥前に攻入つて來た肥後の官軍を追つて太宰府に進み、賴尙を圍みました、菊池武光は親王を奉じて筑後にゐましたが、すぐ兵を率ゐて北上し、二月二日太宰府の南の針摺原に一色の大軍と戰つて大勝し、賊將を多くたふして賴尙を救ひました。

この戰は一色氏にとつては大打撃で、範氏は其の後肥前にひきこもり、薩摩には宮方が一時に起つて島津氏を苦しめました。そして京都では、親王の御軍が勝に乘じて上京しようとしてゐるとの風說が行はれ、洛中震駭したほどでありました。

菊池征西府では、この間に宮方の團結が次第に實現しました。武光は征西將軍宮を奉じ、五條賴元・子良氏・良遠は帷幄の下に謀をめぐらし、阿蘇・城・赤星・惠良・名和(內河)・川尻の諸氏を始め、肥後・筑後の諸將は親王をお護りしてゐます。それに筑前には賴尙・中國には直冬あり、薩・隅には三條泰季、日向には畠山直顯があり、宮方の勢は大そう盛であります。

しかしながら賊軍にも、北に肥前の一色範氏・直氏、豊後の大友氏時・田原直貞等が連合をかたくして、菊池・小武兩氏に對抗し、南では、島津貞久・氏久・師久があつて畠山氏に當り、一色範親・相良定賴等は南肥後の內河氏や北日向の宮方に對抗するなど、その勢はなか〳〵侮ることが出來ません。

京都の形勢はもう九州に影響せず

そこで武光は、北は直冬・賴尙、南は直顯と連絡をとり、範氏を窮追することに力を注ぎました。京都では正平八年六月、四條隆俊・楠木正儀・山名時氏等が入京して義詮を追ひましたが、七月末には破れて退きました。

九年四月、二代の朝廷に仕へた北畠親房が薨去しましたことは、吉野の朝廷にとつて此の上もない不幸でありました。親房は元弘・建武以來二十四年、精忠至誠を以て朝廷に仕へ、一方熱烈な吉野精神・國體觀念を將士に植ゑつけると共に、不撓不屈あくまで京都を回復せずんばやまぬはかりごとを次々にめぐらし、精神・治國二つながら其の手に出で、正しく吉野の朝廷の柱石でありましたのに、其の薨去は誠に大きな損失でありました。

正平十年正月山名時氏は直冬と共に再び京都を回復しましたが、三月尊氏・義詮のため奪はれ

て退き、まだ京都御還幸には至りませんでした。

けれども九州では菊池氏の勢が強くて、北は一色・大友と戰ひ、南は相良・島津の敵を受けながら、ほとんど獨力をもつて征西將軍宮をおたすけ申上げ、正平後半の國史の上に燦然たる光を放たせました。その中心となるものは武光でありました。

もう九州の大勢は定まつたのです。これまでのやうに、中央の出來事のため影響を受けるやうなことは無くなりました。

南九州の形勢

正平九年南肥後では、葦北・球磨方面に一色範親が勢力をもち、相良・島津兩氏と連絡をとつて、相良の一族中球磨の宮方須惠・多良木氏を攻めましたので、八代の內河氏・葦北の宮方は、九月十八日武光の部下の應援を得て、範親を球磨に攻めました。範親は相良定頼と合同してこれに當りましたが、心配なので、島津師久に援兵を頼みました。

島津氏は一色方・尊氏方でしたから、國のあちこちに宮方が起つて苦しんでゐた時でしたけれども、範親のために兵を送りました。

日向の畠山直顯は直冬方・宮方で、島津氏としきりに戰つてゐましたが、範氏がこゝしばらくは日向に攻入ることが出來ないのを見て、急に島津氏の領地深く進入しましたので、氏久はおそれて範氏にこのことを知らせました。

一色大友遠征の御計畫

この葦北・球磨での兩軍の衝突は、九州の南と北の關係を一層密接複雜にしました。

この宮方の軍氣があがつてゐるのに乘じ、菊池征西府では、筑前の頼尙・豐後の田原直貞と結び、一色・大友遠征の御計畫を進められました。

肥前

正平十年八月十八日、親王は御みづから五條頼元父子・菊池武澄・筑後頼資・木屋行實・有馬澄明等の軍を率ゐて菊池を發し、肥前に向はせられました。途中筑前で頼尙のお迎へを受けさせられ、九月一日肥前の國府に入御あらせられ、武澄に附近の賊千葉を討たせになりました。

筑前

深堀時明といふ者が、筑前で五條良氏の軍に從ひましたので、親王はお喜びになりました。やがて諸軍は筑前の野に集結し、木屋・有馬等は武澄に從ひ、親王御指揮の下に大擧して豐後に入ることになりました。

豐後豐前

日田・玖珠・由布・狹間といたる所賊軍をうつて、十月二十五六日の頃には豐後の國府に入らせられました。大友氏泰は支へることが出來ずして降りました。それから親王は豐前に入り、宇佐・城井を攻め、宇都宮守綱を降されました。そこで豐前・豐後は全く平定し、軍威が大いに振ひました。

筑前

一色氏中國に逃ぐ

親王はそれから軍をかへして博多に入らせられますと、一色範氏・直氏・範光はかなはじと長門へ逃げました。

大勝利

親王今回の御遠征は、懸軍百里、未曾有の大勝利で、九州北部の地は千葉・大友・宇都宮三氏を降し、一色氏を追ひ、親王の命を奉ぜないものはほとんどない有様となり、全く九州の形勢に一大時期を劃せられたのであります。

一色範氏 ― 直氏 / 範光 / 範房

天皇の御内勅

正平十一年正月後村上天皇は、御内勅を良氏に傳へて戰捷を喜ばせられ、九州官軍の隆盛を祝し、且つ親王の賴元と共に早く近畿に上らせられることを望ませられました。

一色氏九州に關係を絶つ

範氏は長門にも長く居ることが出來ず、四五月の頃京都に入りました。それから直氏・範光は度々九州に侵入を企て再擧をはかりましたが、九州宮方の勢が盛んで、とても目的を達することが出來ないことを知り、十三年の春九州・中國を去つて京都に歸り、一色氏はこゝに全く九州と關係を絶ちました。延元三年範氏が尊氏に從つて九州に下り、九州探題の職につきましてから、こゝに二十三年でありました。

六箇國平定

そして九州三人衆中の小貳・大友も既に歸順しましたので、筑豐肥六ヶ國は全く平定したのであります。時に懷良親王御年三十歳前後、肥後御入國以來十一年目、其のお喜びは如何ばかりであつたでせう。

第九　南九州の御平定

島津氏の窮狀

更に南九州の形勢を見ますと、日向に畠山直顯が下向したことは、南九州に長い間勢をもつてゐた薩摩の島津氏の勢に大きな影響を與へ、其の後兩氏の間はとかく一致をかきました。島津氏は勿論尊氏方・一色方でありますが、直顯はこの古い勢とならんで行くためには、これも新しく九州に來た直冬や、一色氏と快くない小貳氏と手をとるやうになりまして、直冬が宮方に降ると、直顯も行動を共にするといふ有様であります。

正平九年直顯は大隅に攻入らうとしましたので、島津氏は驚いて伊集院・谷山等の宮方を服して、薩摩の統一に努力しました。十年四月には、下大隅郡の宮方が直顯に應じて兵を擧げましたので、島津氏久は行つて其の城を攻落しました。その留守に薩摩の宮方である牛屎・市來・東郷等が、肥後葦北莊の宮方と連合し、和泉庄の下司などの宮方と一所に、島津貞久の居城を襲ひ、同時に直顯は大隅に攻入りました。そこで氏久は諸方面の敵を受けて大そう困り、球磨にゐた一色範親に援を求め、六月十日にはこの事を幕府に訴へて出ましたが、尊氏は援軍を下すことが出

來ませんでした。

正平十年八月、懷良親王御みづから菊池武澄を從へて筑豐肥遠征に御出御あるとき、武光は南肥後の鎭定にあたり、薩隅日は三條泰季と連絡し、各地の宮方を指導しましたので、この間に薩摩の宮方は勢がます〳〵盛んになり、十年九月には泰季の軍が、市來・鮫島・知覽・左當等の兵を率ゐ、南薩摩から起つて北進しましたので、島津師久が非常に苦しみました。このほか薩摩には官軍が各地に起り、日向の直顯・肥後の球磨・葦北・八代の宮方と連絡をとり、葦北につゞいた和泉・伊佐・薩摩の諸郡は宮方の勢力範圍となり、知色城の師久は腹背に敵を受けました。

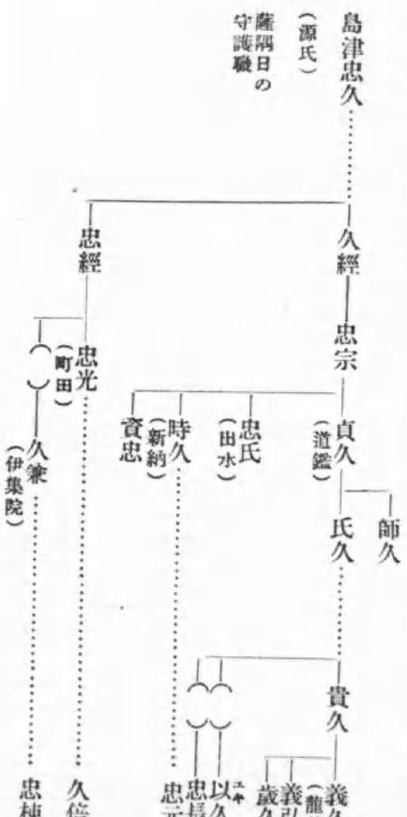
丁度その頃一色範氏が九州を追はれて長門に去つたとの噂が傳はりましたので、和泉・伊佐方面の宮方は十月の末に知色城をはげしく攻立てました。このため、師久・伯父資忠を始め、負傷百餘人、大將の戰死も多數に上りました。師久は全く困りはて、十一月五日手紙を幕府に送つて「尊氏か義詮のうち、一人、九州平定のため急いで下向して下さらねば、師久は國を捨てゝ京都へ逃げ歸るより外に方法はありません。それに父も中風で苦しんでをります。」と言つてやりましたが、その頃京都でも官軍から度々京都をとりもどされてゐるときでしたから、援軍などは思ひもよらぬ事でした、それでも尊氏は師久・資忠等の負傷を慰めて感狀を與へたり、「近いうちに下向するから、城を堅固にして待つてゐるやうに。」などゝ言つてやりました。

島津氏久歸順

畠山直顯衰へる

十一年にはさきに直冬に應じた南方の將士が、和泉・牛屎等と貞久の居城を攻めるなど、島津氏は全く滅びやうとします。そこで十二年秋島津氏久は、とう〳〵宮方に歸順を決心し、三條泰季に降りました。九州三人衆の一で、しかも南九州の雄を降したといふことは、武光の策が功を奏したのでありませう。

時に畠山直顯は、眞に盡忠の志ある者ではなく、さきに直冬が宮方に降つたので、直顯も行動をともにしたのでありましたが、正平十年九月からまたもとの賊にかへり、しきりに、島津氏の領地に攻込んで來ましたので、島津氏は官軍の力をかりて、直顯を亡ぼさうと決心しました。



十二年に入つてから、氏久は三條泰季の援を得て、加治木方面から直顯を驅逐し、つゞいて志布志で大いに直顯の軍を敗りました。直顯は援ける者がありませんので、遂に穆佐城に逃れ、畠山氏の勢が地におちました。

島津師久歸順

武光は、この機を失はず畠山氏を滅して南方の憂を絶たうと、出征の準備をしますと、師久も武光に應じて兵を出さうとし、先づ書を菊池の征西府に上つて歸順しましたので、薩摩の賊軍は多く宮方となりました。

九州の形勢概觀

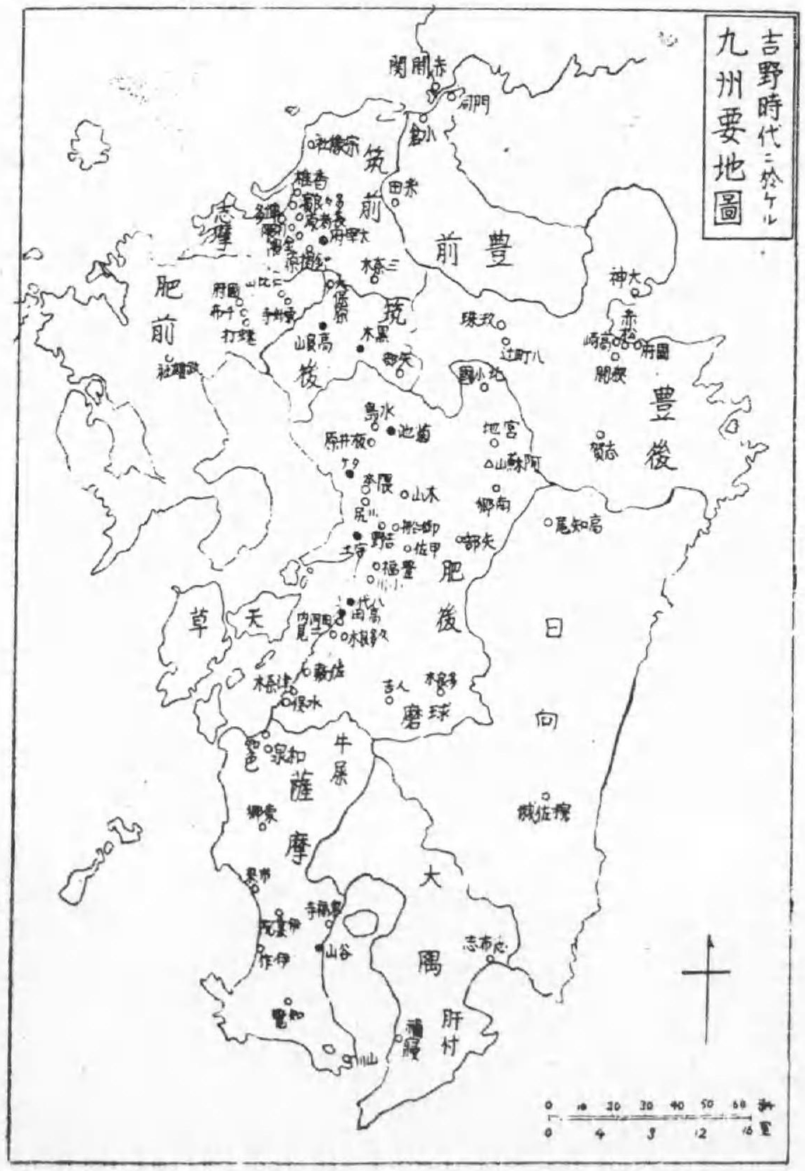
此の時九州の形勢は、一色氏は十三年春までに全く九州を去り、大友氏は十一年末に歸順し、小貳氏は既に歸順し、島津氏もまた十二年頃までに歸順し、小貳・大友・松浦・島津・阿蘇・草野等皆親王の麾下に集り、日向の畠山直顯だけが僅かに賊方として殘つてゐます。

直顯深山にかくる

そこで武光は、この直顯を滅して九州を平定しようと、自ら兵を率ひ十三年十一月十七日菊池を發し、長驅日向に入り、穆佐城を圍み、はげしくこれを攻め立てました。直顯はかなはず城をすてゝ、子重隆のゐる三股城に逃げました。武光は進んでこれも攻落しましたが、直顯父子は深山に逃れて、行方がわからずなりました。

征西府の威勢あがる

複雜を極めた南九州の形勢は、島津氏の歸順と畠山氏の敗北によつて殆ど宮方とかはり、南方の憂がなくなりましたので、菊池氏の威勢は隆々として鎮西を壓するばかりになりました。當時



近畿は勿論全國の官軍がひとしく振はぬ時でしたのに、懐良親王の御威光ひとり九州に輝きわたり、吉野の朝廷の御勢もためにます〳〵かたくなりました。

尊氏病歿す

尊氏は九州征西府の意氣が大いにあがり、全國官軍の士氣をはげましてゐる樣子を見て心配にたへず、十三年二月みづから兵を率ゐて九州に下らうとしましたが、義詮に引きとめられてゐるうち、四月病にかゝり、三十日京都で歿しました。このため京都から援兵を送ることは全く出來なくなりました。

肥後宮方の偉大さ

征西將軍宮の御威光により、九州諸豪族が大方歸順してしまひましたので、親王には肥後入御以來のお志を今にもとげさせられるが如く見えながら、それは實際にはなか〳〵容易なことではなかつたのであります。

そも〳〵小貳・大友・島津の三氏は、建久四年頼朝が幕府を開いた後、小貳資頼を鎮西の守護とし、大友能直を鎮西の奉行とし、島津忠久を薩隅日の守護職としてからのことで、小貳氏の勢は筑前を本據として豊前・肥前に及び、大友氏は豊後を本據として、筑後・肥後に及び、島津氏は薩隅日を領し、百五十年の長きにわたる鎌倉幕府恩顧の者共であるばかりでなく、足利氏が多年恩顧をほどこした家柄で、容易に拔くことの出來ない潜勢力をもつてゐるのであります。しかもその上に足利氏の大立物一色・畠山の新勢力を加へ、之に對抗するものは殆ど菊池一族の獨力

であります から、時局の重大さは實に想像に餘りがあります。

この不拔の勢力を、十年にして征西府の下に討ち從へられたことは、懷良親王が實に不世出の英主であらせられ、更に菊池氏が親王の御ために九州宮方の中核となり、一族の運命をかけて粉骨碎身した日本魂の威力によるのであります。

果して九州三人衆の歸順は、いづれも自分の都合からで、小貳氏は一色氏を、島津氏は畠山氏を驅逐するために、大友氏は勝つ見込がないために一時歸順したものでありますから、その必要がなくなつたら、早晩叛旗をひるがへすにきまつてゐるのであります。魂がすでにその通りであります から、宮方が一朝の勝利をもつて、この三氏の魂まで根柢から覆すといふことは到底出來ないことであります。

そして其の第一の人物は、大友氏時でありました。

第十　大保原の大決戰

大友氏叛く

大友氏時は、正平十三年十一月、武光が畠山直顯を討つために日向に行つてゐるすきに、豊後高崎城に叛旗をひるがへし、國内の將士を集めました。そこで親王は、十二月御みづから兵を引いて高崎城の近くの狹間まで御進みになりましたら、氏時は志賀等の軍を率ゐて、城の東の赤松まで出て來ました。まもなく親王は、武光が日向から歸國したことをお聞きになつて、兵をおかへしになると、賊は阿蘇郡の北境近くの八丁辻まで追擊して來ました。

二度目の豊後御遠征

このことがあつてから、豊後には宮方に叛くものが多くなつて來ましたので、翌十四年三月二十日、親王は氏時等を征せんがため、武光・武澄を從へ、木屋行實其の他筑後の軍勢を引きつれて、二度目の豊後御遠征の途につかせられました。

遠征軍は先づ小國を越えて豊後に入り、八丁辻から氏時の將志賀頼房の居城を攻め、四月十二日進んで氏時を高崎城に攻めました。すると、頼房の子氏房が後方から出て來て官軍の交通を斷たうとするなど、容易に從はうとしませんでした。

志賀氏（大友氏）
- 貞朝 ― 頼房 ― 氏房
- 貞泰

小貳頼尙叛く

さて大友氏の隣國である小貳頼尙は、一色範氏のため勢をとられるのをかねて不快に思つてゐましたが、その一色氏を十三年宮方の力によつて全く九州から追ふことが出來たのですから、もう宮方についてゐる必要がなくなりました。そこで宮方から離れて再び九州三人衆中隨一として

の地位にかへらうと、其の機會をねらつてゐました。

丁度十三年四月尊氏が歿したことは、賊方に非常な不安を與へました。そこで義詮は、もしこの危機に乘じて、この新興九州の宮方が京都へ攻上るやうなことがあつては一大事であると、新しく細川繁氏を九州探題として下すことになりました。ところが繁氏は、途中讃岐で病死してしまひました。

阿蘇惟村叛く

頼尚は、もう一刻もぐづ〳〵しては居られないと思ひ、大友氏時と連合し、氏時が先づ叛き、親王が二度目の豊後御遠征のそのひまに乘じ、頼尚もとう〳〵太宰府で叛旗をひるがへし、四月十六日太宰府を出發して、豊前糸田に陣して官軍を牽制し、官軍が菊池へ歸つたと聞き、肥前から筑後に出て、菊池を襲はうとする勢をとりました。親王は、ことが重大でありますので、直に豊後の攻撃を中止して、菊池にお還り遊ばすことゝなりました。

時に阿蘇氏では、惟時が死んで、一族惟澄の子惟村が大宮司でありましたが、惟村は父に似ず頼尚と通じ、小國に九箇所の城を構へて、遠征軍の歸路を待受けてゐました。遠征軍はこの城を次々に打破つて、惟村を阿蘇に追ひ、親王は五月十二日御無事に菊池へ還御になりました。

名和顯興八代莊に來る

この時局重大の時、八代莊では、名和義高の猶子（義高弟基長の子）顯興が、はる〴〵一族三百餘人を率ゐて來て豊福城に入り、父義高以來の地頭職をつぎました。そして古麓城には、家臣

氏時肥後南郡に侵入す

内河義眞が二十四年間の功勞をほめて、もとどほり城代とし、相良・島津兩氏に備へました。顯興の八代莊入りは、肥後の宮方に一大勢力を加へたもので、これから八代莊では名和氏が代々城主となつて、八代・葦北兩莊の守りをかためました。

名和顯興畫像

八代市嘉悦才藏屋敷ノ所藏　葦北氏町洲

頼尚はしきりに、筑前・筑後・肥前の間に兵を動かして、菊池氏の注意を北方に向けさせながら、氏時は六月二十七日急に志賀氏房等の兵を率ゐて、阿蘇から益城に侵入し、御船・隈庄・甲佐を攻めて、頼尚と菊池を挾撃しようする勢を見せました。けれども南郡の惟澄・内河義眞・宇土道光等が心をあはせて攻め立てましたので、氏時はとう〳〵豊後に退きました。

そこで武光は、專ら頼尚討伐の御計畫に心を盡くすことが出來ました。

親王の御英資と御勇氣

親王は御年三十歳前後、御生れつきの御賢こさに加へて、御幼時から艱難の中に御修養を積ませられたことでありますから、百折不撓御みづから陣頭に立つて朝敵小貳大友を討たうと御勇氣溢れ給ひ、武光もまた壯年で、全軍の實力が充實した時ですから、この反覆常なき朝敵を一擧に撃滅して、父武時以來の志をとげようとし、今や菊池征西府では、將士の意氣は既に敵をのむ有様であります。

親王御出征

正平十四年七月、親王はいよ／＼賴尙を亡ぼして太宰府を占領し、賊軍の死命を制しようと、供奉の五條賴元・良氏・良遠其の他洞院・竹林院・春日・花山院・十御門・坊城・葉室・日野・高辻の公家達を從へ、武光を始め武政・武澄・武信・武明・武官等菊池の一族、名和・新田の一族其の他肥後勢實に八千餘騎を率ゐ、燒くやうな暑氣を冒して菊池を發し、筑後に入り、筑後川を前にして高良山・柳坂・水繩山の三箇所に陣を張らせられました。

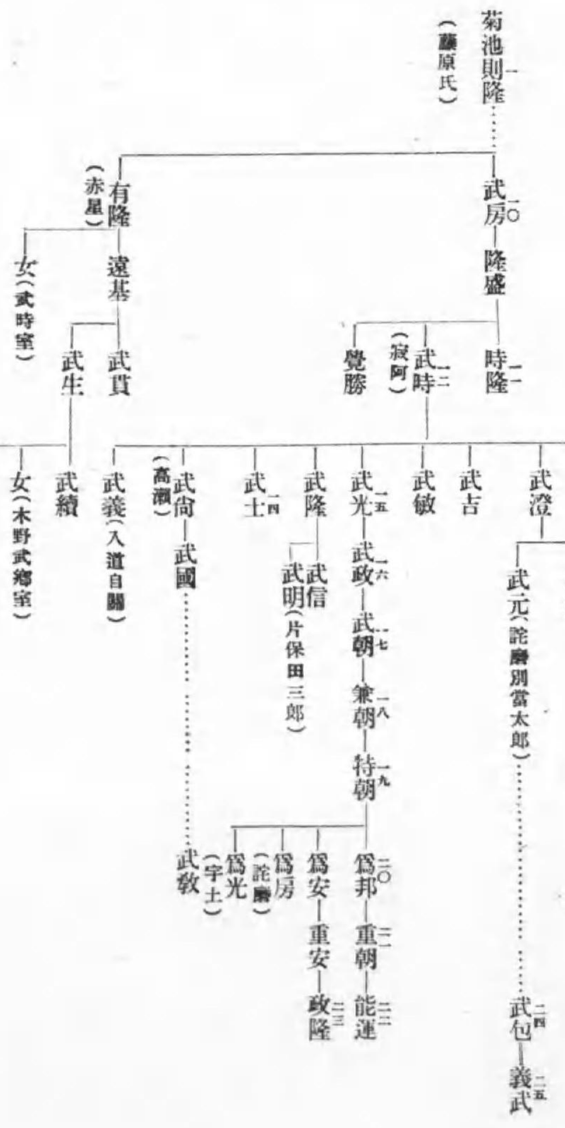
賴尙の出陣

肥前勢・筑後勢・薩摩勢・日向勢も御旗元に馳せ參じ、總勢四萬と傳へられました。

これに對し賴尙は大友氏時と聯合し、子直資・甥賴泰等の一族を始め、筑前・筑後の諸族、肥前の松浦・龍造寺・深堀、肥後・薩摩の賊徒六萬の大軍を引連れて南下し、筑後川の杜の渡を前に見て味坂庄一帶に陣をとりました。

對陣

今や九州武士は悉く此の戰に參加し、九州の宮方・賊徒の運命を決する天下分け目の戰、所謂筑後川の大合戰はまさに開かれやうとするのであります。



頼尙退いて大保原に陣をとる

小武・大友は、菊池軍が川を渡りかけるところに猛攻撃を加へる計畫でしたが、菊池軍の威力が意外に強いのに驚いて、頼尙は急に味坂庄の陣を引上げて、川の北約四粁大保原の原野に陣をしきました。大保原は筑後平野の北端に位し、山地を背にし、寶滿川と沼地を前にし、太宰府へは二時間の行程にあります。

頼尙の退却を知つた武光は、七月十九日の夜全軍を部署し、鳴をしづめて筑後川の渡河を決行し、大保原へ進出しました。ところが頼尙はなぜか深い沼を要害としたまゝ軍を動かしません。菊池軍もまた、沼の小徑が斷ち切られてやつと一つの小さい橋が殘つてゐるだけですから、なか〳〵大軍を進めることが出來ません。

兩軍の先頭はしだいに近づいて、互に旗の紋所さへ見分けることが出來る程になりました。菊池軍からは毎日のやうに戰を挑みますが、賊軍はやはり動きません。武光はかの正平八年、頼尙が小浦城で範氏に圍まれ、討たれやうとするところを救つてやつたとき、頼尙が喜びにたへず、「この後子孫七代まで菊池氏には弓を引きません。」と誓つて書いた起請文を旗竿に結びつけて賊共に見せ、頼尙をはづかしめたのは此の時のことでありました。兩軍はかうして對陣のまゝ十日餘りを過しました。

夜襲隊

武光はもうがまんが出來ません。八月六日の暗夜に乘じて全軍は出動を開始しました。木屋行實等十八人を先鋒とする三百人の夜襲隊が、先づ七日の午前二時頃、東の方へ迂回して賊の後を奇襲し、つゞいて本軍は寶滿川の堤傳ひに賊の正面に攻寄せました。賊軍は不意を打たれて混亂し、たちまち矢叫びの聲は天地をふるはし、大保原は一瞬にして未曾有の血戰場と化しました。

第一陣

天明くるとともに、武光の子武政は千餘騎を率ゐて先登し、頼尙の子直資の軍と激しく戰つて直資を討ちとりますと、これを見た賊兵百餘騎の猛烈な逆襲にあひ、第一陣二千餘騎の將武明以下八十三人皆戰死をとげました。

第二陣

第二陣の將武信・赤星武貫は、武政にかはつて、千五百餘騎を以て小武頼泰に戰を挑みましたが、敵の大軍に包圍され、兩軍死傷が多く、頗る血戰を極めました。

第四陣第三陣

親王は第四陣三千餘騎を指揮しておはしましたが、味方の形勢がよくないと御覽じて、第三陣四千餘騎を引率してゐる大將武光・新田氏の一族等を率ゐ、御みづから陣頭に駿馬を進め、頼尙の本陣めがけて猛襲を加へられました。

親王三創を負ひ給ふ

賊は「すはこそ將軍の宮ぞ」と、二萬餘騎の大軍全力をこゝに集め、隙間もなく攻め寄せました。親王は御勇氣充滿、頼尙を追ふて縱横に御奮闘あらせられましたが、敵の迫撃ものすごく、遂に親王は御左脇・御左肩等に三創を被らせられ、御鮮血淋漓として原頭の草を染めるうちに、御乘馬もたふれ、御徒立とならせられましたが、なほも屈せず、敵陣に突入遊ばさうとしますの

風前の燈

右翼隊

左翼隊

武光の奮戰

で、日野・坊城・洞院・花山院等供奉の公卿がこれを止め、親王を落し奉らうとして奮戰し、ことごとく親王の御馬前に死にました。

武光は無念と心は矢竹に逸りますけれども、亂軍の中ゆゑ近づいて救ひまゐらすことも出來ません。木葉の城主宇都宮隆房がかけよつて御身をかばひ奉らうとして戰死し(三十一歳)、今はたゞ僅かに生き殘つた近侍の將卒が、鎧の袖をかざして、親王の前後左右に立ちふさがり、流矢を防がうともみ合つてゐるばかり、親王の御一命は全く風前の燈であります。

この時五千五百餘騎を率ゐた右翼隊の名和顯興は、苦戰して右翼の賊をくひとめてゐるところへ、丁度左翼隊の新田氏の一族が、折よく一千餘騎を率ゐて賊の左側面に殺倒して來て奮戰し、親王の御軍も少しく息をつく所に、世良田・岩松・田中等の諸將が戰死をとげました。

武光は子武政と共にやうやく親王を落しまゐらせましたので、今は平生の約に違はず皆我と共に討死せよと四千の精兵を叱咤しつゝ、縱横無盡に斬りまくりました。冑は破れて落ち、小鬢には二刀を受け、髪は切れて髪が顏におほひかゝり、目眥裂けて凄じい形相であります。その時馬を躍らせて、突進して來た敵の將小貳武藤に組付いて其の首をとり、武藤の冑を着け、馬を奪つて騎り、雨と降り來る矢を物ともせず、またまつしくらに大將賴尙の本陣へ斬り入りました。

今朝の六時頃から全軍總攻擊にうつり、食も水もとるひまさへない激しい戰です。まさに日も

國體の精華

西に傾いて、生き殘つた將士はもうすつかり疲れてゐましたが、全軍これに力を得て、こゝを最後と皆死力をつくして奮戰しましたので、賴尙はたまらず寶滿山に向つて逃げ、賊軍もまた潰走しはじめました。時に午後六時過ぎ。實に半日を越える大血戰で、接戰數十合、激戰數合、兩軍死する者算を亂し、伏屍野をおほひ、寶滿川も爲に赤くなつたと言ひます。

親王の御軍は勝を得て、賊軍に莫大な打擊を與へたのでありますが、死傷が甚だ多かつたため小貳・大友の兩賊將を追擊することが出來ず、兵をまとめて一旦肥後へおかへりになりました。

第十一　九州御一統

この戰は、賴尙が祖先以來の天險に據り、太宰の小貳としての百五十年の古い勢力を中心に九州恩顧を擧げて、しかも滿を持してゐるのに對し、武光は征西將軍宮の御威光により、菊池氏三百年の精神力を中心に、都から下向した公卿や、名和・新田の新勢力、新附の九州宮方をうつて一丸となし、奇兵をもつて一擧に賊の本陣を擊破しようとしたため、兩軍接戰奮鬪未曾有の大戰となつたのであります。

この戰鬪に、親王は畏くも全技玉葉の御御身をもつて、御みづから陣頭に立つて三軍を御指揮

あらせられ、身に三創を負つてなほ屈せず敵にあたり給ふた壯烈なる御決心と御勇氣とは、誠に恐懼感激の極みであります。

しかも武光以下四萬の將士悉く暑氣と空腹を克服し、あくまで賊將を追究し、親王をお護りし、勇戰力鬪多く親王の御馬前にたふれました。その壯烈なる精神は、これまた感激の極みであります。

この長い御垂範と、この崇高な實踐とは、盡忠報國の鑑としてこゝに六百年、まさ〳〵陸離たる光彩を放つてゐます。

太宰府包圍の體制始まる

この勝戰に九州の大勢は全く決し、武光は親王を奉じて漸次賴尙を北に壓迫し、十五年正月には、賴尙が再び兵を擧げないひまにと、菊池武安を肥前に遣して賴尙の後援を絶たせ、同時に豐前・筑前方面に大友氏をうたせ、又自ら兵を引いて筑前志摩郡まで軍を進めて、松浦黨との連絡を斷ち、四月十一日肥後・筑後の軍勢を率ゐて太宰府を攻擊しました。

親王筑前志摩郡に入らせらる

賴尙は大保原の敗戰後は再起の勇氣も失せて、此の後は子冬資と、直資の子賴國がかはつて菊池氏の兵と戰ひましたが、まさ〳〵敗れるばかりです。

十六年四月初には、武光は親王を奉じ、名和顯興や新田の族を率ゐて再び筑前の志摩郡に入りました。既に筑後と、肥前の東部は官軍の領地となり、西と南から太宰府を包圍する形勢となりましたので、賴尙は心配に堪へず冬資・賴國を肥前の陣から呼びかへしました。大友氏時も兵を引いて應援に來ましたので、賴尙は力を得、太宰府の周圍數里の間の城にそれ〴〵部將を配置して、太宰府を守つてゐました。

小貳資賴……┬經資……┬貞經─賴尙─┬直資─┬賴國
　　（鎭西ノ守護）　　│　　│　　│　　│　　└賴興
　　（藤原氏）　　└景資　　└（　）─種信　　└冬資
　　└賴澄──貞賴……

太宰府陷る

武光は四月親王を奉じて日向に入り、五月には畠山直顯の餘類を攻めてゐましたが、このしらせを聞いて兵をかへし、七月には賊軍を敗つて天拜山に進み、更に太宰府を陷れて賴尙の館を燒打しましたので、賴尙は寶滿岳の陣へ退きました。官軍はめでたく太宰府に入りましたが、八月七日親王は大軍を率ゐて博多に入御あり、諸軍は賊軍を東に追ひ、一隊は大友氏時の留守を襲つて各地に賊を敗りました。

博多入御

更に八月十六日には、武顯を遣して太宰府の小貳の本據をつかせましたので、賴尙はとう〳〵たへかねて豐後の大友氏のもとに逃げ、髮をそつて隱退し、不遇の中にその哀れな末路をむかへました。

太宰府入御

かくて親王は、筑前の小貳の根據を覆へさせられ、九州がほゞ平定しましたので、御座所を太

宮廷の歎呼

宰府に移し給ひ、これから文中元年今川貞世が侵入するまで十二年間、號令はすべてこゝから發せられ、征西府最盛の時期に入りました。

思へば親王肥後入御後十三年、京都御發遣後實に二十五年目で、供奉の五條頼元父子を始め、菊池武光以下官軍將士の萬歳の聲は、定めし鎮西の天地を搖がせたでありませうが、この長い間には、後醍醐天皇の崩御、御生母の薨去があり、又更に親王の御敎育に心をつくした五條良氏の卒去あり、親王の御感懷は如何であらせられたでせう。想ふだにおそれ多い極みであります。

斯波氏經九州探題となる

足利義詮は九州の形勢を心配し、正平十五年三月新に斯波氏經を九州探題に任じ、大友氏時にこれを助けさせることにしました。氏經は十六年六月京都を出發し、十月豐後の府中に着きますと、小貳冬資がまずこれに應じましたが、征西府の勢が強い時ですから、召に應ずる者がありません。そこで大友氏時と相談して、北九州の佐志・松浦黨・小貳の殘黨、肥後の阿蘇惟村をしきりに誘ひました。

名和顯興の南肥後防禦

時に八代莊の名和顯興は、大保原の戰に右翼隊を指揮して功を樹て、凱旋するや、古麓城に入城し、大いに一族及び家臣を八代・葦北兩莊の諸城に配置して、防備を嚴重にしました。

即ち葦北莊薩摩境の水俣城に本郷家久、津奈木城に嘉悅泰行、佐敷城に上神重光、田浦城に進眞春、八代莊興善寺城に本郷忠行、岡城に佐々木高光、小川城に內河義眞を置いて、相良・島津兩氏をして北上の隙を與へず、九州御一統の大業を翼賛する所が多大でありました。

阿蘇惟村の不忠

さて斯波氏經は、阿蘇惟村が賊方に心を寄せてゐるので、これを利用して菊池氏を攻撃させようと、十六年二月には義詮は、父惟澄に肥後守護職を與へ、子惟村には軍功をほめる手紙を與へました。けれども惟澄は年來の忠節を守つて動きませんので、十七年二月には氏時が子の惟村に手紙を送つて、肥後守護職を代へてもらふやうに幕府に賴んでおいたから、兵を擧げるやうにと勸めて來ました。

阿蘇惟澄・惟村父子の有樣がこの通りですから、宇土道光や名和顯興はしきりに惟村の肥後南郡の勢を牽制しました。

長者原の勝いくさ

正平十七年武光が豐後征伐に力を入れてゐるすきに、氏經は其の子松王丸を將として、北九州の賊軍を率ゐて太宰府を襲撃しようとしました。九月二十一日菊池武義は諸將を率ゐて長者原にこれを迎へうち、武光もこれを聞いて豐後から兵をかへして力をあはせ、大いに大友軍を敗り、つゞいて北九州の賊をうち、武光はまたしきりに大友氏時を豐後に攻めました。

正平十八年になつて、惟村は武光の軍にさへぎられて豐後に出兵することが出來ず、島津氏もまた動かうとしませんので、氏經はすつかり窮し、長門の大內弘世に援を求めました。弘世は直に海を渡つて門司城を攻めましたので、菊池武勝は名和・原田・秋月等の兵を率ゐてこれを長門

に追ひ、二月武勝は名和・厚東等と弘世を馬岳城に圍んで降しました。そして弘世は名和氏の世話で太宰府に謝罪して、やつと國に歸ることが出來ました。

氏經九州を去り大友氏平ぐ

九州探題斯波氏經は、官軍の攻擊に堪へかねて、とう〳〵豐後の高崎城を出て周防の國府に逃れ、やがてすご〳〵と京都に歸つたため、京都は非常な驚きでありました。

武光はひきつゞいて豐後にゐて、ますます〳〵氏時を攻めましたので、松岡城は陷つて小貳賴尙は土佐に逃げ、氏時は捕へられ、子氏繼は大內氏の許に逃げ、臼杵城も陷り、豐後は大てい官軍の手に歸し、武光は太宰府に凱旋しました。

九州御一統

大友能直……貞宗―氏泰
（藤原氏）
（豐前豐後守護職）
（鎭西の奉行）
貞宗―氏時―氏繼―親著
氏時―親世―持直……義長―義鑑―義鎭―義統
（宗麟）
義長―重治（菊池義武）

かくて正平十八年、今は九州全土征西府の盛んな威力になびかぬ草木なく、九州御一統の御使命はほゞ成就し、近畿の宮方も、征西府があるために、其の勢を保つことが出來るといふ有樣となりました。

親王が興國三年薩摩津に御上陸あらせられてから實に二十二年、肥後入御後十六年の歲月が流れ、御年三十五歲前後にならせられます。

この間親王には、たゞ一途に天皇の御爲に九州鎭定に御精勵あらせられ、五條賴元・良氏・中院義定・三條泰季等の賢臣が輔弼の任に當り、菊池武光以下の名將が仰せのまゝに身命を捧げて艱難辛苦し、よく征西の任をお盡くしになりました。

第十二　東上軍の進發

御上洛の御使命

征西將軍宮の御使命は、九州の賊徒を平げ、官軍を率ゐて東上し、京都の賊徒足利氏を討滅し給ふのにありまして、これは後醍醐天皇が定めおかせられた所であります。したがつて後村上天皇も、數度このことをお勸めになりましたが、まだ其の時機になりませんでした。

やがて正平十年筑豐肥六箇國御平定の後は、直冬・範氏中國に走り、小貳・大友降り、一時九州は殆ど敵なき有樣となりましたので、御東上の御計畫がほゞとゝのつたと見え、後村上天皇から五條良氏へ、大いに喜ばせられる旨の御內勅がありましたが、實現されませんでした。

幕府のおごろき

京都でも足利氏が九州官軍の東上を恐れ、細川・仁木・大內氏等の賊徒に內海の島々を押へて官軍東上の道をふさがせましたので、正平二十年四國の河野通直が歸順して太宰府へ御挨拶に出たまゝ歸國が出來ぬ有樣でした。

けれども九州では、義詮が九州の形勢をとりもどさうとして二度も九州探題を下して見ましたが、斯波氏經は四年の間何もなすことなくして九州を逃げ出し、澁川義行は中國まで來て進むことが出來ぬ有樣で、京都を震駭させたばかりでなく、この後遠く明國の朝廷に對しても儼然たる我が國威をお示しになり、九州官軍の意氣が最もあがつてゐる時でしたから、東上の御計畫はいよ／＼進みました。

良成親王の御差遣

しかし小貳・大友兩氏とも全く亡びたのでなく、島津氏もまた勢をもつてゐます。征西府に服した諸將はすべてが勤皇報國の精神に醒めて歸順したものではありませんから、親王は吉野の朝廷に對して別に征西將軍宮の御差遣を請ひ給ひ、正平二十二年後村上天皇第六の宮良成親王の御下向となりました。親王は其の時僅か五六歲の御幼年であらせられました。

たま／＼この年の十二月、京都では義詮が病死して僅か十歲の義滿があとを繼ぎ、混亂してゐます。機は漸く熟しました。

東上軍の進發

正平二十三年二月、御上洛の御計畫は成り、親王は良成親王を太宰府に留め、御みづから菊池武光・武政以下九州勢七萬餘騎を從へて、東上の途につかせられました。

御東上失敗す

しかしながら瀨戸內海には、細川・大內・大友等の夥しい賊船が島々によつて御進航をふさぎましたので、不幸にも東上軍は到るところ海戰に大敗し、親王の御東上は御困難となり、官軍は豐前にかへりました。九州の鎭定に目ざましい活動をした勇士も、なれぬ海上ではどうすることも出來ません。切齒扼腕たゞ都の方を望んで涙を流すばかりです。

四國御經略

そのうち大內義弘が攻め寄せるといふ風聞がありましたので、親王はつひに東上の御計畫をとゞめて、太宰府へ歸らせられました。御心中拜察するだに畏れ多い極であります。

しかもこの年の三月常に親王をおはげましになつた御兄宮後村上天皇が崩御ましましたので、親王はいたく悲しませられましたが、御東上の御志は少しもおかへになりませんでした。

親王は先づ四國を平定して內海の制海權を握らねばならぬと、太宰府御歸還後間もない六月、河野通直に四國の經略を命じ、翌二十四年の末には、更に若宮良成親王が四國に御發向になりました。

通直は若宮を奉じて奮鬪し、北は周防、南は土佐まで官軍の勢をひろめ、內海の制海權をも收め、懷良親王御東上の御通路を開くことが出來ました。

東上御斷念

然るに京都では、建德元年九月新しく幕府の大人物今川貞世が九州探題に任ぜられ、弟仲秋・子義範を始め、其の當時京都に逃げて來てゐた小貳・大友・田原・宇都宮・富木等の賊將を從へて、翌二年二月京都を發し、七月其の第一陣は豐後に上陸し、第二陣第三陣は中國に待機してゐました。

武光は今川軍のそろはぬ間に第一陣から撃破しようと、建徳二年の八月から賊に迫りましたが、賊勢が強くて勝つことが出來ません。かの信濃(しなの)におはす御兄宮(みえのみやわれなが)宗良親王に歌を贈つて、互にお勵ましあひになつたのは此の年の九月のことで、親王の御心中を拜察し奉り、餘りにもおいたはしいことでありました。

懷良親王御歌(建徳二年九月二十日宗良親王に贈り給ひ、御使十二月到着)

日にそへてのがれんとのみ思ふ身にいとどうき世の事しげきかな

知るやいかに世を秋風の吹くからに露もとまらぬ我が心かな

宗良親王御返歌

とにかくに道ある君が御世ならばことしげくとも誰かまどはむ

草も木も靡くとぞ聞くこの頃の世を秋風となげかざらなむ

十二月貞世が九州に上陸する頃には、其の勢は容易ならぬものがありましたので、瀬戸内海ではこのやうに御東上の好機會が來ながら、御斷念あらせられ、後天授(のちてんじゅ)元年には良成親王も九州に還御(くわんぎょ)あらせられるに至つたことは、惜しみても餘りがあります。

文中元年の始め貞世(さだよ)が三道から太宰府に進發しますと、一應宮方に歸順してゐた諸將もこれに投ずるものが多く、文中元年八月、官軍は死力を盡くして防いだのにかゝはらず、つひに太宰府

太宰府陷る

を支へることが出來ず、武光は懷良親王を奉じ、十二年の間住みなれた征西府の地をあとにして高良山(かうらさん)の城に退きました。四方の官軍は起つて親王をたすけ奉りましたけれども、大勢は既に傾き、どうともすることが出來ませんでした。

こんな多難の時にあたつて、翌文中二年には宮方の柱石たる忠臣武光が卒し、武政もつゞいて戰死し、文中三年武朝が十二歳で菊池十七代の主となり、九州の御大事(おんだい)を背負つて立たなければならなくなりました。

この年九月高良山も陷り、十月親王は菊池の本城に入らせられて、外城(とじやう)の警戒を嚴重にさせられました。

今川貞世は九州に入つて五年にして賊徒を殆ど其の手に收めることが出來ましたので、いよいよ菊池の本據に總攻擊を加へ、宮方唯一の據點を陷れようと、大軍を率ゐて肥後に侵入し、天授元年七月十二日武朝が守つてゐる水島城を攻めましたが、賊方が一致せず、貞世は水島原に大敗して引上げました。

この年良成親王が四國から菊池にお還りになりましたので、懷良親王は征西將軍職を若宮にお譲りになり、五條良遠の筑後國矢部に御退隱遊ばされました。親王肥後入御以來二十八年間、吉野御發遣以來實に三十九年間の多難な御任務であらせられました。

菊池武朝立つ

御隱退

第十三　懷良親王の御孝心

天授元年、懷良親王は征西將軍の御職を良成親王にお讓りになり、しばらく筑後の國矢部の五條良遠のもとに御退隱遊ばしてゐましたが、やがて八代の高田御所にお移りになり、此所で三・四年の間をお過し遊ばされました。

親王は弘和二年の頃から、御惱あらせられましたが、三年三月の始頃から御病つのらせ給ひ、それに二十餘年前大保原の戰に受け給ふた御左肩のきづさへ再發し、三月二十七日をもつて、高田御所に薨ぜられました。時に御年五十五六歲。御遺言により妙見中宮護神寺の境內に葬り奉りました。現在の御墓であつて、英靈長へに此の地に留り給ふのであります。御法號を悟眞大禪定門と申上げます。

元中七年菊池武朝が良成親王の令旨を奉じ、御墓前に悟眞寺を建てゝ、親王の御冥福を修し奉り、今に至るまで長く法燈が輝いてゐます。

當時八代平野は球磨川河口の三角洲が其の主たるもので、斷層線下の平地は至つて狹く、現在の麥島、舊八代町などは勿論まだ海中にありましたが、軍事上大そう大切な所で、古麓城に名和顯興が居り、斷層崖の諸城には、北は豐福城まで名和氏の一族がゐてかためゐ、南は平山城に從者の一人松岡大學亮の一族、二見城に菊池武士がゐてともに高田の御所をお守り申上げますので、親王は肥後御入國の御後は、度々八代にお住ひ遊ばされたやうであります。

薨去

悟眞寺

八代は御ゆかりの地

懷良親王は、まだ十歲にも滿たせられぬ御幼年の頃、僅か十二人の從者と都を離れ、五十有餘歲で八代で薨去遊ばされるまで、御父君・母君のお姿は、幾度か御夢にお通ひ遊ばされたことでせう。しかし、その御膝下にお歸りになつて親しく御物語り遊ばす日は、とう〳〵來なかつたのであります。

懷良親王が御孝心深くあらせられた御事蹟は、數多く傳へられてゐますが、其の中でも宮地で拜することの出來るものが少くありません。

悲憤の涙

延元四年八月御父後醍醐天皇が崩御あらせられ、それから十二年後の正平六年三月御母靈照院尼がまた薨去遊ばされました。其の時親王は御年二十歲ぐらゐ、肥後御入國後まだ僅かに四年目で、九州御一統の十三年前でありましたので、御悲しみは殊に深くあらせられました。そして日がたつにつれて御兩親をお慕ひ遊ばす御有樣は誠におそれ多い程でありました。

御追慕

親王は古麓城の北の方中宮谷をへだてゝそびえる大平山の中腹に寺を建て、顯孝寺と名をおつけになりました。こゝからは宮地の町が一目に見えました。このお寺に御兩親の御靈牌をお手づからお作りになつて安置し、又境內の洞泉寺谷に近い所に、御父天皇の御形見の御小袖を埋め、

顯孝寺

御靈牌

御移葬

寶篋印塔

今は

御墓

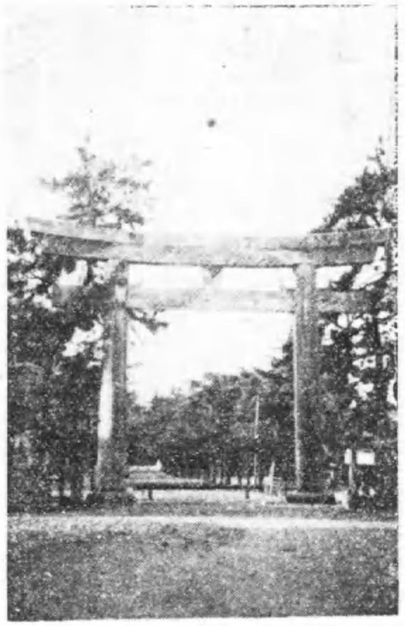
八代宮

御追悼あらせられました。

なほ八代よりほかの所でも、御寫經御奉納等の御孝心の數々が傳へられてゐます。

今は顯孝寺はなく、御靈牌は悟眞寺境内の親王御靈殿に奉安し、御移陵はお小袖塚として參詣者が絶えず、寶篋印塔は親王御墓境域に奉安し、參拜の人々の涙をそゝつてゐます。

懷良親王御墓は、明治十一年四月二十五日から宮内省の所管となり、親王をお祀りする八代宮は、明治十三年八月三日官幣中社に列せられ、社殿を舊八代城本丸址に創建し、明治十七年四月二十日懷良親王御鎭座祭を御執行あらせられ、つゞいて十九年十一月十日良成親王を御配祀あら



八代宮　　官幣中社

五輪塔二基を建てゝ御移陵を築き、高田御所か古麓城か、妙見中宮に御住ひの節は、常に御參拜になつて、御兩親の御菩提をお弔ひになりました。

又天授七年は親王御薨去三年前でありますが、御母君三十年御忌に當らせられるので、御追懷のあまり、妙見中宮護神寺にお參りになつて、寶篋印塔を建てゝ

せられました。

御孝行のあと

第十四　御小袖塚

大平山の中腹に御小袖塚があります。これは懷良親王が御父君後醍醐天皇と御母君靈照院尼に對し、御孝行遊ばされた御あとであります。

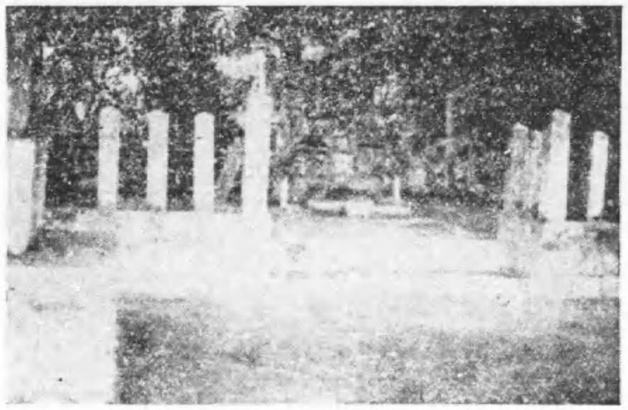
御醍醐天皇崩御の頃の親王の御動靜

御醍醐天皇は延元四年八月十六日に崩御遊ばされました。この頃は親王はまだ瀨戸内海の忽那島にいらせられて、九州におはいりになる御準備中でありましたので、お悲しみとおさびしさは一通りではありませんでした。

天皇崩御の頃の九州の形勢

さて八代莊では内河義眞が、地頭職名和義高の代官として古麓城を守つてゐました。すると入吉莊の地頭相良定頼が尊氏に心を寄せて京都に上らうとしますので、球磨の宮方相良經頼等と力をあはせてその道をふさぎました。その上南九州の大隅・薩摩の肝付・伊集院氏、肥後の北の方では菊池・惠良氏等と心をあはせて、親王御入國のために盡くしてゐましたので、その頃義眞は南郡での大切な大將でありました。博多の一色範氏は兵をやつて度々八代莊を攻めさせた程でしたが、成功しません。そのうちに宮方の勢がだん／＼盛んになつて來ましたので、範氏も大へん

靈照院尼薨去の頃の親王の御動靜



御小袖塚　　熊本縣史蹟

苦、御さびしさはとても言ひつくせないほどであり、御尊母の薨去は實にこのめでたい肥後御入國の四年目で、九州の宮方が親王をお迎へ申上げて、菊池氏を中心に九州御平定の御事業に勇ましく出發したところでありました。

に困りました。

そこで尊氏は、延元三年の始頃に小貳頼尚を九州に下しました。頼尚は肥後に攻入つて菊池武重を攻め、進んで惠良惟澄を甲佐城に攻め、又進んで八代莊に攻入りました。

このやうに天皇崩御の頃は、肥後の宮方が心をあはせて賊を討ちましたが、まだ親王をお迎へ申上げることが出來ず、これから十年後に始めて御入國遊ばされたやうな次第でありました。

次に御尊母の薨去は、正平六年三月二十九日でありました。正平三年正月二日に親王はめでたく宇土津に御着、まもなく菊池に御入城になりましたが、これは都をお立ち遊ばしてから實に十二年目であると申します。この間の御辛

御對面の日もなくて

御移陵

顯孝寺

御靈牌

顯孝寺跡　　（右手の森は御小袖塚）

靈照院尼は天皇崩御の後は京都におはして、朝夕御心靜かに御經をおよみになり天皇の御冥福をお祈りになり、又親王が無事御成長遊ばして九州御一統の御事業を御成功遊ばすやうにと、そればかりお願ひになつてゐましたのに、親王にはとう〳〵御對面の日もなくてお別れ遊ばされたのであります。

親王が御父天皇の崩御におあひになつたのは御年僅かに十歳ばかり、御母靈照院尼の薨去の時は漸く二十歳を越えさせられた頃で、その上御大業はやつとお始めになつたばかりの所でしたので、御兩親をお慕ひ遊ばす御有樣は、誠に畏い極みでありました。古麓城の北の方大平山の中腹で洞泉谷によつた所に、父天皇の御形見の御小袖を埋め、五輪塔を二つ建てゝ御父君母君の御陵墓をお築きになりました。

それから御陵墓の南にならべてお寺を建て、名も顯孝寺とつけて御陵を守らせ、又御佛壇には親王御手づから御兩親の御靈牌を作つて安置し、朝夕御供養をおさせになりま

御供養

今御靈牌は御鑒殿に奉安す

した。親王は高田の御所や古麓城・妙見中宮などにお住ゐの節は、この御陵やお寺に參拜して香花をお供へになり、親しく御孝心をおのべになりました。

顯孝寺跡

御小袖塚

顯孝寺は親王薨去の後は名和氏が香花を供へてゐましたが、相良氏が八代莊を領してからは、悉地院といふお寺になりました。その後文祿年中悉地院の僧が御位牌を守つて神宮寺に移りましたが、御移陵は神宮寺から怠らず香花を供へました。明治維新の時神宮寺は廢せられ、御靈牌は醫王寺に移し、大正十一年から悟眞寺の御靈殿に奉安してあります。

顯孝寺の跡は今は蜜柑畑となつてゐて、住持の古い墓ばかりたくさん殘つてゐます。御移陵は今お小袖塚と呼び、三間半四方に石の玉垣を結ひ、中央に五輪塔二つ、その前に廣い平石をすゑ、玉垣の四隅には一つづゝの五輪塔があり、老樹一むら繁つて神嚴の氣がみちてゐます。熊本縣指定の「史蹟」であります。

第十五　寶篋印塔

御母君に對する御孝心

懷良親王が御孝心深くあらせられたことは、前に度々のべましたが、此所には御母君に對する御孝心の御一端を述べませう。

御母君と御生別

懷良親王の御母君は、中納言藤原爲道の女で、後醍醐天皇の中宮におなりになり、後に三位局と申上げました。御母君は親王がまだ十歳にも滿じ給はぬ御幼少の頃に、御兩親の御膝下をはなれ、僅か十二人の從者と海山數百里をはなれた西海の新秩序建設のため御出發になつたのですから、お別れの時には御母君はきつと幼い親王の御姿が見えなくなるまで、いつまでも〳〵御見送りになつてゐてお別れをお惜しみ遊ばされたことでせうが、そのお心の中を拜察しますと、何とも言へぬ悲しい氣持に打たれます。

親王の御艱難と御母君の讀經三昧

お別れの三年後には後醍醐天皇崩御あらせられ、中央では正成・長年・顯家・義貞などが次々に壯烈な戰死をとげ、肥後では菊池武重が世を去りました。

こんな悲運の時に親王はまだ瀨戸内海の忽那島といふ小さい島に止つて、九州におはいりになる御準備中でしたが、その年の末には九州に向つてお進みになつたやうです。それから九年目に親王はめでたく肥後に御着きになつて菊池城におはいりになりましたが、その間に都をお立ちになつてから實に十二年の長い歳月が過ぎ、親王はもう御年二十歳をお越えになりました。

御母君はこの長い間を京都におはして、朝夕お經をおよみになつて、親王が無事御成長になつてりつぱに御重責をお果しになることが出來るやうそればかり神佛にお祈りになつてゐました。

靈照院禪定尼

肥後では若い菊池武光が親王をお迎へ申上げましたので、九州の宮方は急に元氣づき、これか

御慰歎

親王不撓の御精神

ら親王を奉じてそのお指圖のまゝに賊を討つて九州を一統しようと、今やつと勢がついて來たのでしたのに、菊池におはいりになつてまだ三年目、正平六年三月二十九日御母君もまた薨去遊ばされたのでありました。御法號を靈照院禪定尼と申上げます。

御母君は、天皇崩御の後はたゞ九州の親王の御事をのみ念じていらせられたのに、親王もまた宵々の御夢に御母君の御姿を御覽じて、親しく御膝下に御物語遊ばす日を樂しみにしていらせられたのでせうに、御母君のお心殘りの程も、親王御悲歎の程も、拜察するだに畏い極みであります。

親王は其の後九州を一統して御目的お果しになりましたが、不幸にも東上軍が失敗してからは都へお上りになるお志も斷つて、ひたすら九州が安らかに治まるやうにみ心をおくだきになりました。

御孝心の數々と寶篋印塔

御年五十近くになりになつた頃、征西將軍の職を若宮良成親王にお讓りになり、それから數年の後には八代の高田御所にゐて、後征西將軍宮をおたすけになりました。

親王が御母君に御孝心をおのべになつたことは、御移陵・御靈牌・顯孝寺など數々傳へられてゐますが、天授四年には御母君の二十八回御忌に、梵網經といふお經を寫して肥前の東妙寺に奉納して御供養あらせられました。其の後八代の高田御所にお移りになつてゐましたが、弘和元年には御母君三十回御年忌にあたらせられますので、妙見中宮護神寺にお詣りになり、こゝにこもつて御親筆の寶篋印塔を中宮社の境内に立てゝ、御供養あらせられました。

御墓の境域に移し立てらる

さてそれから五百年もたつうちに、護神寺はすたれ、中宮社は明治維新の際八代神社に併せて址だけわづかに殘り、廣い境内は大方民有地となつてしまひましたので、この供養塔は其の後どんなになつてゐたかわからず、人々はおそれおほいことに思つてゐました。

ところが大正五年この民有地に泉水を堀りましたら、思ひがけなくも此の經塔を堀出しましたので、皆大喜びでした。

地の中に長く埋れてゐましたので、かへつて壞れることも少く、親王御親筆の御文字もはつきりと讀めて尊いかぎりでありました。大正八年八月宮内省から修理を加へ親王御墓の境内に移し立てられ、その後長く參拜の人に袖をしぼらせてゐます。

臺石彫刻の御願文

臺石の正面に三十五字を彫刻し、

天授第七辛酉歳、爲二靈照院禪定尼一、出二離生死一佛果圓滿也、乃至法界有情蒙二平等利益一矣。

背面には十一字を刻し、

願主　天心叟　雕巧禪秀比丘

とあります。天心叟とは親王御隱退後の御匿名ではないかと考へられてゐます。

第十六　名和氏の古麓城

一郎「お父さん、向ふの蜜柑山は面白い形をしてゐますね。」

父　「どうして。」

「よく見てゐると、どれもすり鉢をふせたやうな形に見えますよ。」

「一郎、それはよく氣がついたものだ。あそこは昔のお城のあとだよ。」

「お城のあとですか。でも石垣のやうなものがちつともないではありませんか。」

「さうだ。お城に石垣をつかつたのは三百六七十年ばかり前からのことで、あれはまだそんなものをあまりつかはなかつた頃のお城だよ。」

「僕はこの村にそんな古いお城があるとはちつとも知りませんでした。お父さん、すると何年ぐらゐ前に出來たのでせうか。」

「さうだね。六百五年も前からあつたことはわかつてゐるが、その前はどんなであつたかわからない。」

「お父さん、どうかそのお城のお話をして下さい。僕、もうおさらひがすんでひまですから。」

「さうか、お父さんもお仕事がすんだところだ。それでは、古麓城のお話をして上げよう。」

蕉琶谷
飯盛城
八丁城
大手門
丸山城、鞍掛城、勝尾城

「僕、うれしい。」

「麓のとんねるの手前に琶蕉谷（はせうだに）といふ谷がある。大きな杉がならんで見えるだらう。あの谷の兩側に平な所がいくつも見えるぬ。その上の方にすり鉢をふせたやうなところがあるだらう。あそこが飯盛城（いひもりじやう）といつて、今から六百五年も昔に、名和といふ殿様の家來の内河（うちかは）といふ人がゐたお城だよ。」

飯盛城址　　名和氏古麓城の本城

「名和といふのは、學校で聞いた名和長年のことですか。」

「長年といふ忠義な人の長男だよ。一郎ごらん、飯盛城の上の方のとがつた峯が飯盛山。その向ふの一番高い山が八丁城、それから蜜柑山の間の谷の出口の、今鐵道のとほつてゐるところが、大手門といふ本門のあとだよ。」

「面白いなあ。お父さん、すると名和といふ殿様のお城はそれだけですか。」

「まだある。お稲荷（いなりさま）様の後が丸山城。その後の低いところに鞍掛城。砥崎（とさき）の觀音様の上の方が勝尾（かちをじやう）城。五つあつたわけだね。」

城下町

ふなつき場

二百五十年ばかり

名和氏古蹟城大手

「お父さん、すると大將のゐたお城はどこですか。」

「さあ、それはむづかしいことだが、たぶん飯盛城らしいね。」

「お父さん、あんな高い所でそしてせまさうな所に、たくさん武士がゐたのでせうが、さぞ不便だつたでせうね。」

「うん、そこでふだんは大切な人だけが城の中にゐて、家族や家來達は下の方の城下町に住んでゐたのだよ。山鹿町とか御内とかいつて、町の名が今も殘つてゐる。そして山鹿町の川ばたはりつぱなふなつき場で、大へんにぎやかな所だつた。」

「古い話ですね。するとあのお城には名和の殿樣がずつとゐたのでせうか。」

「うん名和の殿樣は忠義な人で、五十八年の間あのお城にゐて征西將軍宮樣を心からおたすけ申上げたが、その後も百五十年ばかりあそこにゐたのだ。そのうちに相良といふ強い殿樣が出て來て、名和の殿樣は宇土の方へうつつたのだ。」

「あ、そこで相良の殿樣のお墓があるのですね。」

「さうだ、相良の殿樣のお城は、そのうちに登つて見ることにしよう。」

第十七　宮方最後の地八代莊

詫磨原の勝いくさ

天授元年賊將今川貞世は水島原の戰に大敗してからは、肥後南郡の宮方をうつて菊池の死命を制しようと、天授四年九月、九州・中國の賊軍を率ゐて肥後に入り、自ら隈本の藤崎臺に陣を取つたのを、僅か十六歲の菊池武朝が、老臣葉室親善等と共に、御年十八・九歲にならせられた良成親王を奉じ、僅か手兵千五百餘騎を率ゐて詫磨原に襲擊し、一戰に賊軍を潰走させたのは、かの大保原の戰にも比すべき餘りにも有名な戰でありましたが、これは九州官軍掉尾の花であつたのです。

賊將今川貞世八代莊を南北よりはさみうたうとす

弘和元年六月菊池城が陷つてからは、武朝は本城を失つてたけにひそんでゐましたが、肥後の宮方としては、西に川尻・宇土の兩氏・南に名和顯興・阿蘇惟政があつて、ちつとも賊を恐れませんでした。しかし其の後賊將今川貞世と仲秋は、熊本の北立田山の陣にゐて、どうしても八代莊を攻取つて肥後の南郡を平定しなければならないと、しきりにその計畫を練つてゐましたが、

木原山以北賊の手におつ

それには島津氏を味方につけて、八代を北と南からはさみうちにするのが一番よいと、日向・大隅・薩摩には別に大將をさし向けました。

一方貞世はどん〳〵と南郡の宮方の城を攻めとり、弘和三年九月には飯田山に陣を移し、元中元年には吉野山にうつりました。この間に東は津森・木山から、西は松尾・川尻、南は隈牟田まで、宇土の木原山から北の方の地は大てい賊軍の手に落ちてしまひ、その勢は風が木の葉を巻くやうでありました。

懐良親王薨去

懐良親王が薨去遊ばされたのは、この悲風しきりにすさぶ弘和三年三月二十七日のことでありました。あの父帝後醍醐天皇が京都の空を望みつゝ吉野の行在所に神去りましたことと思ひあはせて、恐懼おく所を知らない次第であります。

名和顯興八代莊の守りを嚴重にす

古麓城の名和顯興は八代の城々の守りを嚴重にさせてゐましたが、「もう親王をお迎へ申上げる所は八代莊ばかりである。」と奮ひ立ち、全軍に木原山から南の八代平野の守りを嚴重にさせました。

南肥後の宮方强化す

ちやうど其の頃、球磨の相良前頼が宮方について來ましたので、顯興は力を得、すぐ前頼と心をあはせ、島津氏を宮方につけるやうにつとめました。そのところへ大隅の彌寢清平もはるかに歸順して來ましたし、阿蘇惟政も忠功を賞せられましたので、南肥後には强い宮方が出來て、その喜びは一通りではありません。

貞世八代莊を南から攻めて失敗す

こんな有樣ですから、貞世は早く島津氏を味方につけなければと、大將を葦北の二見にやつて、相良氏と島津氏の連絡をたち切りました。前頼はこれを知つて、急に兵を出して島津氏と力を合せ、元中二年正月二見を攻めて賊の大將を佐敷へ追ひやりますと、水俣・出水の宮方が起つて南の方からこれを攻めましたので、賊の大將はとう〳〵天草へ逃げました。

八代の名和氏を中心に宮軍勢をもりかへす

このやうにして顯興は、球磨の相良葦北の宮方と心をあはせて八代の後をかためると同時に、薩摩・大隅とも連絡をとりましたので、八代莊の名和氏を中心に、親王の軍も又もとの勢にかへるやうな有樣が見えて來ました。

武朝親王を奉じて宇土城にうつる

この樣子を察し、菊池武朝は元中の初め、ひそかに親王を奉じてたけから宇土城にうつりましたので、顯興は一層八代莊をかためて、親王をお守り申上げました。

貞世――貞臣（了俊）（義範）
仲秋

南肥後官軍の活動

貞世は吉野山の陣にゐて、親王の御在所を襲ひ奉らうと思つてゐましたが、相良前頼が球磨から打つて出て、益城から隈本の西へかけて賊を打破り、その活動がめざましく、又先に葦北の敗

戰もあり、それに川尻・宇土兩氏は北の方から親王をおたすけ申上げてゐますので、なか〳〵そのことが出來ません。

貞世北九州へ去る

親王はこの勢を御覽になつて、武朝と復興の兵をあげようとなさいますせれども、貞世が吉野山にゐて見張つてゐますので、すぐには出來ません。貞世は川尻と赤山の二つの城を攻めることがむづかしいので、しばらく北九州の方へかへりました。

親王武朝と復興のことをはかり給ふ

この間武朝は親王のおさしづにより、北は川尻・宇土兩氏の力をかり、南は阿蘇・名和の兩氏と結び、遙かに筑後の五條氏に通じて再興のことを進めてゐたのですが、この後相良氏と島津氏は、宮方でありながら、助けにも行かず、賊にもつかず、たゞ一身一家のことばかり考へて、一死もつて盡忠報國の誠を致さなかつたのは殘念なことでありました。

宇土城陷り武朝親王を奉じ八代にうつる

今川貞世は元中六年には又隈本の藤崎臺に陣をとりましたので、顯興とその一族の責任はいよ〳〵重くなりました。貞世の子貞臣は父の命に從ひ、肥後の宮方を討ちしたがへようと、次第に南郡の城を攻取つてゐましたが、とう〳〵宮方の本據をつかうと、元中七年九月、深堀等の諸將を率ゐ、川尻・宇土の二城を攻めおとしました。武朝は今は北の方にはどこにも身を置くところなく、良成親王を奉じて、宮方一同名和氏の古麓城さしてのがれますと、賊軍はこれを追ふて、潮の押しよせるやうに八代莊に攻めこみました。

親王高田御所に入御

親王武朝に悟眞寺を建てさせ孝行を敎へ給ふ

良成親王は高田御所におはいりになり、武朝・顯興は親王を奉じて一心に復興をはかりました。

親王には、八代は前大宮懷良親王が御晩年を過させ給ふた御ゆかりの地であります。薨去後八年なほ御在世の頃のまゝの御所に御起居遊ばされ、まだ土の香も新しい御墓に詣で、御孝心ゆかしい顯孝寺に御移陵を拜し、中宮社に寶篋印塔ををがみ、かく御孝心の數々をみそなはしては前大宮御追慕のあまり、戰陣の際にもかゝはらず、武朝に命じて御墓の前に七堂伽藍を建立させて悟眞寺と名づけ、長く懷良親王をまつらせになり、人々に孝行をお敎へになりました。

古麓の籠城戰

貞臣は翌八年三月、更に新手の大軍を引きつれ、大川・篠尾・岡など、八代の斷層崖による城を次々に打破り、四月二十二日には鳥越城を死守した蜂須賀親義に重傷を負はせ、大軍は古麓城一つを取りまきました。こゝに宮方最後の籠城戰は開かれました。

古麓城は斷層崖の切りたつた山の上にある山城群で、たくさんの深い谷がとりまいてをり、球

顯興の孤軍奮闘

杭瀬・宮地原の戰

古麓城の落城

磨川の大きな流れもあり、城兵がよく防ぎましたので、容易に攻め落すことが出來ません。

けれども今は球磨の相良前頼の援軍も來ず、全く顯興の孤軍奮闘でありましたので、數箇月の籠城に糧食も盡き、勇士も次々に討死して、城の中はだん〴〵と力を落して來ました。

賊軍は六月六日には杭瀬にある顯興の館に攻めこみ、これを撃退しようと打つて出た城兵は、賊軍と宮地原で激しい戰をしましたが、勝つことが出來ず城内に退きました。

これから丸山・鞍掛から本城の飯盛などの城が次々に陷り、城兵は詰の城である八丁城に立籠りましたが、七月三日この城も陷り、古麓城は全山賊軍の手に落ちてしまひました。賊軍は更に葦北荘に入り、名和氏の一族の據る久多良木城以下に軍を進めましたので、八代荘は殆ど賊軍の馬蹄にふみにじられてしまつたのであります。

良成親王は仕方なく一時媾和を許し給ひ、多年終始一貫苦節を守り宮方最後の據點を守りつゞけた顯興も今川軍と和し、武朝以下所在がわかりません。九月貞臣は諸城を平定し、軍を引いて隈本にかへりました。

かたい宮方をもつて滿たされた肥後一國はこゝに全く賊軍の手に落ち、宮方の勢は日一日とちゞまりました。そして翌年南北合一の御事があり、五十七年の間御身をもつて日本精神を御實行遊ばし、九州武士に皇國の道を御教へ遊ばされ、萬丈の光焰をお上げになつた兩征西將軍宮も、

悲壯の極み

最後の光榮をになつた古麓城

おたすけ申上げた菊池氏以下の宮方も、皆其の最後を八代荘古麓城の落城とともに閉ぢられたのでありまして、誠に悲壯の極みでありました。

しかし傾いた勢をこゝまで支へることが出來たのは、全く名和顯興の精忠と、其のおたすけ申上げる仕方がよかつたからでありまして、八代荘は實に宮方最後の地であり、古麓城はこの最後の光榮をになつた城でありました。

南北一に歸してから、八代におはした良成親王は筑後矢部山中の五條氏のもとに移り給ひ、武朝は菊池の本城に歸り、顯興は古麓城にゐて八代荘を領することゝなりました。

名和氏は吉野の朝廷五十七年間粉骨碎身皇運を扶翼し奉りましたが、此の後約百年の長い間、更に民政に力を盡くして八代文化の發展に貢獻しました。

第十八　悟　眞　寺

良成親王八代荘に移り給ふ

名和氏の最後の御奉公

元中七年九月に宇土城が賊の手に落ちたとき、武朝は今は北の方いづこにも身を置く所がありませんので、良成親王を奉じて、宮方の最後の據點である名和氏の八代荘に移りました。

名和氏は吉野の朝廷の始から、八代荘にゐてまつ先に宮方の大將として働き、その後も五十餘

年の長い間天皇の御爲に奔走してかはることなく、つひにこの輝かしい根據をきづき上げたのでありまして、顯興は今は最後の御奉公をと、武朝と一しよに宮方の勢をもりかへし、親王の御心を安んじ奉るやうにと心をくだきました。

良成親王の御感

八代の地は、懷良親王薨去遊ばされてから、僅かに七年を經たばかりでありますから、良成親王は、懷良親王が御晩年を過させ給ふた御ゆかりの深い高田御所にあけくれをお過しになり、又古麓城や妙見中宮・妙見下宮などに玉歩を運ばせ給ひ、前大宮御起居の御模樣から、御墓・御移稜・顯孝寺・御靈牌・寶篋印塔等、御あともしるくみそなはし、御感ひとしほ深くあらせられたことでありませう。

悟眞寺御建立

この年武朝に命じて、御墓の境域に七堂伽藍を建てさせ、親王の菩提をお弔ひになりました。御墓は妙見中宮護神寺の境内にお築きになりましたが、今またこのお墓の前に御菩提寺をお建てになつたわけで、懷良親王の御法號を悟眞大禪定門と唱へ奉ります故、お寺の名も悟眞寺と申します。

悟眞寺の興隆

後になつて妙見中宮の護神寺はすたれましたが、この悟眞寺は菊池・名和・相良三氏がつゞいて尊崇しましたため、ます〳〵榮え、末寺も多く持ち、肥後では指折りの大寺でありました。かの秀吉の島津征伐の時、この寺に數日本陣を置いたと申しますが、もつともなことであります。

史蹟輪藏礎石

この歴史的な古刹を、小西氏の時代に燒いたことは、誠に遺憾でありました。古の七堂伽藍中經藏の輪藏礎石だけが、今も御墓の前に殘つて、昔を語つてゐます。熊本縣指定の史蹟であります。

加藤氏の再興

加藤清正の領となつてから、特に役人を派遣して工事を監督させ、本堂・庫裡・山門を復興しました。そして其の場所も御墓の前では畏れ多いといふので、中腹の今の境内へ移し、細川・松井兩氏の尊崇を經て今日に及んでゐます。熊本縣指定の史蹟であります。

史蹟悟眞寺

御靈殿建立

近年この地方有識の奉賽により、この靈域に莊嚴を加へましたが、これより先、親王にゆかりのある人々が相議して、大正十一年六月悟眞寺の境内に御靈殿を建立し、親王御作の後醍醐天皇・御生母の御靈牌、懷良親王御靈牌・御木像、御寶物、それから當時御側に仕へた人々の位牌を安置し、朝夕御供養を怠らず申上げ、清淨の靈場となりました。

御靈殿　悟眞寺境内

御遺德顯彰會の記念事業

本年紀元二千六百年を記念し奉り、宮

地村並に八代郡は征西將軍宮御遺德顯彰會を組織し、廣く一般の淨財を得て、御墓周圍の舊七堂伽藍跡の淨化を計畫せられ、其の第一期事業として、八月から八代郡及び八代市內學校其の他各種團體の勤勞奉仕作業を開始して神慮を慰め奉り、更につゞいて寶物館・修錬道場等の建設を行つて、神威をます〳〵顯彰し奉り、國民盡忠の魂を養ふ聖域としようと、着手してゐます。

第十九　名和氏の勤皇

名和義高八代莊地頭職となる

名和氏が始めて八代へ來ましたのは、今から六百餘年前、建武の中興の大業が成就し、めでたく天皇親政の世にかへつたとき、功臣名和義高を八代莊の地頭職に任ぜられ、義高は家臣內河義眞を代官として八代莊へつかはし、古麓城を築き守らせたことに始るのであります。これから八代は、古麓城を中心に、名和氏文化の時代となりました。

宮方最後の據點を確保した功

名和氏は吉野の朝廷五十七年の間宇土以南の八代平野を確保し、更に葦北莊の兵權を握つて、薩摩の島津氏をおさへ、球磨の相良氏に備へ、宮方最後の據點として終始勤皇の爲に盡くしました。中でも顯興は正平十三年以來三十五年の間、前後兩征西將軍宮をたすけまゐらせ、大保原の戰を始め戰功多く、特に前征西將軍宮が御晩年を八代に過させ給ひ、後征西將軍宮が南風つひに

競はず北郡に身を置き給ふ所なく、吉野朝最後の三年を八代に過させ給ふた如く、最後の據點を確保した功績は誠に偉大でありました。

勤皇地の考察

これは名和氏一門がかたく結束して、飽くまで逆賊を討ち滅さうといふ純忠の魂が八代莊の人々の忠肝に徹し、終始一貫盡忠報國の意氣に燃えてゐたことゝ、八代の地の有難き要害とによるものであります。

寶庫

先づ平野は、斷層崖の下に幅約一粁乃至三粁、長さ二十五粁の平坦な沖積平地で、宇土までは實に一望の下にあり、その間に球磨川をはじめ大小多くの川が橫斷して、水利の便があり、五穀がよくみのり、不知火の海波が城の近くまで打ちよせるため、山川海畑の食料に不足がありません。

要害

この寶庫をひかえて、平野の東を一直線にかぎる山の斜面に沿ふて、古麓城を主城として數箇の支城を配し、また八代莊の入口に守山關を備へるなど、用意をさ〳〵怠りなく、この形勢を見下してゐるために、賊軍がこの平野を南進することは全く困難であります。

又東は球磨川の斷崖に通ずる一米に足らぬ小徑を、相良の大軍が進むことは容易でなく、更に南は、高田・日奈久間は山脚を海波が洗つて全く軍勢の進寇をさまたげ、八代莊の入口に田河內關を設けて嚴重に薩摩の賊軍の侵入を防いでゐます。

しかも古麓城は實に雄大峻峻な山城群で、城下を大球磨川の急流がめぐり、南方の平山城との中間の平地に高田御所を抱いてゐるのであります。このやうな山川海の要害にかこまれた形勝の地に兩將軍の宮様の御遺蹟が數多く殘つてゐるのも、もつともであると感ぜられます。

勤皇の遺蹟に對する愛惜の情

我等は六百年の昔、この純忠名和氏や、これにしたがつて皇事に奔走した人々の子孫でありまして、懐良親王の御墓・八代宮の尊崇は勿論、盡忠報國の遺蹟は、一木一石に至るまで愛惜(あいせき)の情一しほ深いものがあります。

第二十　にべ神社

れふし又三郎

昔うやなぎ村に、又三郎といふれふしが住んでゐました。毎日海にさかなを取りに行つては、それをにぎやかな宮地のまちへ賣りに行つて、くらしてゐました。

大きなさかな

ある日、又三郎は、いつものとほり沖へ出てれふをしてゐました。大きなあみをざぶんと海に入れて、大急ぎで上げようとしますと、重くてなか〳〵上りません。

「えいや、えいや。」

とかけ聲をかけて、やつとあみを引上げました。すると、今まで見たことも聞いたこともない大きなさかなが、あみの中でばた〳〵とあばれてゐます。又三郎は、

「だれかきてくれ、だれかきてくれ。」

とさけびました。あたりでれふをしてゐた人々が、大急ぎで集つて來ました。れふしたちは、

「大れふ、大れふ。」

といひながら、もとのはまべへかへりました。

ふしぎなゆめ

その晩又三郎は、ふしぎなゆめを見ました。

「わしは、みやうけんの神だ。」

と申すものがあります。見ると、まつ白なひげの生えたおぢいさんです。又三郎は、思はずしせいをりつばにしました。おぢいさんはつゞけて、

「お前がとつた大きなさかなは、ふしぎなさかなだ。とのさまに上げよ。」

といつたかと思ふと、すがたは消えてしまひました。

腹の中に巻物

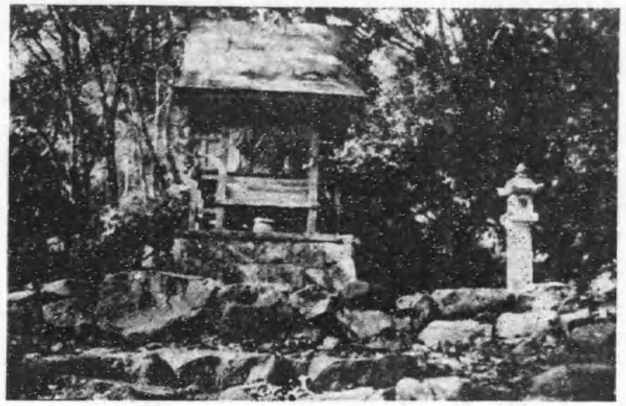
又三郎は、さつそくそのさかなを、古麓城の名和顯忠(なわあきただ)といふとの様にあげました。との様も、

「何といふ大きなさかなだ。珍らしいものだ。」

とおつしやつて、けらいにお切らせになりました。ところがおどろいたことに、そのさかなの腹の中から出て來たのは、りつばなきれに包まれた巻物でした。けらいたちは、「ふしぎなことだ。」

との様の目には涙が

みやうけん様へ長い行列



にべ神社　にべ谷

といつて、その巻物を、との様にさし上げました。

との様は、さら〳〵と、その巻物をあけてごらんになりましたが、急にうれしさうな顔をされて、

「あゝ、これは、私が五年まへ都へ上るとちゆう、海の上で大風大雨にあひ、海の中になくした名和家で一番大切な巻物だ。」

との様は、あまりうれしいので、なんどもおしいただきになりました。そして目には、なみだが一ぱいたまつてゐました。

との様は、また、

「ごせんぞの顯興様は、名和家の人だけあつて、大そう忠義なお方だつた。今から百年ほどまへ、天皇のおほせに伯耆國から、この宮地にいらつしやつた。さうして懷良親王をおまもりになり、よく年大保原の戰には、五千人あまりで右の方からぞくをせめて、大手がらをお立てになつたので、親王は大そうおほめになつた。

したがはぬわる者をせいばつに、遠い

にべ神社を立てゝ

ごはうび

お宮は今

顯興様は、それから四十年の長い間、親王をおまもりして、忠義をおつくしになつたのだ。私たちも、りつぱに八代をおさめて、ごせんぞの名をあげねばならぬ。

それにしても、ごせんぞのことを書いた大せつなあの巻物が見つかるやうにと、毎日みやうけん様にお祈り申してゐたのだ。それが、私が城にかへつてから七日目に、さかなの腹の中から出て來やうとは思はなかつた。やはりみやうけん様がおまもり下さつたのだ。何とありがたいことだ。さつそくおれいにまゐらう。」

とおつしやつて、長いぎやうれつをつくつて、みやうけん様におまゐりになりました。

この話をきいたとの様のお國の人々は、小川・日奈久、遠い所は宇土・水俣のあたりからも、みやうけん様におれいまゐりをしました。

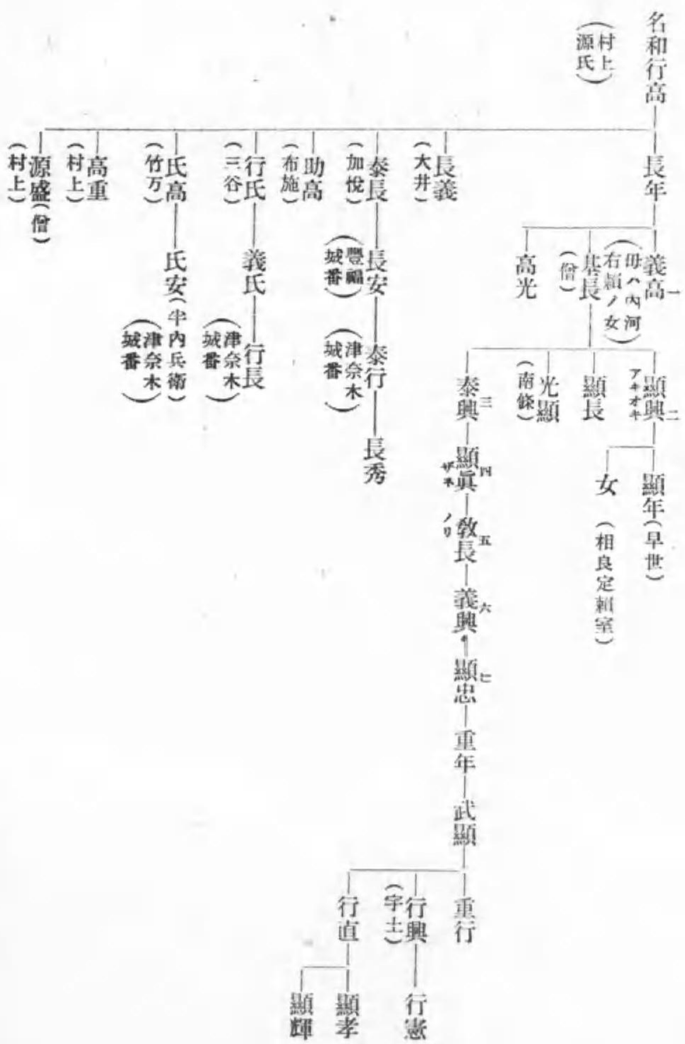
との様は、

「さかなは、神様のありがたいお使ひだから。」

とおつしやつて、お城の中に「にべ神社」を立てゝ、朝ゆふおをがみになりました。さうして又三郎には、たくさんのごはうびを下さいました。

お宮は今、古麓のみかん山の入口のこんもりとしげつた林の中にあります。

第二十一　名和氏の治績



名和義高、内河義眞をつかはして八代莊の經營をさす

今から六百餘年前、建武元年に、楠木・新田・名和・菊池等勤皇の諸將の盡忠により、後醍醐天皇の御志はめでたく達せられ、源頼朝以來の武家政治は倒れて建武の中興の大業が成就し、輝かしくも天皇御政の世となりました。そしてこの天業恢弘の御事業を翼賛し奉つた功臣は、それ〴〵恩賞を蒙つたのでありますが、この時八代莊には、名和長年の長男義高が地頭職に任ぜられましたので、義高は翌二年母の實家である家臣の内河義眞をつかはして、八代莊の經營をさせ、自分は京都にゐて、父の長年とともに天皇の御ために働きました。

足利尊氏叛き天下勤皇の將士奮起す

ところが建武二年足利尊氏が鎌倉にそむき、大義にくらい武家が多數その旗下にはせ集つたため、改新の御政治はたちまちやぶれ、世は再び爭亂の巷となり、翌延元元年には正成・長年は戰死し、天皇は吉野に行幸あらせられ、これから五十七年の間、天下勤皇の將士は諸國に奮起し、父が死すれば子がつぎ、子が死すれば弟が立ち、七生報國の大精神をもつて、一身一家を君國に捧げ奉り、日本精神の精華を發揮しました。

名和義高兄弟の悲境と八代莊名和氏の勤皇

名和義高の兄弟は、末の弟高光は、延元元年十一月京都西坂本で二十二歳で戰死し、義高は延元三年五月二十五日北畠顯家の軍に從ひ、高師直と戰つて、三十七歳で和泉國堺浦に戰死し、中の弟基長は三十歳で出家して高野山に入るといふ悲境に立ちましたが、八代莊に於ける名和氏は義眞・顯興と二代相つぎ、この五十七年の間全く古麓城を本據として勤皇のために終始し、した

がつて八代莊の經營は、そのすべてを宮方の據點として最後まで守りつゞけることに集中し、他事があります。

一、古麓城の築城

名和氏が、勤皇のために八代莊の經營に努力したことについて、次の四つの點に分けて見ませう。先づ八代莊經營の第一は、實に古麓城の築城にありました。

元來八代莊は、高くてけはしい斷層崖が一直線に南北に走り、これから東はけはしい山地、西は幅二・三粁の豐饒な沖積平地から出來てゐるのですが、平野のまん中を流れてゐる球磨川に沿ふてのぼる球磨路と、山地がちの海岸傳ひに通ずる薩摩路との分れ目にあたり、北へ行けば菊池へ通ずるといふ、軍事上・交通上誠に大切な所であります。

古麓城は實にこの三つの道の分れ目で、球磨川の大きな流を南にめぐらす斷層崖上高く築造されました。

先づ本城を球磨川ばたに聳え立つ飯盛山に定め、飯盛支峰の下の芭蕉谷をはさんだ峰を數段に削平して、本丸・二の丸・三の丸等の城郭を築きました。次に飯盛城と城の北側の大きな「にべ谷」をはさんで聳え立つ丸山城を對の城、丸山城から鷹峰につゞく鞍掛城を築いて繋の城とし、にべ谷の奥の八丁山を詰の城とし、鞍掛城から峰傳ひに中宮谷へ行き着く所に出城の勝尾城を築いて傳への城としました。

八丁城は非常に高い所ですから、ふだんは見張りをしたり、のろしを上げたりする所にし、勝尾城は搦手で北側の見張所でした。

そこで中央の大きな谷には、大將たちの住居や武器倉など大切な建物を集め、谷の入口に嚴重な大手門を設け、その前面に數條の水濠をめぐらし、濠には大手橋をかけて城内との交通を嚴重にしました。

城兵の住家は、大手門の内やそとがはの山鹿町一たいにあつて、にぎやかな城下町が出來ました。顯興の館は、芭蕉谷の入口に近い杭瀬にありました。

古麓城はこのやうに、斷層崖の深い谷々に取りかこまれて聳え立つ山城群で、各の城からは八代莊の平野や海の形勢が一目に見えるといふ、要害と形勝とを兼備へた名城であります。たゞ今古麓城址は熊本縣指定の「史蹟」であります。

二、八代莊全體の防備

第二は、この古麓城を中心に八代莊全體の防備をかためたことでありました。斷層崖には此の後次々に平山城・鳥越城・興善寺城・岡城・種山城・小川城・豐福城を配置し、八代莊の北の入口に守山關、南に田河内關を設けて之をふさぎ、球磨との交通路は、古麓城で球磨川の大溪谷の

入口をおさへてをりますし、西の一たいは海でかこまれてをりますので、八代莊の防備はすつかり出來ました。

三、治水殖産

斷層崖の下の平野は、幅約二粁乃至三粁、長さ二十五粁の平坦な沖積平地で、古麓城から眺めると、宇土まではだゞ一目に見渡され、その間に球磨川を始め大小の川が、平地を横切つて海に注いでゐます。

そこで大手前の水濠には、杭瀬から球磨川の水をみちびき、それを宮地原の方へ引いて田畑に灌漑し、其の他のたくさんの大川・小川の水も田畑に利用して、五穀の增産をはかりました。そこで農産物は豊かになるし、川や海からは魚介がたくさんとれるし、山の産物もあるし、この豊かな食料は、城兵の兵糧として十分でありました。

かうして八代莊が寶庫となりましたので、果して百年後には、球磨の相良氏が八代莊を手に入れようと、しきりに古麓城を攻めました。

名和氏が八代平野の水利の便をはかつて殖産につとめ、八代莊を寶庫にしたことは、第三に擧げねばならぬことであります。

四、交通

第四には、交通の便をはかつたことであります。

陸路は、山鹿町から東へ球摩路、南へ薩摩路が分れ、北の方へは菊池路が通じてゐます。菊池路はもと、斷層崖下を豊福から南竹崎・小野邊田・守山をへて小川に至り、小川から鞍楠を通り大野に入り、阿彌陀峰を越えて川上村に下り、種山・猫谷を經て宮地に通じてゐましたが、斷層崖に城が配置されてから、山の麓にも新しい道が出來ました。そして北と南に關を置いて、この道を防備しました。

次に水路は、山鹿町の球磨川岸の船つき場を起點として、球磨川の水路は數里上流までさかのぼることが出來、又三粁程川口に下つて八代海に出ると、遠く葦北・薩摩の宮方や、益城・宇土の宮方と通じ、海をへだてゝ天草との交通も容易で、全く便利な所でありました。しかもこの水路は、また非常な要害となつて八代莊を防備しました。

五、勤皇

名和氏はこんな天險に據り寶庫を抱いて、吉野の朝廷五十七年間終始一貫朝廷の御ために奮鬪しました。八代莊の人々もこの一門を主と仰ぎ、堅忍持久あくまで奉公の義戰をつゞけました。そして征西將軍宮は御晩年を八代莊に過させられ、後征西將軍宮も吉野の朝廷最後の三年間を八代莊に據り給ひ、全肥後の忠臣義士は、古麓城の籠城戰をもつて皆純忠の花と散つたのであります

す。

この長い間、名和氏は中院義定を古麓城に迎へ、北は菊池氏・惠良氏、東は相良經頼と手をとり、遠く南方肝付氏と連絡して宮の肥後御入國に力を盡くし、葦北莊の兵權を收め、球磨に兵を出し、大保原の戰に參加して奮戰するなど、その功績は誠に大きくありました。そして南風競はず九州が大方賊になつた頃にもその節をまげず、菊池武朝を助け、川尻氏・宇土氏・阿蘇惟政・相良前頼等と心を合せ、大隅の彌寢氏とも連絡して、最後まで奮戰力闘したのでありまして、この賊を討ち亡ぼさねばやまぬ舉國一致盡忠報國の魂は、其の後も八代の人々の血潮の中に脈々と流れました。そしてこれらの幾多勤皇の遺蹟は、今もなほ大切に保存されて、人々の崇敬の的となり、鄕土精神の上にりつぱに生きてゐるのであります。

内河義眞は代官として二十三年、つゞいて名和顯興以來泰興・顯眞・教長・義興・顯忠と六代百二十九年、代々古麓城主として八代莊を領し、この地の開發發展に盡くしました。吉野の朝廷以後の名和氏の治績上重要なことは、

一、よい船つき場を持つて海上貿易に努力したこと。

名和氏は菊池・高瀬・詫磨・大橋等肥後沿岸諸氏と同樣、競ふて朝鮮・支那と交通貿易を行ひましたが、南北合一とともに、干戈を用ひる必要がなくなりましたので、餘力をもつて貿易を一

六代百二十餘年

海上貿易

層盛んに行ひ、同時に彼の地の文化を輸入しました。中でも教信（教長か）は、後花園天皇の長祿三年朝鮮に使節を派遣して、堂々と海外發展に努力してゐます。

二、妙見宮を尊崇し敬神崇祖の範を示したこと

など、いろ／＼ありますが、のち名和氏は相良氏に壓倒されて、木原から宇土に移り、次で小西行長が神社・寺院を悉くやいたため、古い記錄は殆ど散失せてしまひました。それに戰國以後名和氏が衰へて、現在殘つてゐる子孫の家にも古文書が多く傳はつてゐないのでありまして、これだけの長い純忠の事實を傳へながら、その活動の詳細を知ることが出來ないのは、實に遺憾であります。

敬神崇祖

名和氏の遺蹟

名和氏の遺蹟として殘つてゐるものには、別ににべ神社・稻荷神社などがあります。近年邊田の畑中に、伯耆塚といつて石を積上げた上に五輪塔の上部が殘つてゐたのを、小堂を建てゝ其の中に安置し、香花を供へてあるのはゆかしいことであります。城址や宮地の山中に、ゆかりの知れぬ古い五輪塔の一部が、半ば地に埋れて殘つてゐることがありますが、名和氏以來の歷史を語るものとして貴重な資料であります。

第二十二　新城のぼり

興亞奉公日

勝尾城

妙慶禪尼の墓

空堀

新城

本丸

今日は興亞奉公日で、その上日曜日なので、お父さんと相良氏の古麓城見學に行くことにしました。

先づ砥崎の觀音様の前から勝尾城のあとを通り、新しく開けた蜜柑山の上を新城へといそぎました。空には雲一つなくて、よい登山日でした。

加藤正方のお母さんのお墓を眼の下にをがんで、峰つゞきに登つて行くと、右も左も目の下は松や杉の深い谷です。三十分も登つたと思ふころ、深い空堀のあとがありました。お父さんが「少し行くともう一つこんな堀がある。すると新城だ。」

とおつしやいました。果して第二の空堀がありました。

「この空堀の上が新城だ。」

お父さんはかう言ひながら先に立つて松の大木の間の小道を登りはじめました。僕も後につゞきますと、間もなく頂上に出ました。

頂上ははゞ十間に長さ三十間位の平な所でした。松がたくさん生えてゐるのでながめがきゝませんが、八代平野が一目に見渡されるよい所です。

「こゝが本丸の址だ。この様や大將達のゐた所だ。この下にはゞ十間ぐらゐの平な所があつて、本丸をとりまいてゐるだらう。あそこが二の丸で、おもな家來達のゐた所だ。その下に三の丸

二の丸

三の丸

がある。二の丸まで下りて見よう。」

私達は急な坂を二の丸に下りました。下を見ると、松の大木の間に又一段平な所が見えます。

「お父さん、下りて見ませう。」

古麓城址遠望　熊本縣史蹟

「うん、さうしよう。石垣をつかつてゐないが、このがけがどのくらゐ切立つてゐるかわかつて面白い。」

僕はお父さんの後から下りはじめましたが、ずる／＼とすべつて、今にも山の下へころんで行きさうです。木の根や小枝にすがつて十間も下りたと思ふ頃、三の丸に出ました。こゝははゞが五間ぐらゐしかありませんでしたが、二の丸も三の丸も周りは百間ぐらゐで、上の本丸をとりまいてゐるのでした。

「こゝが城を守る武士たちがゐた所だ。この下は高いがけで、下の谷につゞいてゐる。」

「お父さん、こんな高い山の上でどうして敵をふせいだのでせう。」

鷹城址

勅使のお成り

相良の倉屋敷

「この平な所に、住む家もいくさ道具や食物を入れる家もあつた。それから入口に門を作り、周りにさくを作つた。この新城が相良氏の本城で、ふだんはこの後に高く突立つた鷹城から見張りをしてゐたのだ。ついでにあの城にのぼつてみよう。」

私達は新城を下りて、また左右に深い谷を見下しながら、十分ばかり南へ進むと、鷹城の下へ來ました。これから急な坂道を高さ三十間も登つて、鷹城の頂上につきました。

頂上は幅七間長さ五十間ほどの平な所で、本丸と二の丸の二段になつてゐます。

「今から四百年ほども昔に、勅使が都からお出でになつて、時の城主相良義滋と晴廣の父子に、高い官位をお授けになつた所は、この本丸の館だつた。」

こゝからは古麓の諸城と八代の平野が一目に見え、後の方には上宮・中宮から八丁城、南の方に飯盛城が見え、そのながめの大きさと美しさは、何とも言ひやうがありませんでした。

「相良氏の時にこの鷹城と新城を新しく築いたため、古麓城は名和氏の頃よりもずつと大きくなつたわけだ。」

こゝを下りてまたもと來た道に引きかへしますと、前の丸山城との間が鞍掛城、この城と丸山城・新城にかこまれた谷の底に、三十間に四十間の廣い平な所がありました。お父さんが、

「相良の倉屋敷といふのだよ。」

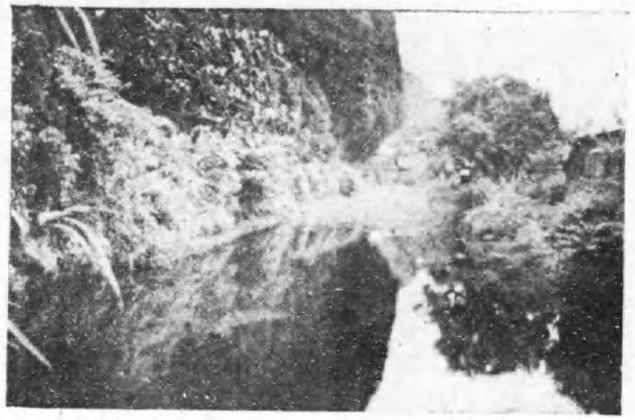
急ながけ

大手門

水濠のあと

とおつしやいました。

こゝから谷にそつて急な小道を下りました。右は新城の根で、五十度六十度の急ながけ、左は丸山城の根で、四十五度のがけであります。僕はこれではとても敵は上れまいと考へながら下りました。



古麓城水濠跡　　春光寺門前

だん〳〵下へ行きますと、せまい平な畠がいくつもあります。

「城の上はせまいから、こんな谷の平な所に人々が住んでゐたのだよ。」

こんなことを聞いてゐるうちに、春光寺へ出ました。このあたりは廣いので、きつと人家もたくさんあつたのでせう。

大手門もこゝらにあつたのでせう。

春光寺を出ると、用水池があります。

「これがお城の前を守る水濠の殘りだよ。こんな濠が幾重にも城の下を取りまいてゐたはずだが、後になつて大井手を堀つた時、大ていは埋められてしまつたのだらう。」

城下町

僕は山の下の廣い道を家へといそぎながら、話を聞きました。

「春光寺あたりの平な谷から、この道の向ふの山下・古屋敷・横町などの一たいは、相良氏のゐた鷹城・新城等の城下町で、古屋敷には昔の古い井戸の跡も殘つてゐるさうだよ。」

「今では大てい田畑になつてゐますね。」

「さうだ。名和氏の頃は山鹿町一たいが城下町であつたが、相良氏の時には城下町がこちらまでひろがつて來て、宮地の町も大そう大きくなつたわけさ。それに横町の近くの球磨川岸が、にぎやかな船着場になつた。」

船つき場

「どうして山の下の便利な所には城をつくらなかつたのでせう。」

山城

「それはその頃のいくさの仕方から、少しの兵で守りやすい山をえらんだのだ。それは正成の千早城でも赤坂城でもさうだよ。こんな高い山の上の城を山城といふのだよ。」

第二十三　相良義陽とその墓

相良義陽強大となる

昔、古麓城に相良といふ城主がゐましたが、百年ばかりの間に、八代・葦北・球磨・天草を治める程の勢になりました。わけても、今から三百六十年程前の城主は義陽といつて、學問もある

働きざかりの強い大將でした。

宗運との約束

その頃薩摩の國には島津義久といふ強い大將がゐて、肥後の國を攻めとらうと思つてゐましたので、義陽は阿蘇氏の家來で甲斐宗運といふ強い大將と、力をあはせる約束をしてゐました。この約束は義陽と宗運のお父さんの時からの事でした。

義久の使

義久は使を義陽のところへやつて、

「あなたが先手となつて宗運を攻めなさい。その後から私が大軍を引きつれて來るから。肥後をとることは何でもありません。」

と言はせました。その頃義久は九州を攻取らうと思つてゐたときですから、義陽はとてもかなひません。

義陽進退谷まる

そこで、義久と戰へば相良の家は亡びますので、祖先に申しわけがありません。それかといつて宗運といくさをすれば、お父さんの時からの約束を破らなければなりません。

妙見宮で悲しい祈り

義陽は全く進退谷まつてしまひましたが、やがて決心して、禮服を着て妙見宮に參り、神前に頭を下げました。

「私は宗運を攻めませう。そして相良の家を殘しませう。しかし私は約束を破る者でございますから、神様どうぞ戰死をさせて下さいませ。」、

軍旗が大楠の枝にかゝる
義陽響が原に陣をとる

義陽は悲しいお祈りをして、城中の兵わづかに八百人を引きつれて、古麓城を出陣しました。時に十二月一日の真夜中でありました。

途中で妙見宮に參拜して、將士の武運長久を祈りましたら、旗が大楠の枝にかゝつて、どうしてもはなれません。とう／＼引き切つて出發しました。そして宗運のゐる御船城の近くの響が原に陣を取りました。家來達が、しきりに陣を山にうつしませうと言ひましたが、聞き入れませんでした。

宗運出陣す

宗運はこれを聞いて驚きました。義陽といくさをするのはいやでしたが、今は仕方がないと、すぐ、強い兵二百餘騎をすぐつて、まつ先に城を出ました。

義陽の軍先づ勝つ

次の朝、義陽の一隊は別の道から進んで城を二つも攻め落し、大將の首を二つもとりましたので、義陽は大そう喜びました。宗運の大軍はその間にそつと響が原に進み、前後から義陽の軍をひきつゝんでゐました。

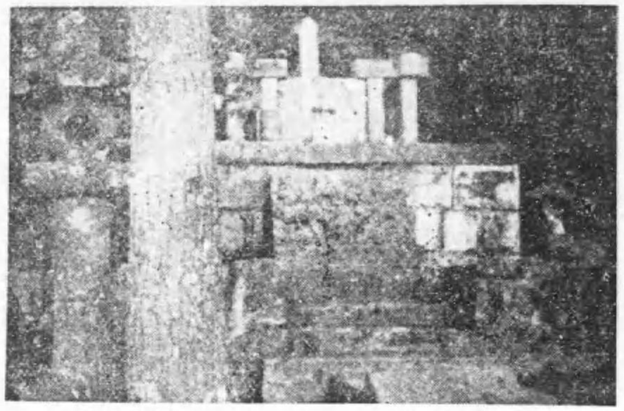
義陽の戰死

晝頃になつて、宗運の軍は一度にどつとときの聲をあげ、鐵砲を打ちかけ、太鼓をならして、義陽の陣のまん中めがけて攻めかけました。義陽の軍は不意をうたれて討死する者がたくさんです。けらいが義陽のそばへかけ寄つて、

「本陣の兵は大てい討死しました。しばらく山の上に陣をうつして休息してから勝負をつけたらどうでございますか。」

とすゝめましたが、扇をとつてしやうぎにかけたまゝ動きません。敵の大將がつき入つて來て、刀をふり上げましたが、義陽はもう刀をぬきません。

義陽の墓



相良義陽墓　熊本縣史蹟

とう／＼宗運の大將緒方といふ者が義陽の首をあげ、そのまはりにゐた三百人あまりは、皆思ひ／＼に勇ましく戰つて、義陽と一しょに討死しました。義陽は年三十八歳、勇ましい最後でした。

宗運涙を流す

豐福城の東といふ大將がこのしらせを聞いて、兵を率ゐて響が原にかけつけて見ますと、もういくさはすんでゐましたので、義陽の首を輿にのせて古麓城に歸りました。そして義陽の子長毎が、この首を芭蕉谷に葬つて石碑を立てました。墓のまはりには大木が茂つて、いかにも靜かな所でしたが、今は鐵道線路のすぐ上にあつて、熊本縣指定の史蹟となつてゐます。

さて緒方が義陽の首をもつて宗運の本陣に行きますと、

宗運はこれを見て涙を流し、

「義久が肥後に進めなかつたのは義陽と私がゐたからだ。もう阿蘇家も三年とたゝぬうちに亡びるだらう。」

と言ひましたが、果して翌々年には宗運が七十五歳でなくなり、それから間もなく肥後は義久の手に落ちました。

肥後は義久の手に落つ

第二十四　相良氏の治績

名和顕忠の代に、相良爲續は球磨からうつて出て、十餘年も古麓城を攻めつゞけ、文明十五年の秋には大手橋上や犬の馬場で激戰し、十六年三月七日に古麓城は落ち、顕忠は宇土郡の木原城に逃れました。

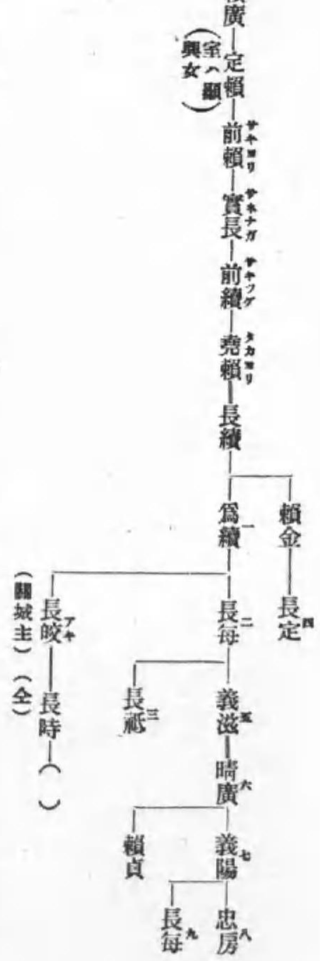
名和氏木原城に逃れ、古麓城は相良氏の居城となる

それから相良氏は八代・葦北をも併せ領し、爲續・長毎・長祇・義滋・晴廣・義陽まで、六代約百年の間、古麓城は相良氏の居城となりました。

相良氏の戰國的經營

相良氏の時代は我が國は戰國爭亂中で、相良氏もまたしきりに肥後南郡を攻取らうと努力し、すべての經營をこの一事に集中しました。

相良氏阿蘇氏の勝甲斐氏と攻守同盟を結ぶ



爲續以來、相良氏は八代・葦北・天草をその勢力下におくやうな勢となりましたが、北上すれば阿蘇氏と爭つて大友氏の勢力と衝突し、南すれば島津氏と雌雄を決せねばなりません。ところが島津氏が常に南方から相良氏をねらひますので、寶庫の八代莊を確保して、島津氏にあたる必要があり、晴廣の代には阿蘇氏の將甲斐宗運の父と攻守同盟を結び、義陽の代にも宗運と握手して此の形勢をつゞけました。

義陽の戰死

義陽は文武兼備の若い大將で、一時は大隅の大口城を攻取るほどの勢でしたが、間もなく葦北莊も島津氏にとられ、その上宗運と戰はねばならなくなつて、義陽の戰死とともに、八代は島津氏の領地となり、古麓城はその居城となつてしまひました。

こんなわけで、相良氏の治績としては、古麓新城の經營が最も大きな事業でありました。

鷹城

新城

城下町

稲荷神社

妙見宮

一、新城の經營

戰國爭亂中寶庫としての八代平野を確保するには、どうしても古麓城の規模を擴げる必要に迫られ、義滋は天文三年正月十六日に、丸山城の後に高く突立つた鷹峰に新しく城を築いて詰の城とし、工事が出來上りましたので、三月十日に鷹城にうつりました。そしてこゝから八代の平野を監視し、城内の指圖をしました。

つゞいて鷹城の下に新城を築いて本城とし、こゝに本丸・二の丸・三の丸を構へ、新城前面の三つの深い谷を利用して、倉屋敷を始め近臣の居宅を構へ、谷の入口に防備をほどこし、前面の平地に城下町を作り、名和氏の頃よりもその規模が大きくなりました。

新城は今もこの頃の城郭として模式的の形を殘してをり、城下町としては山下・古屋敷・横町茶屋口など、古い地名が字名に殘り、古井戸なども殘つてゐます。

二、敬神

相良氏は敬神崇祖の念にあつくありましたが、古麓城の鎮守として稲荷神社をまつりました。殊に新城の鎮護として妙見宮の尊崇はあつく、代々の領主は社殿を造營したり、社地を奉納したりなど、その事蹟は少くありません。

妙見宮社頭での義陽の悲愴な出陣の模樣など、涙なしには聞くことが出來ません。

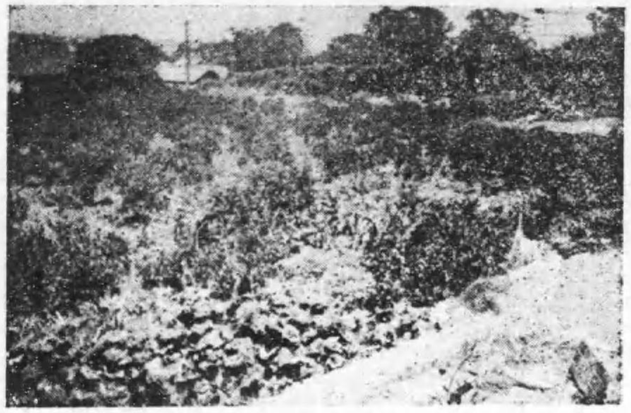
悟眞寺

吉野時代の勤皇

勅使の西下

爲續は悟眞寺の七堂伽藍を修理し、田三町二段を寄附し、長毎は田四町八段を寄附するなど、お寺も大そう大切にしました。

三、相良氏の勤皇



洞泉寺跡

相良氏一族中には、經賴・前賴等の如く、吉野の朝廷の頃、宮方として内河氏・名和氏等と連絡して活動したことは既に說きました。

室町時代になつて、後奈良天皇は御踐祚後實に十年にして御即位の大典を行はせられ、其の後内裏修理の費用を諸國の武家に命ぜられました。けれども當時は戰國の世で、誰もなか〳〵獻金が出來ないのでありました。

天文十四年の秋、勅使大宮伊治は、大内義隆の家臣弘田彈正忠の御案内で御西下、十一月二十七日球磨川口の德淵津に御上陸、二十八日に城下洞泉寺の御館にお着きになりました。相良義滋は翌二十九日お寺へ參つて御挨拶を申上げ、城の陣内で盛んな歡迎の宴を張りました。

鷹城に勅使を拜す

十二月二日には鷹峯城の本丸で、勅使から義滋を從五位下宮内大輔に任じ、世子晴廣を從五位下右兵衛佐に任じ、其の忠節を嘉せられる旨のありがたい御沙汰を拜しました。

一門の光榮

相良氏一門のこの末曾有の光榮に、義滋父子は感泣しました。翌三日父子は洞泉寺に參つて、深い天恩を御禮申上げ、五日莊嚴寺で御禮の宴を開き、六日には衣冠を正して氏神妙見宮に參拜し、つゝしんでこの名譽と御禮を申上げました。

九日には陣内で又盛んなお別れの宴をもよほし、十四日義滋父子は、勅使の御歸りを德淵津で御見送り申上げました。

新城下町の船着場のにぎあひ

四、海上の取引

相良時代は名和時代のあとを受けて盛んに海上取引を行ひ、肥後の西海岸から天草沿岸にかけての内海の交通はもちろん、朝鮮・支那から遠く南方にかけて盛んに貿易を行ひました。そして其の船着場は、大手前の山鹿町から横町に至る一帶の球磨川岸で、とくに大きな船は、德淵津にいかりを下しました。

中でも領主義滋は、天文八年新しく渡明船を作らせ、それが出來上ると市來丸と名をつけ、三月三十日自ら德淵でその進水式を見るといふ熱心さでありました。

當時は國民一般に海國的氣象が最も強くあらはれた時で、西國の領主や商人が大擧鯨波を冒して遠く海外に出で、これら諸國と貿易をし、或は變じて倭寇となりました。そして相良氏の時代も名和氏の頃に劣らず、城下町は商船の出入でにぎやかでした。

球磨川の舟運

五、交通

名和氏以來の交通路に、更に球磨川による舟運が二十粁も上流まで進んだことなどは、事蹟中重なことであります。

そのほかの遺蹟

相良氏の遺蹟として殘つてゐるものには、このほか義陽の墓、相良天神等があります。

第二十五　大手橋址と犬の馬場址

名和氏の古城と城下町と船着場

忠臣名和氏がよつた古麓城の中心は、上り山一帶にありました。蜜柑山のにべ谷をはさんで、右が飯盛城で本城、左が丸山城（鷺尾城）で對の城、その後の鞍掛城が繋の城、後の一番高い山が八丁城で詰の城でありました。そして城兵數百人の家族は、山の下の山鹿町や御内などいふ城下町に軒をならべて住んでゐました。山鹿町の下の球磨川岸は、食べ物やいくさ道具を運ぶにぎやかな船着場でした。

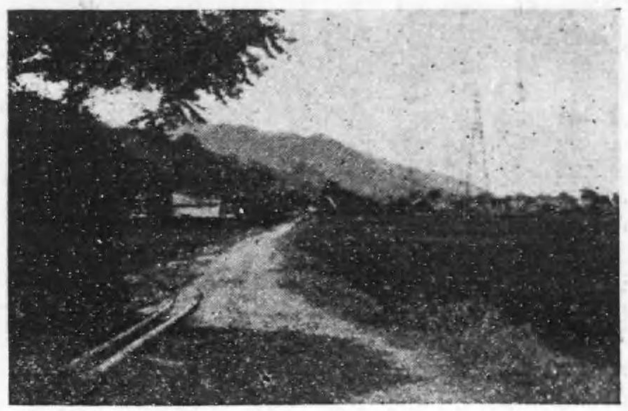
大手門と大手橋と球磨川堤

城には大手といつて正門があるのですが、今林麓亭のある右手の大觀山と左の赤はげ山との間

大手橋上の奮戰

犬の馬場の奮戰

大手橋址



犬の馬場跡

の谷が古麓城の大手で、堅固な大手門があり、この門と城下町との間には幾重もの水濠があつて城の前面を守り、大手門の前には大手橋があつて、城内と城下町とを通じ、城下町は球磨川の大きな堤で取りかこんで守つてゐました。

大手橋の上では度々はげしい戰がありましたが、中でも文明十五年十月十六日の夜、この城を攻取らうと球磨から攻上つた相良爲續は、之を撃退しようと打つて出た名和顯忠の將蜂須賀家親たちと、火が出るほどに戰ひましたが、勝負がつきません。そのうちに大手門の上のやぐらから矢を射かけましたので、爲續はやつと退きました。

十一月十五日には又攻めて來て、今度は大手の犬の馬場ではげしく戰ひました。このときも、顯忠の大將たちはよく戰つて爲續の兵を撃退しましたが、蜂須賀は名譽の疵を受けました。

文政五年に文政新地七百町歩に灌漑するため、山鹿町と大手址の間に大井手を堀りましたら、大手橋の柱や桁などが昔のまゝに現れ、又其の附近から、兵が使つたらしい刀や樣々の器が出て來ました。たぶん後になつて水濠はたいてい埋められてゐたのでせう。

犬の馬場跡

犬の馬場は春光寺門前の北にありました。相良義陽が響が原で戰死した後は、古麓城は島津氏のものとなりました。そして島津氏は此所で犬追物を武士たちにさせて見物したといひます。

第二十六　島津氏の治績

一、八代は島津氏の有となる

九州の三人衆

源頼朝が鎌倉に幕府を開いたとき、小貳資頼を鎮西の守護、大友能貞を鎮西の奉行、島津忠久を薩・隅・日の守護としましたので、それから小貳氏は北、大友氏は中、南が島津氏といふやうに、九州は三つの勢に分れてしまひました。この三氏はどれも吉野の朝廷の頃は足利方につき、その形勢はずつと足利氏の中頃までつゞきました。

島津氏は始め北條方について、楠木正成の赤坂城を攻めましたが、後には菊池氏の味方になつて九州探題を攻めました。それから名和氏が八代で勤皇の旗をあげたときは尊氏方につき、征西將軍宮が薩摩にお着きになつて、領内に宮方の勢が強く起つても、始終尊氏の味方としてはたらきました。

名和・内河兩氏の功績

この七百年來の三つの大きな勢力を統禦する役目をもつて、探題として次々に九州に下つて來たのが、一色範氏・小貳頼尚・今川貞世等で、幕府では皆指折りの腕ぎゝでありました。

この賊方の大きな勢をけ散らして、征西將軍宮の御旗下に九州御一統の大事業を御助け申上げた菊池・惠良・名和・内河氏など、多くの忠勇義烈の將士の精神は、實に偉大なものでありました。八代莊の名和氏、代官の内河氏などは、菊池・惠良兩氏に劣らぬ忠臣で、島津氏が陸路菊池の方へ打つて出ることが出來なかつたのは、まことに此の人々が古麓城を始め斷層崖の城の守りを固くして、八代・葦北の二莊を確實に握つてゐたからでありました。

八代莊は相良氏の有となり、肥後は大友氏の勢力下となる

南北一に歸して後は、名和氏の勢がやうやく衰へ、球磨の相良氏が起つて、八代・葦北の實權をにぎりましたので、名和氏は宇土に移つてしまひました。そしてこの頃から菊池氏もまた衰へて、肥後は大友氏の勢力の中に入りました。

八代莊は島津氏の有となる

南九州の島津氏が、この大友氏を討つて九州の雄とならうと、活潑な活動を見せて來たのはこの頃で、中九州の大友氏の勢が最初にこはれたのは、肥後でありました。宇土の伯耆顯孝・隈本の城親賢などが、つゞいて島津氏の勢の中に入りますと、島津氏は相良氏の葦北を手に收め、次に義陽に甲斐宗運と戰はせ、兩虎がたふれるのを見て、まもなく八代莊もその手に收め、古麓城以下島津一族の居城となりました。これは天正十年で、今から三百五十八年前のことであります。

九州は略ど島津氏の勢力となる

「菊池隆泰—武房
「城隆經……親冬—親賢—久基

これから數年の後には、肥後の北部はもちろん、その勢は豐後から北九州の方までのび、天正十四年には島津忠長、伊集院忠棟が大軍をひきゐて古麓城に勢揃をし、進んで筑後の諸城を攻めとり、七月筑前の岩尾城に勇將高橋紹運を圍みました。その時には筑後・肥後・肥前の軍は皆集つたといふ盛んな有樣でありました。もちろん宇土の伯耆顯孝もこの中の一大將でありました。七月二十七日午前四時からいよ／＼決死的總攻擊にとりかゝりました。八代の住人的場五藤は、敵が詰の城に立籠る所を追ひつめて、板城戸口で二番合戰をして功を立てるといふ有樣。かうして九州は全く島津氏の手に落ちてしまふものと見えましたが、この時大友宗麟は大阪で秀吉にあひ、島津征伐の計畫が出來てゐるのを知つてゐるのでした。

二、秀吉の九州平定準備

大仕掛の準備

豐臣秀吉は天正十年信長の遺業をつぎ、天正十一年には大阪に壯麗な城郭を築いてこゝに據り、諸將の邸宅をこゝに集め、海内第一の大都會を作り、天正十三年には四國を伐ち、北陸地方を平げました。秀吉はまだ九州・關東・奥羽が從ひませんので、手紙を島津義久に與へてその侵略をとゞめましたが、義久がきゝません。そこで秀吉は、天正十四年十二月一日命令を畿内・東海・

東山・北陸・山陰・山陽・南海の二十四箇國に出し、翌年二月二十日までに出發の準備をさせました。別に兵三十萬・馬二萬匹に對する一年間の食物を兵庫・尼ヶ崎地方に集めさせ、又諸國の船を出させて、糧食十萬石を赤間關に送らせました。

この大仕掛の準備をさせておいて、天正十五年正月元日、この二十四箇國に向つて、正月二十五日から五日ごとに出發させました。

出發

三、秀吉薩摩に向ふ

日向路と肥後路

この時北九州では、龍造寺・鍋島・立花など皆秀吉方についてしまひましたので、島津氏は豊後・筑後方面から退いて、只一人で薩隅日の三州を守らなければならなくなりました。秀吉はこの逃ぐる島津勢を追ふて、日向路には秀長(異父弟)を大將とし、其の勢十萬、肥後路は親ら三軍を指揮しました。

秀吉隈本につく

秀吉は天正十五年三月二十八日關門海峽を渡つて小倉につき、四月四日秋月城附近の荒平に泊り、立花宗茂の武勇をほめ、四月十日高良山で龍造寺政家が挨拶に來たのにあひました。十一日には肥後に入り、十六日隈本につきました。

島津軍肥後にて秀吉軍の模樣を見る

島津軍は三月豊後・筑前方面からつゞいて肥後に退き、三月の末新納忠元は竹迫(合志)に、伊集院久信父子は津守に、島津征久・町田久倍は御船に、分れ〳〵にとまり、しばらく秀吉軍の模樣を見てゐました。

島津軍八代に向つて退却す

秀吉の大軍が肥後に進んで來たことを聞くと、島津軍は隈本城で之を防がうとしましたが、熊本城主城久基、宇土城主伯耆顯孝等が皆そむいて秀吉に降つたのを見て、四月十四日秀吉の先鋒が隈本に入つた當日其の營をやいて、豊福・小川を通つて高田に着きました。隈庄の守將宮原景種は征久の隊に合しようとしましたが、土冦に襲はれて死にました。

忠元・久倍谷山城を攻め落し、征久は關城に、久倍は古麓城に入る

四、八代の形勢

この頃谷山城は、小川城主松浦久次が薩軍を通すまいと守つてゐました。久次はもと島津氏の家來でしたが、罪があつたので京都に出てゐるうち今度の役が起りましたので、秀吉の大軍が出發する前に肥後に入り、征西軍の案内者となつて色々とはたらいてゐました。そこへ薩軍が退却して來ましたので、久次は谷山城に立てこもつてこれを防ぎました。新納忠元と伊集院久信は力をつくしてこれを攻め、十七日に攻めおとしましたので、島津征久は關城に、町田久倍は古麓城に入りました。

征久、久倍の退却上の苦心

この日征西軍の先鋒は木山を通つて宇土に進んで來ましたので、薩軍はもうぐづ〳〵してはゐられません。それに又松浦久次のやうな者が八代にも出て來ないとはいはれません。薩軍は一兵も損ぜぬやうに歸るために、それは〳〵苦勞をしました。

城内にて別れの酒宴

征久や久倍は翌日十八日城内に八代の人々をたくさん集め、部下と一しょに別れの酒もりをしました。その時男の子供は皆呼び集めて、これにお膳を運ばせたり、酒を汲ませたりしてお給仕をさせましたので、八代の人々は大喜びです。武士も百姓も一人殘らずよつぱらつてしまひました。そこへ月が出てあたりは晝のやうに明るくなりました。時分はよしと薩摩勢はめい〳〵お給仕の子供を人質につれて城を去り、球磨川の岸を人吉に向つて退きました。八代の人々はすつかりよつてゐましたので、たゞあれよ〳〵といふばかりでどうすることも出來ません。翌十九日安勢地といふ所を越えてから子供を集めて、

「仕方がなくてこんな謀をしたのだから、どうぞ惡く思つてくれるな。皆無事に八代に歸つてくれよ。」

とことわりを言つてわかれました。

大將達はこのやうに心を細かにつかひましたので、二十日人吉も無事に通り、二十一日忠元の居城大口に無事退きました。

肥後口の島津軍無事薩摩に退却す

忠永の退却と降參

この時一方島津忠永は平山城を守つてゐましたが、肥前の有馬晴信が島津に反き、水軍を率ゐて八代に着き、日奈久を燒いて忠永の退路を斷ちましたので、あはてゝ其の居城出水に逃れました。征西軍の先鋒は忠永の軍を追つて葦北の海岸を進み、二十四日には出水に着いて忠永を降しました。

秀吉古麓城（八代城）に入る

この間に秀吉は隈本を立ち、十八日には隈庄に、十九日には八代に着いて、古麓城に入りました。又名主池尻河内の館に本陣を置いたとも、悟眞寺に宿陣ともいひます。

秀吉は軍勢が毎日のやうに宮地にとまり宮地を通りますので、妙見宮に不敬なことがあつてはいけないと、神官緒方惟勝に禁制の朱印を與へ、軍勢の亂暴狼藉・放火・社人に色々と難題を申掛ける等のことをとゞめ、これにそむく者には嚴しい罰をあてさせました。

秀吉妙見宮を尊崇し、軍勢に禁制を出す

平戸城主松浦鎮信は兵船を率ゐて八代に上陸し、秀吉に挨拶に出ましたが、お供を許され、水軍を率ゐて薩摩に向ひました。

松浦鎮信、秀吉に挨拶のため、八代に上陸す

秀吉は今度の役に肥後が大切な國であることがはつきりわかつたとみえて、二十日本陣から毛利輝元に手紙を送つて、

秀吉八代にて毛利輝元に手紙を送る

「肥後の國は横に廣い所は二十里もあり、せまい所で海ばたまで二三里もあり、その間は田地ばかりです。このやうな大國は早く皆に見せたいものです。」

といつてやりました。

秀吉は八代に四日滯在して佐敷に向ひました。途中球磨川の淺瀨を渡るとき、川の雄大なことに驚き、

秀吉吉祥瀨を渡る

「この天險を薩軍が一人も守つてゐないのは、全く有難いしあはせであつた。」と喜びました。全軍は安心して川を渡りましたので、八代の人々は此所を「吉祥瀬」と呼んでお祝ひしました。

神谷宗湛と石田三成

博多の大商人で秀吉にかはいがられた神谷宗湛は、二十四日八代の球磨川ばたで石田三成に秀吉のあとをたずね、二十六日水俣で本陣に追ひつきました。

秀吉は二十五日佐敷、二十六日水俣、二十七日出水、五月一日阿久根、三日太平寺に着くまで、草木をなびけながら進み、諸城を下しました。

日向口の秀長軍

日向口の秀長の軍も同じやうに進みました。島津義久はかなひませんので、五月六日鹿兒島を出て、途中伊集院郷のお寺で髪をそり、八日太平寺に着き、秀吉に罪をあやまりました。

義久罪を謝し秀吉義久に情をかく

秀吉は義久を近くに進ませ、いろ／＼と情をかけて歸らせましたので、義久はすつかり秀吉の志に感じ、これから島津氏は長く豐臣氏の味方となりました。

秀吉九州を平定し軍をかへす

かうして九州が定まりましたので、秀吉は太平寺に約二週間滯在し、軍をかへしました。

五、八代と秀吉の朝鮮征伐

秀吉佐敷にて北政所に返事を書く

秀吉は薩摩からの歸りには、またもとの道をひきかへしたのですが、五月二十八日佐敷で、夫人の北政所が五月十日大阪城から書き送つた手紙を受取つて、其の返事を書いた中に、

隈本にて肥後國を佐々成政に與ふ

「七月十日まで大阪へ歸ります。御安心下さい。高麗の方まで天皇の御稜威に從ふやう早船を仕立てゝ申し遣しました。もし從はぬときは來年成敗すると申してやりました。唐國まで一生の間に手に入れるつもりです。しかし今度の陣で白髪がたくさんにふえました。五月十日の御手紙は今日二十八日佐敷で拜見しました。明日は八代まで越すつもりです。」

秀吉が八代を通る頃は、もうあの朝鮮征伐の大計畫は出來てゐたやうです。そして六月二日隈本で、この大切に考へてゐた肥後國を信長に仕立てられた佐々成政に與へ、人吉の相良頼房、宇土の伯耆顯孝等五十二人の國侍には、もとのやうに知行を與へて成政の與力としました。

第二十七　小西氏の治績

大國肥後に

秀吉は九州を平定して先づ島津氏の領地を定め、つゞいて次々に諸侯の領地を定めましたが、この島津氏のおさへとして大國肥後に誰をするかは、最も大切なことでありました。

佐々成政肥後を領す

肥後は其の頃小さい勢力に分れてよく治まつてゐませんでしたので、天正十五年六月二日薩摩からの歸りみちに、隈本で肥後を老功者の佐々成政に與へ、人吉城主・宇土城主・隈府城主其の他五十二人の國侍にはもとのとほりの知行を與へて成政の與力としました。そして六月六日特に

成政には、國内を安らかに治めるやうに言ひつけました。

古麓城

此の時名和氏の子孫伯耆顯孝は宇土城主でしたので、古麓城には成政の家臣を遣して交替で留守をさせ、又八代を治めさせることにしました。

肥後治らず

ところが成政は、入國以來早速この多數の國侍に干渉を始めたものですから、二箇月ほどの後には、國中あちこちに騒が起りました。成政はすぐ兵をさし向けてしづめようとしましたが、なか〳〵の苦戰で容易にしづまりさうもありませんので、秀吉は近國の大名達に言ひつけて成政を助けさせました。

秀吉、成政及び國侍を處分す

こんな騒の中に天正十六年を迎へましたが、東國と東北の平定を前にして、九州でこのやうなことを起しては、影響するところが大きいので、諸大名への以後の見せしめに、成政には五月十四日尼崎法華寺で切腹を命じて國を除き、隈府城主父子は騒動の中心人物でしたからこれも切腹させ、其の他の國侍はそれ〴〵處分しました。

行長肥後南半を行長に與ふ

秀吉はこの善後策として肥後を南北に分け、緑川から北を加藤清正に、南の方を小西行長に與へました。時に天正十六年閏五月十五日。小西行長は宇土・上下益城・八代二十四萬石の大名となつて宇土城に居り、古麓城は家臣の小西行重に守らせました。この時清正は二十七歳の新進氣鋭、行長は老功者。これが四年後の朝鮮征伐に、兩先鋒となつて同時に肥後を出陣するのであり

行長、行重に古麓城を守らす

ます。

小西氏は其の後十三年の間領主として南肥後を治め、八代にもいろ〳〵な治績をのこしました。

麥島築城と城下町

一、麥島築城

天正十六年小西行長は家臣小西行重に命じて、古麓から四粁もはなれた球磨川口の麥島といふ大きな三角洲に、新しく麥島城を築かせました。海中の島々から石灰岩を切出させて、海ばたに高い城壁を築き上げ、その上に高いやぐらを立てて本丸とし、その東と南に二の丸・三の丸等の城郭を築き、大手門を東の方に設け、大手の前面に城下町を作つて侍屋敷と商家を配置し、城の南の栫檀津に船着場を設け、これですつかり新城が出來上りましたので、行重は一族及び城兵をひきつれて古麓城からこちらへうつりました。

栫檀津

山城より平城へ

麥島城の築城は、八代の發展のうへに一大時期を劃したもので、城郭が高くてけはしい山城から、海陸交通の便利な平城へうつつたと同時に、八代の中心が宮地から麥島へと移動したのであります。それはこの時代に經濟交通文化などが發達して來たため、もうこれまでの不便なせまい山城に止つてゐられなくなつたからでありました。

宮地より麥島へ

そのため宮地は、名和氏が古麓築城以來二百五十四年間の軍事・政治・交通・文化の中心を麥島にゆづり、此の後は古い昔のあととして殘ることになりました。そして宮の町・山下町・横町

山鹿町以下の宮地の商家は、多く麥島にうつり、新城下町の繁昌は驚くばかりになりました。

二、商業城下町としての完備

こんなわけで、城下町に商業地區を設け、城郭の南の外壁に、新しく栴檀津の船着場を設備して、水運の起點としました。すなはち球磨川によつて球磨に通じ、海運は九州沿海はもちろん、朝鮮・支那沿岸とも通じて海外貿易を盛んにし、近く天草の八代海に面した村々とは、密接な關係を生じました。

海陸交通取引の中心

陸路は薩摩・球磨・熊本への街道の集中點で、陸上交通取引の中心であることは前の時代と同樣であります。

かうして商業城下町として整ひましたので、これが後に八代が南肥後の取引の中心となるもとゝなりました。

麥島城は、經濟・交通上著しく近代的都市の形をもつところに、はつきりと新時代の色合が見えて來たのですが、何といつても政治上・軍事上の使命が第一でありました。

政治上軍事上の使命

古麓城以來海陸交通の要衝にあたり、西は八代海を背にして數層の天主閣が聳え、北は德淵の深い入江、東から南へ二すぢの球磨川の大流をめぐらし、海と川にかこまれた要害に據り、島津相良兩氏の押へとして重大な使命をもつてゐました。

今麥島城址は、熊本縣指定の「史蹟」であります。

三、キリスト教の奬勵

天正十五年七月、秀吉は九州平定の歸途、博多でキリスト教の宣教師に對して、諸大名をみだりに教徒となし、信者を誘ふて神社佛閣をこはすなど、五箇條について責め、つゞいて宣教師等の退去を嚴命してゐるくらゐですから、八代にもその頃いくらかの信者はあつたものと思はれます。

信者二萬五千人

それに行長の領となつてから、海上貿易の關係もあり、奬勵に力を盡くしたため、八代地方は信者の數が實に二萬五千人に達し、天草とともに、九州での代表的な所となりました。

四、神社佛閣をやく

それは現在宮地に殘つてゐる神社佛閣が、ほとんど小西氏のときにやかれ、しかも加藤氏・細川氏の時代に復興したと傳へられてゐるのでも想像が出來ます。このことは小西氏治績上の大きな汚點で、妙見宮創建以來八百年の美はしい歷史は、一瞬にして灰となつてしまつたのであります。

八百年の美しい文化灰となる

次に小西氏の時代にやかれたお宮やお寺のうち二三のものを擧げてみませう。

にべ神社

にべ神社は加藤清正のとき復興しました。

妙見宮

悟眞寺

仙舜が庵室

觀妙寺

莊嚴寺長福寺

正法寺

妙見宮は、二間四面高さ九間の多寶塔だけは精巧奇絶で、行長も感歎のあまりこはすことが出來なかつたといひますが、社領六十二町四畝を沒收し、大宮司・十五坊を廢し、全くあとかたもなくなつてしまひました。清正が復興しました。

悟眞寺は皆燒き、寺領四十三町四段歩の田畑山林を沒收しました。その時の輪藏の礎石が今懷良親王御墓前の畑中に殘つてゐます。清正が役人をつかはして現在の地に復興しました。舊輪藏礎石とともに熊本縣指定の「史蹟」であります。

顯孝寺は相良氏の頃悉地院となり、小西氏の頃はすたれて、そのあとに妙見宮神宮寺の執行職仙舜の庵室があつて、後醍醐天皇靈照院尼の御靈牌と御移陵の御供養を申上げてをりました。この庵がやかれたとき、仙舜は御靈牌を奉護して神宮寺に移し奉りました。

觀妙寺は幸なことに本尊だけが殘りましたのを、源六に再興しました。田地一町歩も沒收されました。

古麓杭瀨の莊嚴寺、鷺尾山下にべ谷の長福寺(東光寺)は、ともに麥島城下に復興しました。階下の正法寺は妙見十五坊の一で、四町四方の大寺でありました。相良氏はこのお寺を尊び、こゝで度々連歌の會を催しましたが、小西氏の時にはあとかたもなくこはされてしまひました。そのとき運慶作といひ傳へてゐた本尊釋迦の大きな像は、軀ばかり殘つたのを後の人が修理し、小さな草堂を建てゝ安置しました。今これを釋迦堂といひ、堂前の小庭に礎石が一つころがつてゐます。

後世この堂内にうつした妙見本地佛の阿彌陀の大像は、鎌倉時代の作といはれ、製作がことのほかりつぱであります。近くの民家に、正法寺井戸があります。大そう甘冷な水ゆゑ、細川忠興がよくお茶の水に賞用したといひます。

顯正寺

妙見十五坊の一で、天臺宗の寺でしたが、燒けてしまひました。今正福の橋といつて、附近に地名が殘つてゐます。

池尻河内の館

池尻に、池尻河内といふ豪族の館がありました。河内は宮地村の民長で、妙見宮社領辨濟使も勤め、其の館は、秀吉の島津征伐の際は本陣となりました。

小西氏の頃から家が全く衰へてしまひましたが、屋敷の周りの濠や土壁など近世まで殘つてゐて、其の富强をしのばせてゐたといひます。

今は館あとの七島畠の中に、河内の墓といふ五輪塔の上部が殘つて、附近の人々が香花を手向けるほか、何一つ目にとまるものはありません。

第二十八　加藤忠正の墓

宗覺寺境内

忠正と名のる

父母の慈愛

疱瘡にかゝり逝去す

加藤忠正墓

加藤清正の次男忠正の墓は、宗覺寺境内の山中にあります。

忠正は慶長四年に江戸に生れました。幼名を熊之助といひましたが。將軍秀忠がかはいがつて一字を興へましたので、それから忠正と名のりました。

大そう賢くて親孝行な子供でしたから、父母の慈愛は一方でなく、人々もまた大きくなつたらきつと父の清正にまさるえらい殿様になるにちがひないと、末頼もしく思つてゐました。

ところが慶長十二年正月に、恐ろしい疱瘡にかゝりましたので、病氣は惡くなるばかりでした。父の清正も母も大へんに驚いて、夜となく晝となく看病しましたけれども、醫術が今日のやうに進んでゐませんでした。もうこの上は神佛の加護をお祈りするよりほかに仕方がないと、國中のお宮やお寺で病氣の平癒を祈願しました。

秀忠も驚いて、半井盧庵といふ名醫をやつて、毎日のやうに手當をさせました。

夢のお告げ

しかしそのかひがなく、正月二十七日に、年僅かに九歳でとう〳〵なくなつてしまひました。人々の悲しみは言ひやうがありませんでしたが、わけても清正と母はすつかり力を落して、朝夕忠正のことを思出しては涙を流してゐました。

或る夜のこと、忠正は清正の枕元に現れて、

「お父さん、お母さん、どうぞお悲しみ下さいますな。私は北の方へ流れる谷川の近くで毎日遊んでゐます。」

といつて指をさします。見ると其の場所がはつきりと見えました。目がさめますと、母も同じ夢を見てゐるのでした。

忠正の墓 本成寺・宗覺寺

二人は不思議に思つて、早速國の繪圖を開いて見ますと、今の墓の地に當つてゐました。そこで忠正の遺骨を此所に葬つて、高さ五尺ばかりの五輪塔を立てました。翌年四月墓の近くに本成寺を建てましたが、この寺は寛永十一年五月八代城下に移されましたので、そのあとに宗覺寺を建てゝ、忠正の菩提所にしました。

加加藤計頭寶塔

塔の臺石に、「加藤主計頭寶塔」とあります。宗覺寺は大きな枝垂櫻が二株もあるきれいなお寺で、忠正の墓は疱瘡の神様といつて、おまゐりする人がたくさんあります。

第二十九　加藤正方一族の墓

清正の大事業

加藤清正の時には、球磨川に遙拝堰を築いて水をせきとめ、古麓の山鹿町に大井手を掘つて、この水を宮地・太田郷などの川北の田畑に灌漑して水利の便をはかり、萩原堤を築いて洪水を治め、又宮地に製紙業を始めるなどの大事業を興しました。

正方八代建設の大事業

この間實に十二年。次の加藤正方は忠廣の長臣として、初め麥島城を守ること九年、次に八代城を守ること十三年、前後二十一年の長い間八代にゐて文化の開發に盡くしました。

其の間八代城を築き、城下町を作り、近海の航路を開いて海上の取引を盛んにしたことを始め、蜒々一里餘の球磨川堤を築いて水害をなくし、製紙業を奬勵するなど、多くの大事業を成しとげました。

清正・正方の志をついだ細川・松井両氏

今日八代平野が縣下屈指の豊かな農業地であり、又八代町が紀元二千六百年を期し、附近町村を合併して市制をしき、熊本縣南郡の大中心地としてめざましい躍進を續けてゐるのも、全く三百二十餘年前正方が心血を注いだ八代の建設に始まつてゐるのであります。

そして又、この正方のあとをうけた細川・松井兩氏が、清正・正方の志をついで、郷土の開發に心をくだいた事を忘れてはなりません。正方は故あつて廣島でなくなりましたが、宮地には正

方にゆかりのある一族の墓があります。

古麓の圓光院南の山の中腹に、古い石碑があり、妙慶禪尼とあります。これは正方の母の墓であります。正方の母は八代城北の丸の東の門内に隱居してゐましたので、御東殿とよんでゐましたが、寛永四年八月二十八日に病死しましたので、此所に葬りました。八代町細工町の安養寺はこの菩提寺であります。

正方は墓の傍に小さい寺を建て、僧をおいて朝夕香華を手向けさせて孝養を怠りませんでしたが、其の後五十年もたつうちに、苔の下に埋れてしまひました。

妙慶禪尼墓　熊本縣史蹟

八代城主松井直之はこれを見て、りつばな石塔を立てゝ尊びました。それから二百數十年もたちましたので、石塔も朽ち果てましたが、今地領の射場氏が香花を供へてゐるのは感ずべきことであります。熊本縣指定の「史蹟」であります。

春光寺の北の山中無極庵の址の邊に、加藤正云の墓があります。正云は正方の

弟で、寛永九年九月二十三日に病死しました。五輪塔があり、前に石碑を立て、法號と次の和歌が刻んであります。

朝夕の手向ともなれせめてさは
言の葉くさの花はなくとも

第三十　井手

清正、正方の大事業

加藤氏が肥後の殿様であつた頃、八代では清正と正方とつゞいて、三十三年の間よいまつりごとをしました。そしてたくさんの大きな事業をおこして、人々のためをはかりました。

その中で清正は、農業を盛んにしてお米の取高をふやすために球磨川の水を引くことを考へ、二つの大きな事業をなしとげました。先づ遙拜の瀬に大石を積み、八字形の大堰を作つて水をせきとめました。

八代莊は昔平清盛に大功田として賜はり、その後平氏の領地になつてゐましたので、この瀬から宮地・太田郷・龍峰等八代平野の田畑に水を引いてゐたであらうと思はれますが、吉野の朝廷の頃名和氏の領地となつてからは、杭瀬といふ名で歴史にもあらはれました。この名和氏の頃の

遙拜堰

太田井手

杭瀬が、今驚くほど大仕掛の石堰となつたのであります。

次に古麓から太田郷にかけて、これも名和氏以來の用水路をほりひろげて大きな井手を掘り、山鹿町には新しく大池を掘り、こゝに水門を二重にこしらへて、あけたり閉めたりすることが出來るやうにし、遙拜の瀬の水を通しました。

この井手は山鹿町から井手内・蜘蛛手を通り、日置川の下をくゞつて、石原・源八から太田郷へ出、井手内・蜘蛛手から分れた井手は、一つは茶屋口・横町・洗出へ、又の一つは十文字・巣の木を通つて太田郷へ出てゐますので、この井手を太田井手といひます。

現今所々に水車をかけ、宮地・太田郷・龍峰・八千把・千丁・松高の數千町歩の田畑を養つてゐます。この事業は萩原堤とともに、正方がそのあとをうけついで、度々修築を加へました。

次に松井氏では督之の事業に、文政五年四月、太田井手の東側に開通した麓川があります。

數千町歩に灌漑

松井氏の事業

麓川

文政新地七百町歩に灌漑

加藤・松井兩氏のおかげ

遺志をついで

太田井手・麓川の二重井樋

この井手は、山鹿町の大池から出て、太田井手と平行して北に流れ、石原から右に折れて池尻の北側を山に向ひ、宮地國民學校・八代神社の後を通り、それから山の下に沿つて龍峰を通り、宮原町の近くから氷川と平行に西に流れ文政新地の七百町歩の新田に引きました。

遙拜堰と太田井手が出來上つたのは、今から三百三十餘年も昔のことであり、麓川は百十九年前でありました。今太田井手と麓川が通じてゐる村や町は、どんなにひでりがつゞいても稻がよく實りますのは、全く清正・正方と督之が、心血を注いでこの大灌漑事業を完成したおかげであります。

紀元二千六百年のめでたい年に、熊本縣と政府がのり出し、數百萬圓を投じて遙拜堰とこれらの井手を一層壯大にし、球磨川の豊富な水を全八代平野に十分供給しようと計畫し、もうその第一回の測量もすんだと聞いてゐますが、これらの人々の公益事業が、數百年の後になつて一層の輝きをそへてゐます。

第三十一　萩原堤

萩原堤

古麓の林麓庵の前から球磨川の岸を輪のやうにめぐつてゐる堤を、私どもは萩原堤といつてゐます。

雄大な流れ

日本三急流の隨一といはれてゐる急流も、この堤のところではじめて平野に出るのでありまして、川幅が至つて廣く、漫々とみなぎつた底知れぬ川水が、藍を流してゆるやかに流れる樣は、實に雄大な眺めであります。

堤の大きさと春秋の眺め

それにこの堤は、高さ十米、廣さ五米、根張三十米、長さ二粁もある壯大なもので後には三百年もへたらうと思はれる大きな松並木があつて、その間にはぜの木を植ゑ、水ぎはには櫻を植ゑてありますので、春の花時や、秋のもみぢ時はとても景色がようございます。

名勝

又川には、いつもいかだを下し、帆をかけた川舟が上つたり下つたりし、鮎を釣る舟もたくさん浮んでゐます。向ふの山と山の間には、遙拜瀨の白波がくつきりと見え、その上の大きな鐵橋にはいつも汽車が走ります。このへんは遙拜峽といつて、名所にかぞへられてゐます。川下の敷石の近くにも大きな鐵橋があつて、バスが通ります。

萩原堤はこんなに眺が美しい上に、名所舊蹟の宮地へ行く大切な道でありますから、人が何時

全長四千七百米

妙見文化以來の築堤

名和・相良兩氏の築堤

もたくさん通ります。

この堤は、もとの八代城をひとまはりして、松井男爵邸に續いてゐるので、全體の長さは四千七百米もあります。

萩原堤は大昔から杭瀬や用水路、海外交通の船着場などと關係が深いので、平氏が盛んな頃に早くも堤をきづいたものと思はれますし、なほ千年餘りも昔から妙見文化の花を開いた地でありますから、治水の事業もずつと古くから行はれてゐたに相違ありません。

さてこの堤のもとを築いた人達は名和・相良兩氏で、今から六百年ほど昔から築きはじめて、二百五十年の長い間にわたり、だいたい今の川筋にそつて、萩原の鐵橋附近まで出來てゐました。けれどもこの堤は、やつと宮地の田畑を守るくらゐのもので、大水が出ると度々こはされました。その上川口にはまだ堤がありません でしたので、舊太田郷・八代の二つの町や八千把村のやうな、當時川口の洲の上に出來てゐた漁夫や船頭の小村は、大水が出る度に水の下になりました。

萩原堤　熊本縣史蹟・名勝

加藤清正の築堤

加藤正方の大築堤

清正・正方の餘德

今から三百三十年ほど前、加藤清正のとき、始めて壯大な堤を築き、石ばねや堤のまがり、厚さ、兩側の傾斜などに獨特の手法を用ひましたので、見ちがへるほど堅固なものとなりました。

其の後十年餘りたつて忠廣の頃、加藤正方が麥島城を北の方へ移すことゝし、新しく川口の德淵村といふ洲の上に築城し、前川と海に面した方に堤防を築いて壯大な外郭としました。それからその城を守るために、始めて清正築造の萩原堤を修築し、川すぢをきめて、今のとほりに萩原筋から前川堤につゞけましたので、球磨川堤の長さは古麓から松濱軒まで實に一里六町餘の大堤防となりました。これは今から三百二十年も昔のことであります。

この大堤防の築造は、八代築城とともに當時正に八代の劃期的な二大土木事業でありました。これから球磨川の水が田や畑を流すことがなくなつたのであります。八代ではさきには清正の遙拜堰・太田井手・萩原堤築造の大治水水利事業があり、今また正方の大治水國防の事業が完成しましたので、人々は清正・正方を神樣のやうに尊びました。たゞ一度今から百七十年餘り前に、大へんな大水が出て萩原堤をこはし、家が二千軒も流れてしまつたことがありましたが、そのときは稲津彌右衛門といふえらい人が出て、其所を築き直しました。

今、熊本縣指定の「史蹟・名勝」であります。

第三十二　加藤氏の治績

關原の役

秀吉が薨じた後、徳川家康は領土も廣くもち、諸將中最も權勢がありましたので、石田三成は他の大老たちと相談してこれを除かうとし、慶長十五年九月十五日關原の決戰が起りました。この時小西行長は上方にゐて三成に應じ、宇土城は弟の小西長元・將南條元宅等が留守をし、麥島城は小西長貞が守つて、島津氏と手をとつてゐました。

加藤清正は隈本にゐましたが、豊後の細川忠興の杵築城が大友義統のために攻められましたので、兵を率ゐて留守居の松井康之を援けに行きましたが、途中で義統が降服したと聞き、軍をかへして二十日宇土城を圍みました。

八代亂橋の戰

ちやうど島津義弘の將本郷能登が兵三百を率ゐて麥島城を援けに來ましたので、長貞はこの兵を遣して宇土城の急を救はせましたが、清正の軍のため、宮原附近の亂橋に要擊されて、本郷能登は戰死し、薩摩の兵は麥島城に逃げかへりました。

小西軍善戰す

かくて宇土城は八代からの援軍も來ず全く孤立無援でありながら、勇猛な將士ぞろひで、惡戰をつゞけること實に數旬に及びました。十月、西軍大敗の報がつき、行長の悲慘な最後が傳へられたとき、城内の將士は皆聲をあげて泣きました。

宇土城・麥島城開城し小西氏滅ぶ

長元はつひに意を決し、城中の士民の助命をこひますと、清正は快く承知して酒肴を送つて城兵の勞をねぎらひました。長元は今は思ひ殘すこともなく、十月二十一日宇土城を明渡し、後隈本で自決し、麥島城でも同じく長貞が自殺して開城し、小西氏が滅びました。

麥島城に城代兩名をおく

清正は兩城を收め、麥島城は吉村吉左衛門・堤權左衛門の兩名に守らせ、後野尻久左衛門・蟹江與惣兵衛の兩名にかはらせて城代としました。

八代の劃期的建設

清正は慶長五年十二月、小西氏の舊領を併せて肥後全國の領主に封ぜられ、慶長十七年六月十四日忠廣がそのあとをつぎ、この年六月二十七日加藤正方を內牧城から移して麥島城代としました。これから忠廣が國を除かれるまで二十一年間、八代は正方の劃期的建設期にありました。なほ八代の民政については、清正の領となつてから忠廣の除封まで三十三年の間、清正・忠廣二代つゞいて心を用ひ、殊に大土木工事をいくつも完成し、正方と共に今日なほ其の遺德を感謝されてゐます。

清正

妙見宮

神宮司・院主・一乗坊にべ神社

悟眞寺

り建直し、昔大宮司・社司・檢校・巫・土器屋・薦祝部・御供屋・承仕八人・掃除人・檜物屋・大工・鍛冶・鐘撞・神樂人等があつた中から、社司・檢校・巫・御供屋・承仕方六人・土器屋・薦祝部・掃除方・笛吹・射手等をもとにかへしてお祀りを興し、寺院も社僧十五坊中神宮寺・院主・一乗坊の三寺を再興し、名和氏の祖先をお祀りしたにべ神社も建てました。

又慶長七年八月には懐良親王の御菩提寺である悟眞寺を再興しようと、家臣安田善助・多田毛左衛門に工事を監督させて、本堂・庫裏・山門等を復興するなど、小西氏とは全く反對に、お宮やお寺を敬つて、よく祖先を尊びましたので、人々は大へんに清正の德に感激しました。

加藤正方畫像　八代市淨信寺所藏

一、敬神崇祖

慶長五年小西氏が滅び、加藤清正はその舊領を併せて領することになり、いろ／＼と善政を行ひました。清正は神佛を敬ひ祖先を尊ぶ心の厚い人でありましたので、神社佛閣がことごとくやかれてゐるのを見て大そうなげき、お宮では先づ妙見宮の社殿をもとの通

正方

妙見宮

本成寺

悟眞寺

加藤氏良風美俗を作る

清正の一族加藤正方が慶長十七年八代城代となつてからも、清正に劣らず敬神崇祖の範を垂れて、よく八代を治めました。

妙見宮に對しては內陣の厨子を寄附し、元和二年神前に石の大鳥居を寄附し、寛永八年四月には妙見本地堂二間に二間半、瓦葺、本尊木佛坐像、高さ二尺一寸を再興し、寛永九年七月十二日には、御燈明料として田畑八段四畝を寄附し、同日本成寺（今の宗覺寺）に畠五段八畝二十一歩を寄附しました。

又この年悟眞寺に田二段五畝二十四歩を寄附しました。

加藤氏は清正の頃も、正方が八代を治めることになつてからも、小西行長がキリスト敎を信ずるの餘り、十三年にわたつて神社佛閣をこはし、土地も取上げてしまつた後を受け、慶長五年から三十三年間、由緒の尊い妙見宮・悟眞寺・にべ神社を始め、たくさんのお宮・お寺を復興しましたので、人々の喜びは一通りではありません。これから宮地では、神佛を敬ひ祖先を尊ぶ昔のよい風にかへりました。

宗覺寺

正方の母の墓

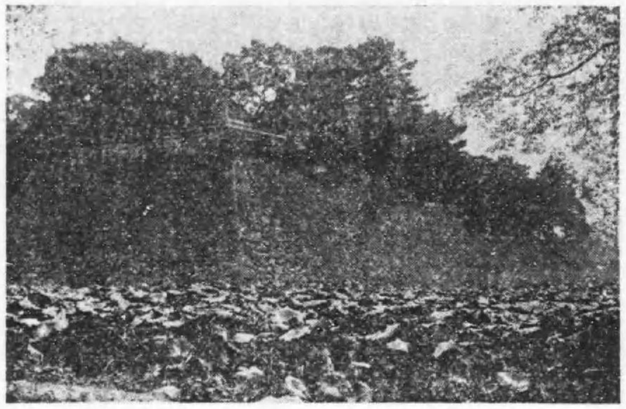
淨信寺

谷の宗覺寺は清正の二男忠正の菩提寺で、こゝにはもと清正が建てさせた本成寺といふお寺がありました。古麓の地領には正方の母や一族の墓があります。なほ正方が麥島城中に淨信寺を建て、清正と父母をまつり、毎月參拜の禮をかゝなかつたことは有名な話であります。

清正自ら麥島城を修築す

麥島城大地震にこはる

城地移轉に決す



八代城址（天主閣址）　熊本縣史蹟

今は一日も早く復興しなければならぬ大切な時でありました。しかし、麥島城が築かれてからこゝに三十二年、其の間に人口の増加、經濟・交通の發達は驚くばかりで、とても麥島のせまい城地では、今後城下町の發展はおぼつかなく、殊に夏の増水時には、城郭は水中に孤立しなければ

二、八代築城

清正が小西氏の舊領を併せ領した其の翌年、慶長六年には自ら八代に出張して麥島城を修築し、南方の防備に心を配りました。それから十八年間は城は全く無事で、梅檀の津に船の出入もしげく、城下町は小西氏の頃にも増してにぎ合ひました。

ところが、元和五年三月十七日の曉に八代地方を襲つた大地震のために、其の日の正午頃には、小西行長が心をこめて築造した麥島城は、城櫓はすべて倒れ、城壁も大方毀れてしまひました。

さてこの城は、島津・相良兩氏の押へとして殘しておくことを許されてから、僅かに數年を經たばかりですから、

正方八代建設を決意す

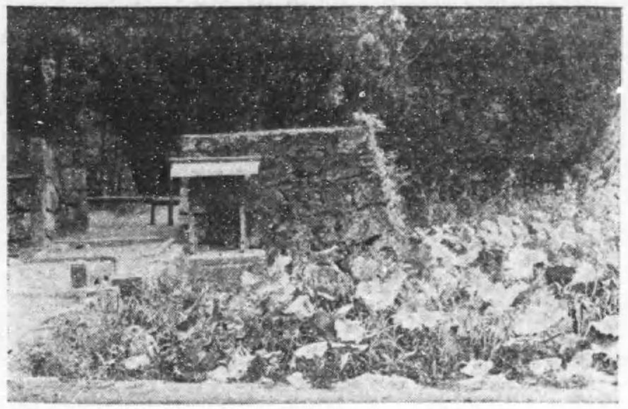
正方心血を注いで八代城を築く

最も進歩した平城の模式的のもの

ならぬ缺點がありました。それに小西氏は、加藤氏に備へるため北の方にも德淵をひかえた三角洲を城地にえらびましたが、今はもうその必要がなくなりました。そのうへ麥島城の後の德淵津は、古から栴檀津よりもよい船着場で、八代平野の物産を集散するには、實に格好の場所でありました。そこで正方は城地を德淵村に移し、八代地方文化の發展に一大時期を劃しようと決心しました。

藩主加藤忠廣は、當時一國一城の命令が嚴しく出された直後でしたが、特に將軍の許しがあつて、元和六年九月、正方に命じて新城を築かせました。正方が心血を注いでの指圖により、それから三年目の元和八年二月吉日に大方出來上りました。

石灰岩のまつ白い城壁の上に、四重五層の屋形造の天守閣が、近國を壓して青空に聳え立ち、城壁のまはりの濠には、球磨川の清流を青々とたゝえて城の影をうつし、城の南には新しく前川を堀りひろげて、二つの大きな流れと共に島津氏に對する大要害をなし、にぎやかな城下町は東の



本丸裏桝形門前廊下橋址

門を陸路、南の德淵津を水路の起點とし、最も進歩した平城として、麥島城よりもずつと〳〵壯大美麗に出來上りました。

一里半の大堤防

この頃同時に工を起した古麓の山際から球磨川の北岸に築いた大堤防は、水利と國防の二つの大きな意義をもつてゐましたが、こゝに前川の堤防から、西方の海の堤防につゞき、長さ一里半の松堤となつて、八代城の外壁をなしました。

八代城の面目

今八代城の面目を擧げると、次の通りになります。

文を以て治める方針

（一）　德川家康は、慶長五年關原の役に大勝を得たので、大いに諸大名の配置をかへ、天下の實權を收め、慶長八年幕府を江戸に開きましたが、元和元年五月大阪夏の陣をもつて豊臣氏が滅んでから、幕府は今後このやうな亂が起らないやうにと、諸大名の武力を削減し、文をもつて治める方針を立てました。

一國一城の令

そこで元和元年閏六月十四日、城主の居城だけを殘して、其のほかの城はことごとく破却するやう嚴重な命令を出しました。これが有名な「一國一城の令」でありますが、翌七月、將軍秀忠の名をもつて、武家諸法度十三箇條を公布し、諸大名を治める基本を示しました。

新築は勿論差しとめる

そして其の第六條に、「大名の居城は、たとひ修繕でも必ず幕府の許しを受けてからにせよ。まして新しく築城することは差しとめる。」といつて、この命令を强化しました。

小數の例外

このやうに當時幕府は城郭については特別に注意をはらつてゐたのでありますが、それでもなほ心配なので、全國重要な街道筋に特に幾つかの支城を存置して、地方の鎭護にそなへました。

全國中僅かに

中でも、伊勢の津城主藤堂氏に對して伊賀の上野城、安藝の廣島城主淺野氏に對して備後の三原城、豊前の小倉城主細川氏に對して同國の中津城、それに肥後の熊本城主加藤氏に對してこの八代城を殘させたのは、最も重大な使命があつたからであります。

南肥後軍事の中心

ことに八代城は、南方島津氏、東方相良氏をおさへるために、幕府が此の令を布いて五年も後に、しかも城地を新しく移して以前よりもはるかに壯大堅固に築城を許したものでありまして、まことに意義の深い城で、南肥後軍事の中心であります。

平城として模式的樣式をそなへた貴重な城

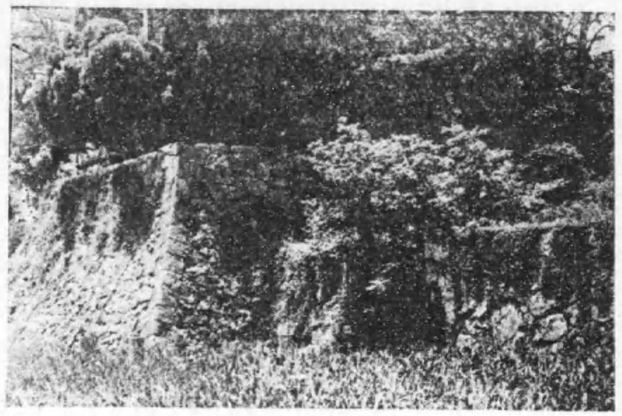
當時は一國一城の令などが出された直後でありながら、軍學者達の間には、かへつて城郭の學問が進歩した時でしたから、正方は八代城の築城には、その最新の研究の粹をあつめ、しかも加藤氏獨特の手法を用ひましたので、小城ではありますが、平城としては實に最も進歩した、そして模式的な樣式をそなへた、學術上貴重な城であります。

南肥後政治文化の中心

（二）　正方は八代・葦北の軍事を統べ、南部國境に變ある時は、直ぐに第一線に立つことが出來る體制を整へ、精かな頭腦をもち、藩廳でも家老として大きな勢力をもつてゐました。從つて八代に移つてから十三年間、正方は城郭の整備に力を盡くすと共に、

南肥後交通取引の中心

新城下町と宮地



本丸大手桝形門前欄干橋址

八代文化の發展に大きな貢獻をしたもので、南肥後の政治文化の中心となりました。

（三）八代城は、都市計畫による整然とした城下町をもち、それによい海港を備へた最新式の平城で、南肥後の交通取引の中心であります。

かうして八代築城により、新城下町は政治文化の中心として、麥島にもまして美しく出來上りました。そして麥島は、城も城下町も神社佛閣も皆新城に移してしまひましたので、全くの畑とかはりましたのに、宮地は、懷良親王御遺蹟・妙見宮を始め、名所舊蹟の地として加藤氏とは密接な關係を保ち、新城下町に次でのにぎやかな所でありました。今八代城址は、熊本縣指定の「史蹟」であります。

三、治水・水利

加藤氏は八代築城を始め、たくさんの大きな土木事業を完成しました。南肥後の穀倉（こくそう）である八代平野の經營については、名和・相良・小西等代々の城主が皆努力して來た所でありましたが、

遙拜堰と二重井樋

萩原堤

正方の大築堤

更にこのあとをついで劃期的大工事を完成したのは、實に清正と正方でありました。

清正は八代平野がりつばな田畑となるやうにと、名和氏以來の杭瀨（くひせ）（遙拜瀨）に、新しく長さ三百八十七間もある八字形の敷石の堰を堅固にこしらへて川水をせきとめ、この水を、これも新築した山鹿町の二重の井樋を通して太田井（おほたのゐで）手に通じ、宮地・太田郷・龍峰・八千把・千丁の井手に引きました。また同じやうに南の方の高田・植柳にも引きましたので、このため二千町歩の沃田を作りました。

その頃の球磨川は、川口がもう麥島・德淵まで海中に突出してゐましたが、名和・相良兩氏の頃はもつと上流の萩原附近が川口でありました。そんなわけで、加藤氏の始の頃は、川岸にはまだりつばな堤防が出來てゐず、大水の時には川下は一面洪水に洗はれるので、人家もいたつて少くありました。そこで清正在世中十二年間に遙拜堰を築造するとともに、萩原堤の大工事を行ひました。

先づ川すぢを今のやうにかへ、名和・相良・小西時代の萩原堤防に大改造を加へて壯大にし、堤防の築き方や石ばねに獨特の研究を應用し、また別に水路を殘して洪水時に備へるなど、細心の注意を拂ひました。

清正築造の萩原堤は、まだ城が麥島にあつた頃のことですから、その長さも宮地を守るくらゐ

のものでありました。その後十年餘、加藤正方の時になつて、八代築城と一しよに城下町を洪水から守る必要も起つて來ましたので、この萩原堤を修築し、新しく古麓遙拜堰から城の外壁に續けて、川の北岸に一里六町餘の大堤防を築きました。これは當時實に驚歎すべき大事業でありまして、このために球磨川以北の田畑は始めて洪水の心配がなくなつて、これから海岸へ海岸へと人家がふえて行きました。

清正・正方の八代建設の大精神は永遠に生きる

加藤氏はこのやうに名和氏以來まだ出來上らなかつた治水事業をなしとげ、同時に水利の便をはかりました。昭和十二年から十四箇年計畫、工費三百五十一萬圓をもつて始められた球磨川改修の大事業は、この清正・正方が心血を注いだ堤防へ續けて行はれ、また清正苦心の遙拜堰は、莫大な國費をもつて強化し、全八代平野と新しく誕生した大八代市の發展をはからうと、すでに第一回の測量を終つたと聞きます。清正・正方二代の八代建設の大精神は、八代の發展とともに永遠に生き輝くのであります。

四、產　業

農產物
海產物

加藤氏は球磨川の治水事業と同時に、灌漑のための大土木事業をなしとげましたので、人々は川口や海邊近くに移り住んで新しい田畑を作るやうになり、人口が增加すると共に、農產物も豐に、魚介もたくさんとれ、山の產物も近くにあり、名和氏以來の寶庫は更に一段と發展をしました。今日八代が熊本縣の雄郡として豐かさをほこつてゐるのも、清正・正方相ついで名和氏以來の建設を受けついで、八代の劃期的大建設を成就したことにあるといはねばなりません。

宮地紙の始

清正はまた宮地の中宮川の水質が製紙に適するのに目をつけ、筑後から矢賀部新左衛門を招いて御用漉とし、この川邊に製紙業を起しました。この業は其の後代々、藩主の奬勵によつて盛んになり、江戸時代の中頃には日本中にも名が著はれ、現在は約四十戸の製紙業者があつて、村の產業の一大勢力となつてゐます。

八代燒の始

妙見宮には土器屋といつて、古い時代から燒物を製造する人達がゐて、宮地山の良質の陶土を用ひて、祭器を奉仕してゐました。

加藤清正の時代になつて、朝鮮から陶工をつれて歸り、新しい陶法を傳へ、後この土器屋窯を復興して陶器を盛んに製造し、これがのちに符山窯となりました。肥後における白磁染付の最初の燒物であります。

當時の製品の破片が、妙見宮東側の窯跡と、八代城本丸東北隅に出土します。

五、干拓・殖產

昔の球磨川と八代平野

昔は球磨川の本流は今の川すぢを流れて麥島附近で海に入り、南川は流藻川すぢを流れて植柳の南で海に入り、北川は山鹿町の附近から日置を流れ、海士江で海に入りました。こんなわけで

加藤氏以前の八代平野は、今の鐵道線路附近が海岸線で、廣さは今の四分の一にも足らなかつたやうであります。

新牟田と外牟田新地

そこで清正以來干拓の大事業が行はれて、今日の八代平野をこしらへたのでありまして、清正の頃新牟田を干拓し、正方の頃外牟田を開き、千丁村の一部を田畑として農業の發展に盡くしました。

六、交　通

球磨路
辻の札
薩摩路
熊本路

陸路は、八代城下町東門前を起點として、球磨川堤をさかのぼり山鹿町を通るのが球磨路、德淵札の辻から前川の渡しを渡り、麥島・植柳を經て平山から斷層崖下を日奈久に通ずるのが薩摩路、札の辻から萩原堤・宮地追分をへて川田に通じ、熊本城内新一丁目札の辻まで十一里は熊本路で、この三つの道が幹線をなしました。城の北には後に八千把の田中に通ずる田中口が飛渡の三尺道に開きましたが、築城の頃は城の北一帯は全くぬかるみで、水田もまだ出來てゐませんでしたから、搦手の要害となつてゐました。

田中口
ぬかるみ

水路は、札の辻を起點として附近の一帯から御船場までは、德淵津の船着場で、毎日數百隻の大船・小舟が出入しました。

德淵津
御船場

球磨川水路

先づ球磨川は田舍へ口から本流に出て球磨に通じ、海路は葦北・八代・益城・宇土・天草の沿

海路

岸諸港は悉く八代と取引し、遠く北は川尻・高橋・高瀬・長洲、西は肥前口の津・島原・長崎、南は薩摩日の島のやうな遠い所とも交通しました。

正方の都市計畫

したがつて本町・細工町・德淵町・二の町・宮の町のやうな商店街や、中島町・魚屋町・魚棚町のやうな海産物取引の町や、八百屋町のやうな農産物取引の町などが繁昌したほか、加子町・船大工町・職人町のやうな水運・造船・工作等の特別地區も出來ました。

またたくさんのお宮やお寺のうちおもなものは、方位に從つて配置し、そのほかのものは實戰の時のことを考へて城下町中に規則正しくおきました。

昭和の四大事業

正方は實に三百二十年の昔、八代町の都市計畫を完成し、球磨川の流を定めて大堤防を築き、新地を拓いて產業の中心地となし、海港を作つて海陸取引の中心地としましたが、既に昭和十二年からこの正方の大堤防に續け、球磨川改修の大工事を開始して、八代町を中心とする大八代市の實現を促進し、德淵津よりはるか川口に雄大な八代築港も計畫を進められ、更に清正が心血を注いだ遙拜堰は數百萬圓を投じて强化し全八代平野の灌漑用水等を引かうとする議が熟し、目下すでに第一回の測量を終つてゐます。

八代建設の大精神

清正・正方八代建設の大精神は、紀元二千六百年を期して近代的都市港灣の建設に向つて一大飛躍をしようとしてゐるのであります。しかして宮地村は名所舊蹟の地として、大八代市の特別

特別地區宮地

偉大な鄉土の先覺者開鄉の大恩人

地區(觀光地區)をなさねばなりません。

清正・正方の如きはまことに偉大な鄉土の先覺者・開鄉の大恩人と言はねばなりません。

七、文　化

加藤清正が文武兼備の名將であつたことは、あまねく人の知つてゐることでありますが、八代城代の加藤正方も、また文學のたしなみが深くありました。

謠

加藤忠廣が國を除かれるとき、幕府は正方を江戸に召しよせ、二十一箇條をたづねました。その使が八代に着いたときは夕方で、正方は城内で行水をすませ、謠をうたひ小鼓を打つてゐるところでした。正方は其の夜半に八代を立つて、熊本に向ひました。

連歌

西山宗因と飛鳥川

正方は連歌の道にも深く達してゐました。有名な西山宗因は正方の近臣で、其の作飛鳥川は文學のかほり高く、遺臣が四方に散り〴〵に散り行く有樣と人々の心のうちを、さも目に見るやうにつたへてゐます。

宿命觀

八代人氣質

正方はまた佛敎に對する信仰が深く、熊本・八代兩城の引渡が平隱のうちに行はれたのは、正方の宿命觀が中心となつたからであるともいはれてゐます。

とにかく文學・佛敎を中心とした加藤氏の文化は、其の後松井氏の時代に至るまでも、長く影響を傳へ、一種の八代人氣質をつくりました。

忠廣の決心

第三十三　細川氏の治績

加藤家にとつては實に思ひがけない事件のため、寛永九年五月の始め忠廣は江戸に呼ばれました。その時熊本城中では籠城を主張する人々がありましたが、正方が進み出て、

「それは石を抱いて淵にとび込むのと同じことです。御間違ひがないのなら、一日も早く江戸にお出でになるがよいと思ひます。もし御申譯が立たずして切腹か流刑を仰せつけられるやうなことがあれば、それは前世の宿業と思召し遊しませ。」

と申上げましたので、忠廣は決心して江戸に上りました。

丸岡の謫居

幕府では德川頼宣(紀伊家)等がいろ〳〵と奔走しましたが、そのかひなく、六月一日に忠廣は三十一歳で國を除かれ、六月十八日出羽の庄内に着き、丸岡の謫居で、五十二年の生涯を終りました。

八代城の引渡

熊本・八代の兩城は、七月二十二日多數の大名が揃つて踏みこみ、異議なく受取り、八代の御城番には大名中から、木下右衛門大夫・稻葉民部少輔・有馬左衛門佐・朝倉仁左衛門・ほかに御目附が來て、城に居殘りました。

正方の死

正方もこの月に城を退いて京都へ行き、後廣島にうつり、そこで片岡風庵といつて、心靜かに

餘世を送り、寛永十三年に病死しました。辭世に、

病の床にふし暮る程によはり果、折から長月十三夜の月山の端さしはなれたるも、

今はのきはと身にしみて、よしやあしや

月もあはれ今宵を秋のなこり哉

梓弓やつの苦しみうけし身の引はなれては本すゑもなし

八代開郷の大恩人の死としては、餘りにもいたましいことでありました。

細川藤孝（幽齋）—忠興（三齋）—忠利—光尚—綱利—吉利

（源氏）

利重—宣紀（ノリノブ）—重賢（靈感）—治年

宗孝

立孝（宇土）……齊茲（ナリシゲ）

寄之（松井）

齊樹（ナリタツ）　立之

齊護（モリ）

護美（マシ）　護久（ハル）　詔邦（コシクニ）

護立　護全　護成（モリシゲ）

細川忠興八代城に入る

寛永九年十月四日、細川忠利は加藤氏のあとを受けて豊前國三十七萬石から肥後國五十四萬石の大名となり、十二月九日熊本城に入城しました。忠利の父忠興は十二月二十二日八代に着き、二十五日八代城に入城し、五男立孝を本丸において政治にあづからせ、自身は北の丸にゐて、立孝を助けました。

細川氏の善政

八代代々の領主は、小西氏のほかは皆名君のほまれ高く、敬神崇祖の行ひ厚く、心を民治に用ひ、善政を行つて長く人々に敬はれてゐますが、細川氏もまたこれにもれません。

立孝は正保二年閏五月に三十一歳で病死し、忠興はまたその年の十二月二日に八十三歳で北の丸で卒し、翌年松井氏が入城しましたので、細川氏が八代を治めたのは十四年間でありました。

細川氏はこの間にたくさんの善い政治をしましたが、中でも敬神崇祖の事蹟は最も著しく、ほとんど全精力を小西氏が破却した神社佛閣の復興に集中して、加藤氏の遺業を完成したかの觀があります。

一、敬神崇祖

妙見宮

細川忠興は、或日妙見宮に參拜して寶物を拜觀し、四寅劒に細川氏の紋所と同じ九曜星の彫刻があるのを見て大そう喜び、それから國家守護の神様として一そう妙見宮を尊びました。

寛永十三年十月二日には神輿を寄附し、其の天井に雲龍を畫かせ、裝束もいろ／＼と新しくこしらへ、神幸式を始めました。忠興はおまつりを古の例に改めたほか、加藤氏再興の社殿を修繕し、田地百石を寄進しました。

このほか忠興夫妻と立孝の母は、寶物をいろ／＼と寄進し、それから五十餘年後貞享元年十月には、細川家から社領として二十五町二段八畝歩を寄附しました。そして毎年の大祭には細川家

御靈神社

から警固の武士を出し、郡代諸役等が出仕して、莊嚴な祭典が取行はれました。

御靈神社は、清和天皇の勅願によつて日本國中に三十六社御建立になり、このお宮は九州での其の一つで、祭神は細川氏の氏神でありました。忠興入城の頃は社殿はすつかりすたれて、林が一むら殘つてゐました。忠興はこれを聞いて、正保元年社殿を建て、三十六石の社領を寄附し、下社家八人を奉仕させました。

悟眞寺

悟眞寺については、寛永二十年忠興は、明人黄大倫筆「悟眞寺」の額面を寄附しました。又延寶五年十二月六日には、綱利が寺領三十六石、山林十五町歩を寄附しました。

八代城では八幡社をまつり、加藤正方の菩提寺淨信寺を興し、泰厳寺に信長をまつつたほか、たくさんのお宮やお寺を小倉から移し、山伏を大事にし、神佛を敬つて祖先を尊ぶことを人々に教へましたので、士民は心から忠興を敬ひました。

忠廣の改易と共に一時中絶す

二、製紙業の奬勵

加藤清正が御用紙を漉かせるために起した宮地の製紙業は、當時全國でも珍らしい大切な工業でありましたが、忠廣の改易と共に新左衛門は筑後に歸り、一時全くやんでしまひました。

矢賀部新左衛門忠興の招により一族とともに宮地製紙を再興す

忠興が八代に入城してから製紙の話をきいて大そう喜び、新左衛門を筑後から呼びかへして細川氏の御用漉に取りたてました。新左衛門は今度は別に一族の下川孫兵衛・原四兵衛もつれて來ましたので、加藤氏の時よりも盛んになりました。

宮地製紙盛んとなる

細川氏は御用漉には扶持を與へ、いろ〳〵と保護してこの業を奬勵しましたので、この後次第に谷の兩側に製紙家が軒をならべて業にはげみました。

重賢の頃名人木村喜三次輩出し、名聲一世にあらはる

この後細川重賢の頃、松井氏の推薦で御用漉は八戸となり、新しく木村喜三次といふ名人も輩出して、大高擅紙・水玉紙・青雲紙などいふ高級品を製出し、宮地紙の名は一時に世に高くなりました。それに松井家の御用漉も別に定まりましたので、この頃から製紙業は村内にひろがり、一大産業となつて今日に及びました。

立孝・忠興相ついで卒す

忠興の死

正保二年閏五月立孝は八代城中に卒し、十二月二日忠興もつゞいて北の丸に卒しました。遺骸を北の丸出丸の泰勝院内甘棠園で荼毘に附しました。今その跡には老松が一むらしげつて、其の下に六地藏があります。

松井興長八代城主となる

正保三年八月藩主光尚は松井興長を八代城主にし、お城附として騎士五十八人をつけました。

第三十四　松井氏の崇祖

康之久美村に常喜山宗雲寺を立つ

杵築城内に宗雲寺をうつす

興長、春光院と改む

小倉に春光院をうつす

熊本白川端に春光院をたつ

忠利熊本龍田口に常喜山春光院を建つ

大字古麓の春光寺は、松井家の菩提寺で、代々の墓があります。松井氏は源氏の子孫で、代々武功の譽が高くありましたが、又勤皇の志があつく、神をうやまひ、祖先をよく尊びました。

天正年間細川藤孝が丹後國の領主であつた時、松井康之は藤孝に從つて久美城を守つてゐましたが。そして天正十一年康之は久美村に常喜山宗雲寺を建てゝ、父正之を追福しました。

慶長六年康之は豊後國杵築城にうつりましたので、宗雲寺を城内にうつしました。

慶長十七年正月康之が卒し、法名を春光院英雲宗傑と申しますので、康之の子興長は宗雲寺を春光院と改め、寺領百石を寄附し、又細川忠興は香花等を納めました。

元和三年興長は小倉に移つたため、春光院も小倉に移しました。

寛永九年十二月細川忠利は加藤忠廣の後をうけて肥後藩主となり、松井興長には下屋敷として千反畑の白川端を與へましたので、興長はその屋敷内に春光院を建てゝ、祖先を祀りました。

寛永十五年五月、細川忠利は前年起つた島原亂が平定したのを機會に、その節松井興長寄之父子の武功をほめ、又其の祖康之が藤孝以來三代に盡くした武功と誠實な勤務を追想して、其の冥福を祈るため、熊本龍田口に春光院を建てることを命じ、小坂新八外二人の役人に工事をさしづさせ、十六年落成しました。そしてこのお寺を常喜山春光院といひ、興長から寺領百石を寄附しました。

興長八代城主となり荷澤山宗雲寺を菩提寺とす

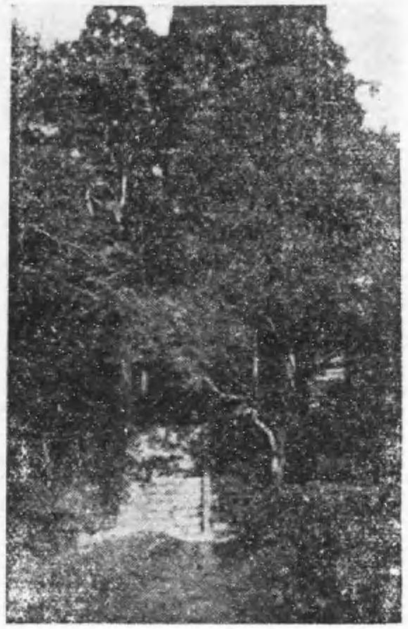
宗雲寺に泰巖寺をうつす

綱利龍田口の春光院を古麓に移し江東山春光寺を建つ

正保三年八月十三日松井興長は八代三萬石を領し、八代城主となりました。この時北の丸の泰勝院は、前年忠興が北の丸で逝去したため無住となつてゐましたので、この寺を荷澤山雲宗寺と改めて松井家の菩提寺とし、龍田口の春光院には留守居の僧を置きました。

延寶三年五月八代城下平河原町にある泰巖寺が火災にかゝりましたので、北の丸の宗雲寺を泰巖寺と改め、信長・藤孝・忠興等の靈牌を此所に移して菩提を弔ひ、龍田口の春光院を古麓に移すやうに、細川綱利から松井直之に命じました。

延寶五年十一月十八日諸堂落成し、寺號を江東山春光寺と言ひました。これが今日の春光寺でありまして、松井氏代々の墓は熊本春光院や悟眞寺から移し、綱利からは寺領百石並に寺後の江東山(山林)を寄附して、直之に祖先の祀をさせました。



春光寺

康之の神道碑

松井康之の遺骸は、もと豊後にあつたのを熊本に移し、更に宮地の悟眞寺の山中に葬つてありましたが、延寶六年六月春光寺に改葬し、營之の代になつて、康

寶物

形勝幽邃心を洗ふの所

春光院本殿

之のために墓前に神道碑を立てました。碑文は熊本の儒者藪孤山、書は當時の書家草野草雲の筆であります。

寺寶中明兆筆觀音像、古銅觀世音菩薩立像は、美術上すぐれた作といはれてゐます。

春光寺は右に鎭守稲荷神社を仰ぎ、後に江東山を負ひ、其の背後の新城、右手の丸山城址との間の谷の入口に當る平地にあり、吉野の朝廷の頃から由緒ある人の館があつた所ともいひ傳へてゐる形勝幽邃の地で、春の櫻秋の紅葉は谷をうづめてゐる老松や孟宗竹の綠に映えて殊に美しく、朝夕木魚の音とともに靜かにもれてくる讀經の聲は一しほ身にしみて、長く孝行を敎へてゐます。

第三十五　萩原堤の修築

一、寶暦の大洪水

寶暦五年の大洪水

九日間の長雨に瀬戸石山崩壞して川を塞ぐ

未曾有の奔流萩原堤防を缺壞して八代平野に汎濫す

毎年つゆの頃になると、どこの川も大水が出て水害に苦しんだのですが、球磨川でも大川だけに、昔から度々大水が出ました。中でも皆さんのお父さんから五六代も昔、寶暦五年の大洪水は一番おそろしいものでした。

五月の末になると、黑雲が南肥後一圓に低くたれこめて、何となく物すごい雲行でしたが、六月一日からとう〳〵大雨になつて、七日八日とこやみもなく降りつゞいて行きました。さあ大へん、球磨川は殊の外の大洪水です。九日になると、中流の瀨戸石山が突然萬雷のやうな響とともに、高さ三百間餘、幅百五十間ほど崩れ落ち、その勢で河水もろとも川向の山に打上げ、これまた高さ二百間幅百間ほど崩れおちて、川をふさいでしまひました。上流の水勢は忽ちせきとめられて、水かさは三四十間にも及び、兩岸の小山などは山上を水がうち越すほどゝなりました。瀨戸石附近の人々は山の上に逃げのぼつて、どうなることかと生きた心地もありません。

半時餘もたつたと思ふ頃、洪水はとう〳〵このふさぎを越したと見るまに、苦もなくこれを押流し、未曾有の奔流は、流域の堤防・人家・立木・田畑を押流しつゝ、まつしくらに萩原堤防にぶつかつたからたまりません。根張り四十間もあるといはれ堅固をほこつた堤防も、今の天滿宮附近を中心に悉く水に呑まれて餘すところなく、洪水は横手・松江・松崎の線を主流として、一眸平坦な八代平野に汎濫し、一瞬にして田畑人家を流してしまひました。

當時八代城内の人家も濁流が軒を洗ひ、人々は天井裏に避難するといふ有様でしたので、慘狀は想像以上でありました。國元留守居の役人からの注進によつて、八月五日附で幕府に申上げた御屆書の中から、損害の二三を書いてみても、如何に名狀すべからざる大天災であつたかゞわかります。

田	一四、一二八町
畑	七、六二五町（潮入、石砂入、洗剝、水浸）
高	二三〇、五六〇石
川塘	一三〇、二九三間
流れた家	二、一一八軒
溺死した人	五〇六人
怪我した人	五六人

今をさること三百二十年、肥後藩主加藤忠廣の時に、文武兼備の老臣功藤正方は、薩摩に備へるために球磨川を前にして大いに八代に築城し、更にこの城を水禍より防護するため、古麓の山ぎわから八代城西側の外郭に至る一里餘の長堤を築きましたが、この萩原堤は實に球磨川環流の最重要地點で、正方が心血を傾けての難工事であつたことは、昔からの語りつたへで人々のよく知つてゐるところでありました。そこで藩の老臣達は一刻も早く築きとめねばならぬと、毎日のやうに協議したのでしたが、今日正方程の人物がなく、この復舊は甚だ危ぶまれてゐました。

二、あのや稲津様は

その時郡目附役に、稲津彌右衛門頼勝といつて、正義の念に強い人がありましたが、この難局を見てはもうじつとしてゐることが出來ません。早速藩の役所へ進み出て、

「どうぞ私に萩原堤修築の役をお申しつけ下さい。」

とお願ひしました。そして

「正方とて、神様ではございますまい。」

と決心の色を顔に輝かして申しました。

彌右衛門は若いころ、貧乏な山本郡の役人になりましたが、惡い役人をしりぞけて勤儉をすゝめ、數年のあひだに郡をお金持にして、藩主のおほめにあづかつたほどの器量人でしたので、老臣たちはこの人ならばと、藩主重賢に申上げました。修築工事の命は直ちに彌右衛門に下りました。彌右衛門は天にものぼる喜びで任につきましたが、その胸には悲愴な決心を秘めてゐたのでした。